

## V 産業・経済編

### 第一章 産業の概況

#### 1、地勢概況

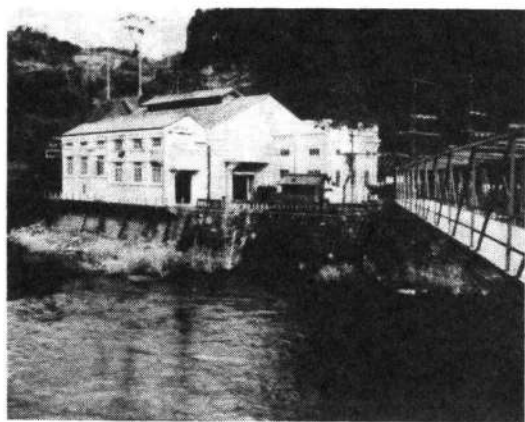
隼人町は東経一三〇度四〇分から四八分、北緯三一度四二分から五一分、鹿児島県のほぼ中央部に位置し、東は天降川を隔てて国分市に接し、北部は牧園町、霧島町、横川町と界し、西部は溝辺町、加治木町に連なり、南部は鹿児島湾に望み、辺田・弁天・沖小島の三島を有している。

#### 2、地形と標高

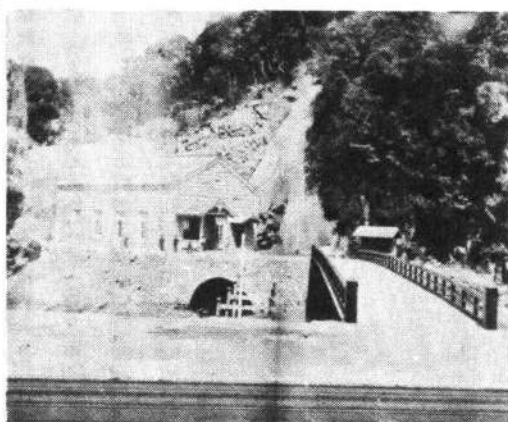
総面積六七七町で地形は南北に長く凡そ四里、東西は広狭があるが一里（四軒）から一・五里である。標高は霧島山系の台地である上場と呼ばれる地域が二七〇米から二八〇米で、隼人平野は二〇米から三〇米の間を示し、沿岸干拓地は二米から三米となっている。

#### 3、島嶼小島（神造島）の面積

辺田小島、一杯島、弁天島、沖小島から成っている。辺田小島 周囲一三町、高さ一二四・三米。一杯島 周囲二十間。弁天島 周囲四町。沖小島 周囲六町、高さ一〇〇米。



水天渕発電所（昭和59年撤去）



水天渕発電所（明治37年11月竣工）

#### 4、山岳台地の標高

- ① 辺田島 一二四・二米    ② 石塚原 一四六・五米    ③ 上野 二四三・〇米    ④ 真孝原 一六・〇米    ⑤ 鹿児島神宮 四〇・〇米
- ⑥ 獅子尾山 六〇・〇米    ⑦ 沖小島 一〇〇・〇米    ⑧ 富隈山 三・六二米    ⑨ 湯山 一〇〇・〇米    ⑩ 桜島 一一三三・五米
- ⑪ 韓国嶽 一六六九・九米    ⑫ 高千穂 一五七四・〇米    ⑬ 弓削 二八八・二米

#### 5、農耕地の形成区分

霧島山系十三塚原、上野原、小鹿野、春山原の台地に開発された畑地と山麓からひらけた水田地帯との間は傾斜をなし、帯状に森林地帯を形成している。嘉例川、中西光寺、小鹿野地区は山間・溪間に田畑が在り傾斜地が多い。西南部は十三塚原台地続きの上野台地から海岸にかけての緩傾斜地に田畑があるが水に恵まれていない。

#### 6、河川と集水面積

山岳地帯はなく、霧島山系に源を有する全長三〇軒の天降川は隼人町の東部よりを貫流し、嘉例川、霧島川、西光寺川の水系を併呑して、新川、住吉の間を流出して、鹿児島湾に流入している。

西部の小田、野久美田へ笛吹川、福の川が清水で鹿児島湾に流入し、浅瀬を形勢している。

これ等の河川の集水面積は凡そ嘉例川一六〇町、霧島川一、二〇〇町、西光寺川七〇〇町、新川一、九七七町、笛吹川八〇〇町、福の川五〇〇町である。



宮内原灌漑事業記念碑（内山田獅子之尾）

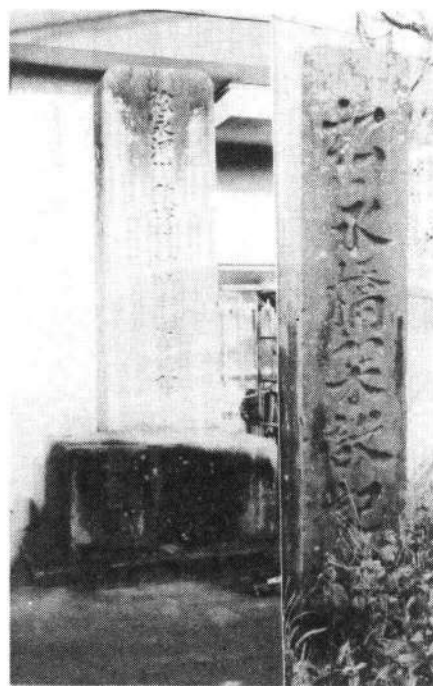
# 1、沿岸の状況

天降川水系の霧島川、西光寺川、嘉例川並びに笛吹川、福の川の浸蝕作用と流砂土の堆積による河口沿岸に干拓地が近世から造成され、近世・近代の主要産業である農業を発達せしめた。

また鹿児島湾の浜ノ市、小浜地域の沿岸は上古から近代に至るまで、沿海漁場と原始工業的製塩業を興し、交通運輸の発展段階に於ける自然の良港として発展した。鹿児島本線が現在の肥薩線コースであった頃は隼人駅が終着駅となり、浜

水源名	地区名	受益面積
嘉例川	餅田用水組合	二町
"	豆田用水組合	二町
"	前田用水組合	八町
"	二月田用水組合	七町
天降川	宮内原新田土地改良区	五六一町
霧島川	松永溝	一四六町
"	宇都溝	二〇町
天降川	吉沢市成新田土地改良区	六一町
西光寺川	西光寺	二六町

水 源 名	地 区 名	受 益 面 積
天 水 利 用	宇 都 山	一六町
星 貯 水 池	小 浜	三〇町
鳴 瀬 戸		三町
竿 ヶ 迫		三町
丸 岡	野 久 美 田	二五町
唐 仁		六町
尾 ヶ 藏		三町
朝 日	朝 日	八町



松永河川改修碑・松永橋架橋碑

ノ市經由で鹿児島とを結んでいた。

## 8、耕地（水田・畑地）

水田は嘉例川、霧島川、西光寺川の山狭を南に向って流出し、浸蝕による水田が開られ、これ等の河川が天降川本流として、この流域は隼人平野を形成し、沖積層の水田をなし、シラスを主体とする砂土、砂壤土から成っている。

畑は北部台地春山原、古道、十三塚原、上野原等に集団している外周囲の傾斜地と山麓に散在し、隼人平野に於ては真孝原、新川原（大野原）に集団している。

## 9、水系別水田面積概況

- |         |       |                    |       |                   |        |
|---------|-------|--------------------|-------|-------------------|--------|
| ① 金山川水系 | 三町歩   | ④ 西光寺川水系           | 一〇町歩  | ⑦ 野久美田川水系（石元川を含む） | 一八二町三反 |
| ② 霧島川水系 | 一六〇町歩 | ⑤ 天降川水系            | 五八〇町歩 | ⑧ 島津新田（灌漑）        | 六〇町歩   |
| ③ 嘉例川水系 | 四五町歩  | ⑥ 朝日、小浜湧水（貯水によるもの） |       |                   |        |

## 10、水源と用水組合と受益面積（前頁掲載）

## 11、農地の造成

国分平野の農地の造成は江戸時代の中葉頃、飛躍的に増大開発された。

寛文二年（一六六二）藩主島津光久の時、島津久通が総指揮で、大山広綱、岸良兼全が新川の改修を行った。これと関連して手籠川、郡田川を鼻面川で合流せしめ、さらに国分市向花の鏡橋から大津川原を開さくして、天降川に合流せしめ、



宮内原水路改修碑（内山田獅子之尾）

大津川原から隼人町住吉を貫流せしめる為水路を変更し、国分市府中野口の間から広瀬までの間の河川敷地と鼻面合流点から、国分駅一帯を水田化する総合開発事業を行ったことである。大山広綱、菱刈重敦と相談し、国分に田を開き、四年にして水路をうがち、これに灌漑して三九六ヘクタールの水田を造成した。

大津川改修工事に関連して、寛文年間に松永用水路が完成している。松永平隈の橋の傍に、宝暦十一年（一七六一）五月の水神碑と安政六年（一八五九）改修の碑の二基が現存している。

正徳元年（一七一）から享保元年（一七一六）の六年間に郡奉行汾陽盛常が私費を投じて、宮内原新田を開きくし四一二ヘクタールの水田灌漑に成功している。水天淵発電所附近の旧青龍社の青龍水神碑（享保三年建立）、獅子之尾山々頂の汾陽盛常翁頌徳碑（昭和十二年）、浜ノ市納屋の提防の草叢に、寛政七年（一七九五）に起工し、寛政十一年（一七九九）に完工した住吉新田の水神碑がある。それ等の石碑は詳細に当時の記録を物語っている。汾陽盛常が工事責任者であったことは勿論である。納屋の碑が住吉村、真孝村の庄屋・名主の記録があり、水天淵の青龍水神碑が工事責任者クラスの記述であることが対象的である。

弘化二年（一八四五）に島津斉興の時、調所広郷が鶴木政右エ門の進言によって、国分に新田造成の適格地がある事を知り、工匠阿蘇鉄矢を従えて実地踏査をし、一二〇ヘクタールの水田開発に成功している。この完工碑が国分市広瀬にある大穴持神社境内に現存している。

明治三十年には島津氏の計画によって島津新田六〇町歩が造成された。

宮内原新田、松永溝、国分市清水の平溝等は国分平野の農地造成の総合開発の一環として実施された。この大事業は国分地方の産業に大きく貢献している事は勿論である。

明治・大正期、熊本県の吉原某が新川河口右岸の干拓に着手し、災害のため工事を中断したが、のち国分市の市成直哉が引継いで、市成新田を完成した。

昭和になって町長福重半之助は政府に要請して、天降川河口左岸の住吉新田の外側に干拓を計画し、町長野辺辰雄の時代に約七十町歩の水田・畑地が造成された。

畑地の開墾は藩政時代から山麓を開き、明治初年に十三塚原一帯が南薩方面からの移住者によって開墾された。旧十三塚原飛行場の滑走路跡五七町、大野原海軍飛行場跡の開拓が行われ、農地の開発がなされている。以上の耕地が隼人町の主産業である農業

の基盤である。

## 12、田の神

- ① 浜ノ市真孝に明和七年（一七七〇）の田ノ神あり。
- ② 姫城新原に享保年間建立の田ノ神。田ノ神の上に梵字（薬師）あり。
- ③ 木房踏切南西二〇〇米位の田の中に木房一族の建立した田ノ神あり。
- ④ 寛延二年（一七四九）に国分市重久岩戸の本田某が抱地を開いた田ノ神あり。隼人町松永下平一帯、姫城の竿境一帯に本田トンのクボイ（墾田）と呼ばれる所がある。
- ⑤ 高畑から新溝一帯も天降川水系西光寺川を改修して、河川敷が水田化された。新溝下に田ノ神の碑は現存していないと古老は話している。
- ⑥ 天明元年（一七八一）九月、沢正納右エ門建立、鹿児島神宮田ノ神。昭和43・3・29、県指定。

## 13、土地利用面積の推移

隼人町合併後の昭和三十年の土地利用面積を見ると、水田九四五・八ヘクタール、畑地九〇〇ヘクタールである。

昭和三十五年以降水田に於ては一・〇八〇ヘクタール、昭和四十一年までには三〇ヘクタールの減少を示している。これは干拓地の利用がなかったことや宅地転用などが主な原因であろう。

畑地に於ては合併後、普通畑が減少し、樹園地が増加の傾向を示している。このことは普通作物の減退を示すと同時に柑橘や桑園、茶園等の換金作物への転換を物語っている。



田の神像（鹿児島神宮神田）

年 次 別 田 畑 面 積

(昭和2年～43年)

年 次	耕 地 計	田	畑	普 通 畑	樹 園 地
昭 和 2	町 1,124	町 565	町 559	町	町
23		521			
24	916	518	398.8	394	4.52
25	948.85	545	398.86		4.52
26	895	581	308	303.35	4.46
30	1,845.8	945.8	900		
35	ha 2,080	ha 1,080	ha 996	ha 968	ha 28
36	2,050	1,080	989	960	29
37	2,040	1,050	985	955	30
38	2,100	1,050	1,060	987	70
39	2,100	1,050	1,050	966	84
40	2,050	1,050	1,000	907	94
41	2,040	1,050	994	893	101
42	2,030	1,070	957	866	91
43	1,990	1,060	927	833	94

町 内 土 地 区 別 面 積 一 覧

(土地台帳に依る) (昭和25年度)

地 目	反	別	賃 貸 価 格	筆 数
田	町 673	反 畝 歩 8 6 19	円 136,103	15
畑	591	6 1 21	36,565	18
宅 地	117	6 9 22	65,097	52
山 林	457	2 7 14	3,174	40
原 野	31	6 2 26	124	51
池 沼	2	8 5 06		35
鉱 泉		1 00	1,535	00
そ の 他	20	6 1 08	22	78
免 租 地	292	3 5 06	0	
合 計	2,187	9 1 02	242,622	
				26,925

# 農家の利用種類別経営土地面積総括表

(昭25.2.1現在)

土地 種類別 耕地 区分	経営土地 総面積	山 林	農 用 地 面 積							
			農 用 地		其の他の土		耕 地 面 積			
			総面積		地の総面積		耕地総面積		田	樹園地
総数	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩
3反未満	235 4 9:20	26 4 3:24	209 0 5:26	31 5 2:28	177 5 2:28	109 4 7:07	3 2:07	67 7 3:14		
3反以上 5反未満	294 2 9:10	34 0 4:04	260 2 5:06	28 3 2:08	231 9 2:28	140 5 7:05	7 6:02	90 5 9:21		
5反以上 1町未満	577 5 0:06	130 5 9:00	446 9 1:06	35 7 0:00	411 2 1:06	230 8 4:06	2 2:3:05	178 1 3:25		
1町以上 1町5反未満	189 9 0:08	73 6 7:25	116 2 2:13	6 3 9:27	109 8 2:16	56 6 2:06	1 1 2:00	52 0 8:10		
1町5反以上 2町未満	15 6 1:18	2 8 2:28	12 7 8:20	9 1:11	11 8 7:09	5 2 7:02	6:05	6 5 4:02		
2町以上 3町未満	15 8 3:28	5 3 3:10	10 5 0:18	4 0 2:10	6 4 8:08	2 6 9:07	2:20	3 7 6:11		

# 農家利用種類別田圃面積

(昭25.2.1現在)

種類別 耕地区分	総面積	一毛作稲田	二毛作稲田	三毛作稲田	夏作に稲を作らず 畑作物を作った田	わさび、くわいは す等を作った田	休閑田又は 耕作放棄田
総数	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩	町反畝歩
3反未満	109 4 7:07	39 0 3:17	46 3 1:10	22 5 7:11	1 1:00	6:00	1 3 7:29
3反以上 5反未満	140 5 7:05	49 6 4:03	52 1 4:14	36 2 5:19	3 7:00		2 1 5:29
5反以上 1町未満	230 8 4:06	91 0 9:14	67 4 2:23	69 4 3:00	2 9:06		2 5 9:23
1町以上 1町5反未満	56 6 2:06	28 8 2:23	12 3 5:29	15 1 4:19			2 8:25
1町5反以上 2町未満	5 2 7:02	3 4 6:02	6 3:19	1 1 7:11			
2町以上 3町未満	2 6 9:07	1 4 7:00	1 3:07	1 0 9:00			

# 主要農作物収穫面積

(昭25.2.1現在)

種類別 耕地区分	水 稲		陸 稲		大 麦		裸 麦		小 麦		燕 麦	
	農家数		農家数		農家数		農家数		農家数		農家数	
	戸	町反畝歩	戸	町反畝歩	戸	町反畝歩	戸	町反畝歩	戸	町反畝歩	戸	町反畝歩
総数	2433	539 6 9:00	766	53 2 3:27	247	15 3 1:25	2240	296 8 6:16	2272	260 9 6:11	274	13 0 4:07
3反未満	1023	108 0 5:06	81	6 1 0:00	37	1 4 3:10	845	69 4 2:03	866	43 8 8:27	9	1 8:05
3反以上 5反未満	655	137 9 6:12	363	12 2 4:27	49	2 8 9:02	636	75 1 6:00	638	64 2 1:03	44	1 3 0:04
5反以上 1町未満	647	230 3 9:08	246	17 0 4:15	120	7 2 5:28	650	121 6 5:25	657	120 7 1:28	154	6 8 0:28
1町以上 1町5反未満	95	55 8 4:14	68	16 0 5:15	35	3 1 0:15	96	27 6 5:28	98	28 2 8:23	58	3 8 4:00
1町5反以上 2町未満	8	5 2 6:22	5	1 1 4:00	4	3 5:00	8	1 8 5:20	8	2 1 6:20	7	5 8:00
2町以上 3町未満	5	2 1 6:28	3	6 5:00	2	2 8:00	5	1 1 1:00	5	1 6 9:00	2	3 3:00

# 地区別耕地面積

(昭26.2.1調査に依る)

種別 部落名	田			畑			果樹園茶園地			計			農家戸数	1戸当平均反別			農家人口
	町	反	畝	町	反	畝	町	反	畝	町	反	畝		町	反	畝	
真孝	41	8	1	23	7	4			2	65	5	7	211				1,092
浜之	56	6	3	30	8	9			1	87	5	3	264				1,521
住吉	77	7	8	45	0	2				122	8	3	236				1,364
新川	10	5	4	3	0	7			0	13	6	1	85				409
川尻	30	8	9	16	2	4			0	47	1	3	108				618
見次	39	3	7	17	2	9			7	57	4	4	187				977
内	58	6	7	49	9	9			2	108	9	2	310				1,511
朝日	8	5	7	4	3	7	1		8	14	8	3	36				207
内山	74	7	8	21	3	0			1	96	2	7	307				1,498
小田	89	8	3	34	6	6			5	125	0	8	337				1,748
野久美	33	4	7	17	9	3			5	51	9	0	132				694
小浜	59	4	0	44	3	1			1	103	9	0	365				1,902
計	581	7	4	308	8	1	4		6	895	0	1	2,578				13,541

# 利用形態別農地面積

(昭和35年農業センサス) 単位ヘクタール

田	普通 畑	樹園地			耕 地 計	採 草 放 牧 地	合 計	一 戸 当 り 農 用 地	一 戸 当 り の 耕 地
		桑 園	茶 園	果 樹 園					
944	832	3	12	4	1,795	37	1,832	4.9	4.3

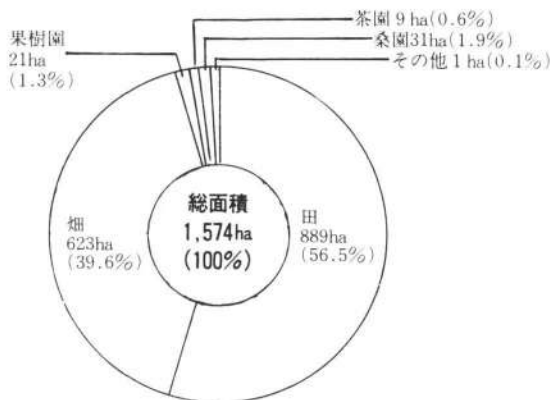
# 経営耕地面積別農家数

(昭和43年度)

耕地面積	30 a 未満	30～ 50 a	50～ 70 a	70～ 1 ha	1～ 1.5ha	1.5～ 2 ha	2～ 2.5ha	2.5～ 3 ha	3～ 5 ha	5 ha 以上	例外規 定農家	総 数
農 家 数	1,747	873	524	338	193	82	22	9	7	0	3	3,798
構成比(%)	46.8	23.4	14.0	9.1	4.4	1.5	0.6	0.1	0	0	0.1	100

# 経営土地別面積(昭和43年度)

土 地	
地目別面積 (km <sup>2</sup> )	
区 分	面 積
田	9.18
畑	8.55
宅 地	2.99
山 林	30.93
原 野	7.00
そ の 他	9.12
計	67.77



# 経営耕地面積別農家数

(昭和35年農業センサス)

耕地面積	3 a 未満	3a~5a 未満	5 a ~ 7 a	7 a ~ 1 ha	1 ha ~ 1.5ha	1.5ha ~ 2 ha	2 ha ~ 2.5ha	2.5ha ~ 3 ha	3 ha ~ 5 ha	計
農家数	1,863	978	561	408	188	77	24	7	5	4,124
構成比	% 45.02	23.72	13.64	9.90	4.57	1.85	0.59	0.18	0.12	100%

## 主要作物の生産額

(昭和42年度)

種 目	作付面積 (ha)	10 a 当 収量(kg)	生産量 (t)	生産額 (千円)	生産額の 比率(%)
水 稲	955	400	3,820	480,720	62.6
麦 類	433	170	740	38,260	5.0
かんしょ	350	2,200	7,700	77,000	10.0
なたね	100	120	120	6,000	0.8
やさい	66	4,145	495	23,670	3.1
果 樹	59	600	345	24,150	3.1
飼料作物	59	3,550	2,365	12,200	1.6
たばこ	58	269	156	89,760	11.7
陸 稲	50	180	90	10,800	1.4
緑 茶	37	220	81	4,070	0.6
雑 穀	32	100	36	1,800	0.1

## 14、農業慣行

### ① 水利慣行

本町の用路は藩政時代に於て、全長一〇軒に渉る工事を完成したことから、共同作業で用排水路の補修をする慣習がある。揚水・落水の際は役員・水守・農業関係団体長等が水神祭を行つて灌漑・排水等の無事を祈願する。

## 15、作物栽培の慣行

### ① 地 火

地火の日には作物の種蒔、苗などを植付けしない慣習がある。また種子物は少量でも無料で貰わない風習がある。無料で与えた方が種子が絶えると言う。肥料は窒素肥料を使わず、加里肥料の使用が少ない。

### ② 山林慣行

境界線に金竹を植えて標識とする。田植上り(七・八月)と秋に下払いをする。正月二日には二日山といつて山へ出掛け、正月、五月、九月には、山ノ神を祭る。

### ③ 原野慣行

原野は共同で野焼きをする。採草、薪取りを禁ずる意味で棒を立て、その棒の先端を藁で結んで×の印をする。草刈りは特定の場所以外は他人の山野の草を刈つてもとがめだてしない。

### ④ 農業労働関係

農繁期は結で労働力を対等に交換することが原則とされる。労働力貸借の觀念が根底にある。ゆい交換の単位は親族・地縁団体

である。耕作面積の多い所では年間常雇いをするが、近年住込みも通いも稀である。

一般に田畑は牛馬耕の慣習があったが、動力耕耘機の導入によって賃耕が行われている。

#### ⑤ 農道補修

主として部落別に農繁期前に補修をする。また区域利用者のみで補修することもあったが、近年衰退しつつある。

### 16、産業人口の動向

#### ① 大正より昭和初年まで

明治以前の隼人町の産業は殆んどが農業で、商工業等は兼業であった。明治十年の丁丑戦役以後になると農村へも文明開化の波が、僅かながら流入してきたが、農業部門以外は発達しなかった。

日清・日露両戦役に勝利を得た日本は漸く商工業が進み、隼人町に於ても県道の開通、鉄道の開通によって諸産業が進展した。

肥薩線（明治42年11月21日、八代——鹿児島間が開通、現在の肥薩線經由で門司——鹿児島間全通、昭和2年10月17日、八代——鹿児島間、水俣、川内經由で開通、現在の鹿児島本線となる）開通を皮切りに鹿児島の鉄道網は急ピッチで県下に伸びて行った。

鹿児島から国分（現在の隼人駅）開通直後、明治三十五年二月の時刻表によると、上下四本。上り一番列車は午前七時半鹿児島発、国分着は同八時四〇分、つまり所要時間一時間一五分、現在始発の吉松行き普通列車午前五時五十六分鹿児島発、隼人駅は同六時三十三分、所要時間三七分、半分以上に短縮されたことになる。明治四四年九月の時刻表になると、本数がふえて七本。門司行き三本、人吉行き一本、高瀬行き一本、吉松行き一本、国分行き一本である。うち長距離の門司行きを除いても貨客混合列車である。

門司行きのうち一本は急行で鹿児島を午前八時半に発車して熊本に午後四時一〇分に着く。所要時間六時間四〇分。これを現在の急行（熊本行き・やたけ）にくらべると二時間四十分遅い。

料金の方は一部開通当時、三等で鹿児島から重富まで十三銭、加治木まで二十銭、国分まで二十六銭。全線開通のころはこれが平均二銭ずつ値上がりした。東京まで七円八十六銭（二等・十一円七十九銭）である。

当時の客車は座席ごとにドアがあり、ゴザが敷いてあった。夜になると車掌がてんじょうのランプに火を入れる。子どもたちは

隼人町産業別人口

(大正9年・昭和5年)

産業別		大 正 9 年(1,920)			昭 和 5 年(1,930)		
		人 口	就業人口	世帯数	人 口	就業人口	世帯数
第一次産業	農 業	12,502	7,894	1,742	13,182	5,952	1,968
	林業・狩猟業	163	74	43	157	39	37
	漁業・水産業	414	349	312	364	96	82
	計	13,079	8,317	2,097	13,703	6,087	2,087
第二次産業	鉱 業	8	3	2	6	1	1
	建 設 業	226	175	43	422	156	136
	製 造 業	733	730	342	1,409	677	317
	計	1,167	903	387	1,835	831	454
第三次産業	卸売・販売業	713	596	113	1,311	706	506
	金融保険業・不動産業	63	42	12	73	39	37
	運輸・通信公益事業	462	336	71	362	239	68
	サービス業	627	429	318	262	177	154
	公 務 員	319	232	62	523	298	137
	分類不可能	223	113	51	35	9	6
	計	2,407	1,748	627	2,566	1,468	908
総 計		16,653	10,973	3,111	18,104	8,386	3,449

毎日汽車の通過するところを見はからって、屋根や木に登り、胸をわくわくさせながら待った。

汽車の通過することで、耕地がつぶれる。馬が汽笛に驚く、ニワトリがタマゴを生まなくなる、はてはイネがびっくりして実入りが悪くなる、という理由までつけて鉄道に反対した。(鹿児島百年、国分郷土誌)

鉄道唱歌「九州線」の中から肥薩沿線のくだりに、国分を越えて牧園は 霧島山の登り口 栗野を左手に分かるるは 黄金を運ぶ山野線

大正三年(一九一四)第一次大戦が始まる年は桜島の爆発と経済不況であったが、戦争が始まると景気も好調となり、大正七、八年頃は好景気であった。この好景気は農村部へも徐々に波及していった。都市工業地帯への就業者が増加し、農村人口も次第に流出をはじめた。昭和六年(一九三一)満州事変が起ると、満州・朝鮮への就職者がふえ、昭和十二年(一九三七)日華事変が起ると中国大陸への就職者、応召等で、農村人口の流出は増大した。

昭和十六年太平洋戦争に突入すると、流出は一層増大の傾向となり、昭和二十年(一九四五)第二次世界大戦敗戦後応召・徴用者の復員、外地居留者の引揚げ、空襲を回避して農村に疎開した人人で町内の人口は膨張したが、戦後の混乱から立ち直り、都市の復興が進むと再度人口は流出して行った。

② 大正中期より昭和初年

大正中期より昭和初めまでの産業別人口を大正九年と昭和五年の図表で比較してみると、第一次産業である農林水産業の人口が最大で第三次、第二次産業の順である。第一次七九%、第三次一四%、第二次七%である。昭和五年は第一次七六%、第三次一四%、第二次一〇%となっている。

就業人口では軒並みにダウンしている。一次・二次・三次と減になり、卸売・販売業、公務員の就業人口が増大している。経済の発展と

# 産業別人口

(昭和25.10.1調)

	総数	男	女	就業者の率 %		
				総数	男	女
総数	9,337	5,429	3,908	100	58.28	41.72
農業	5,905	3,005	2,900	63.29	32.19	31.10
林業	34	34	0	0.37	0.37	0
水産業	148	140	8	1.59	1.50	0.09
鉱業	6	6	0	0.07	0.07	0
建設工業	411	391	20	4.42	4.20	0.22
製造工業	694	494	200	7.35	5.21	2.14
電気及水道業	26	26	0	0.28	0.28	0
商業	737	417	320	7.93	4.50	3.43
金融業	60	40	20	0.65	0.43	0.23
運輸通信業	366	351	15	3.96	3.80	0.16
サービス業	245	30	215	2.43	0.33	2.10
自由業	257	220	37	2.80	2.40	0.40
公務及団体	325	220	105	3.53	2.40	1.13
その他の産業	123	55	68	1.33	0.60	0.73

地方自治体のマンモス化が推測できる。  
昭和三十年、昭和三十五年、昭和四十年とを  
図表で比較してみると、農業就業人口の激減が  
明白である。とくにその減が第二次、第三次産  
業の増となっている。第二次、第三次産業就業  
人口の増と対照的に、農業人口が三〇〇〇人の  
減となっている。十年間に都市へ流出し、転職  
し、農業より一時離れたことになる。

## 産業別字別人口

(昭和25.10.1調)

種別 字名	産業別 人口総数	農業	林業	水産業	鉱業	建設 工業	製造 工業	ガス・電 気水道業	商業	金融 業	運輸 通信業	サービ ス業	自由 業	公務 及団体	その他	%
真孝	708	387	2	1		30	120	3	67	14	21	6	35	17	5	7.6
浜之市	1,226	491	3	127		45	118	5	214	14	46	55	26	40	41	13.1
住吉	1,284	926	4	5	4	55	65	2	71	9	42	12	31	44	14	13.8
見次	809	398	2	1		44	98	5	89	8	76	28	22	20	12	8.7
内	1,182	601	3	1		91	102	3	84	7	61	109	50	47	23	12.1
内山田	1,031	582	3		1	69	93	2	107	4	44	26	39	46	15	11.0
朝日	145	134									3		2	6		1.5
小田	1,086	876	13	1		21	41	1	34	1	33	4	19	38	4	11.6
野久美田	415	348	1	12		20	6	1	13	1	3	1	8	13		4.4
小浜	1,451	1,162	3	12	1	36	51	4	58	1	37	4	19	54	9	15.6
計	9,337	5,905	34	148	6	411	694	26	737	60	366	245	257	325	60	100%
%	100%	63.2%	0.4%	1.6%	0.1%	4.4%	7.4%	0.3%	7.9%	0.6%	3.9%	2.6%	2.8%	3.5%	0.6%	

## 産業別の就業者数

(国勢調査から)

産業分類	昭和30年		昭和35年		昭和40年	
	就業者数	構成比	就業者数	構成比	就業者数	構成比
第1次産業	(8,779)人	(65.1)%	(7,644)人	(60.9)%	(5,679)人	(51.9)%
農業	8,602	63.7	7,552人	60.1	5,593	51.1
林業・狩猟業	51	0.4	55	0.5	17	0.1
漁業・水産業	126	0.9	37	0.3	69	0.7
第2次産業	(1,093)	(8.1)	(1,173)	(9.3)	(1,455)	(13.3)
鉱業	19	0.1	71	0.6	65	0.6
建設業	424	3.1	651	5.1	761	6.9
製造業	650	4.9	451	3.6	629	5.8
第3次産業	(3,623)	(26.8)	(3,752)	(29.8)	(3,802)	(34.7)
卸売・小売業	1,357	10.0	1,474	11.7	1,308	11.8
金融・保険業	159	1.2	110	0.9	115	1.1
運輸・通信業	470	3.5	404	3.2	578	5.2
電気・ガス・水道業	58	0.4	64	0.5	1,358	12.4
サービス業	1,171	8.6	1,338	10.7	427	3.9
公務	408	3.0	362	2.8	16	0.3
総数	13,495	100.0	12,569	100.0	10,936	100.0

③ 昭和二十五年・昭和二十六年の産業状況

昭和 25 年 産 業 状 況

区 分	生 産 額	総生産額に占める割合
	万円	%
総 額	15,278	100
農 産 産	14,998	98.16
水 産 産	100	0.65
畜 産 産	130	0.85
林 産 産	50	0.34
工 業 産	—	—
鉱 産 産	—	—

昭和 26 年 産 業 状 況

区 分	生 産 額	総生産額に占める割合
	万円	%
総 額	15,300	100
農 産 産	15,000	98.03
水 産 産	100	0.65
畜 産 産	150	0.98
林 産 産	50	0.34
工 業 産	—	—
鉱 産 産	—	—

④ 昭和三十六年八月一日現在の隼人町産業状況

(イ)人口 三六、〇一四人(男一二、一〇六人、女一三、九〇八人)  
(国勢調査によると二六、六五七人である)

(ロ)面積 六七二四平方糎

(ハ)耕地面積 一、七九四ha(田九八五ha、畑八〇九ha、農家一戸平均四・三ha)

(ニ)林野面積 三、七四五ha(町有林五ha、国有林〇、民有林三、〇四

四〇ha、原野七〇〇ha)

(ホ)宅地面積 二二二一ha、

(ヘ)その他 九五三ha、

(ト)農 業 四、一二四(森林所有農家一、五三五、有畜農家三、三六〇、養蚕農家四三)

(チ)商 業 六七五戸(製造業三〇一人、サービス自由業九九五人、公務および団体二八二人、水産業 五一人、林業 四八)

(リ)食糧作物 水稻九八五ha、陸稻一七五ha、甘藷 二八〇ha、麦 一、〇三六ha、その他雑穀 二七二ha、計 二、七四八ha、

生産額 三四、六五〇万円、

(ヌ)そ菜園芸 大根 六九ha、かんらん 一五ha、白菜 一五ha、馬鈴薯 六〇ha、その他 一〇ha、計 一六九ha、

生産額 二四五〇万円、

(ル)果樹園芸 温州密柑 九ha、桃 二ha、生産額 三四三万円、

(オ)特用作物 たばこ 六二ha、茶園 四九ha、桑園 八ha、

(ワ)工芸作物 一二〇ha、菜種 二五〇ha、生産額 一一、九八〇万円

(カ)畜 産 和牛 一、一六〇頭、乳牛 五三頭、馬 六七〇頭、豚 二、一〇〇頭、山羊 四〇〇頭、鶏 三三、〇〇〇羽、

仔生産(和牛 三二〇頭、鶏卵出荷 二二五、〇〇〇個) 生産額 八、〇〇〇万円、

(コ)林 業 用材 七二、〇〇〇石、薪炭材 三五〇、〇〇〇束、木炭 三、〇〇〇俵、

(ク) 水 産 漁船数 六五隻(動力船 三七隻、無動力船 二八隻) 八田網 八統、いか曳網 五統、手繰網 五統、地引網

三統、水産高 一、一二五屯、生産額 三、〇〇〇万円、

(レ) 一戸当り生産額並びに販売額

農産物 七六、三〇〇円、畜産物 一二、三〇〇円、林産 一八、五〇〇円、水産物 四、六〇〇円、総生産額 七二、四二  
三円、総販売額 四五、三〇〇万円(一戸当り七万円)

⑤ 昭和三十七年の産業状況

昭和三十七年度における隼人町の産業構成を見ると、次の通りである。(県町村要覧)

(イ) 産業別戸数

○農 業 四、一二四戸(森林所有農家 三〇一戸、有畜農家 三、三六〇戸、水産業 五一戸、林業 四八戸、養蚕農家 四  
三戸) 商業 六七五戸、製造工業 三〇一戸、サービス自由業 九九五戸(公務および団体 二八二)

(ロ) 産物と作付面積並びに生産額

○食糧作物 水稻 九八五ha、陸稲 一七五ha、甘藷 二八〇ha、麦 一、〇三六ha、その他の雑穀 二七二ha、計 二七四八  
ha、生産額 三四、六五〇万円、

(ハ) そ菜園芸 大根 六九ha、かんらん 一五ha、白菜 一五ha、馬鈴薯 六〇ha、その他 一〇ha、計 一六九ha、生産額 二  
四五〇万円、

(ニ) 果樹園芸 温州 九ha、桃 二ha、計 一一ha、生産額 三四三万円、

大正10年当時、朝日地区で蜜柑団地経営に転換した松脇熊右衛門、園畑嘉納次、つづいて今神銀太郎等先駆者である。また小浜  
石原地区蜜柑団地(昭和54、57年度事業)も、成果をあげている。

(ホ) 特用作物 たばこ 六二ha、茶園 四九ha、桑園 八ha、工芸作物 一二〇ha、菜種 二五〇ha、計 四八九ha、生産額  
一一、九八〇万円

(ヘ) 畜産 和牛 一、一六〇頭、乳牛 五三頭、馬 六七〇頭、豚 六、一〇〇頭、山羊 四〇〇頭、鶏 三二、〇〇〇羽、仔生  
産(和牛 三二〇頭、鶏卵出荷量 三二五、〇〇〇個) 生産額 八、〇〇〇万円、

隼人町春山総合畜産団地（含養鶏・養豚・肉牛各団地）が昭和52年8月、また隼人町農協小牧肥育牛センター（昭和46年11月）も顕著な成績を収めている。

(ト) 林産物 用材 七二、〇〇〇石、薪炭材 三五〇、〇〇〇束、

木炭 三、〇〇〇俵、

(チ) 水産物 漁船数 六五隻（動力船 三七隻、無動力船 二八隻）

網 類 八田網 八統、いか曳網 五統、手繰網 五統、地曳網 三統、水揚高 一、一二五屯、生産額 三、〇〇〇万円、

(リ) 浜之市港移出価額、三一五三四円、移入価額一〇五〇三一円、合計四二〇二六五円、隼人町船舶数、動力（一八）、不動力（一四〇）、（昭和14年度）

一戸当り平均生産額

農産物 七六、三〇〇円、畜産物 一二、三〇〇円、林産

一八、五〇〇円、水産物 四、六〇〇円、総生産額 七二、

四二三万円、一戸当り 一一一、八〇〇円、総販売額 四五、

三〇〇万円（一戸平均 七万円）

⑥ 昭和四十年農業センサスによる利用形態別農地面積

(イ) 田 八九二ha、普通畑 五九八ha、樹園地 六三ha、採草放

牧地 五一ha、計 一、五八四ha、農用地一戸当り 四・三

ha、耕地一戸当り 四・二ha

# 米・麦・甘藷・反当収量調

(昭26, 12, 30調)

種別	年次	昭和20年	昭和21年	昭和22年	昭和23年	昭和24年	昭和25年	昭和26年
米	石	2	1.95	1.98	1.97	2	1.99	1.10
麦	石	0.98	1	1.04	1.06	1.06	1.09	1.14
甘 藷	貫	380	380	380	400	360	370	340

# 地 区 別 反 収 調

(昭26, 12, 30調)

種 別	年 次	真 孝	住 吉	見 次	内	内山田	朝 日	小 田	野久美田	小 浜
麦	昭和24年	石 1.94	石 2.15	石 2.30	石 2.15	石 2.23	石 2.07	石 2.20	石 2.10	石 1.85
	" 25年	2.00	2.18	2.25	2.20	2.23	2.05	2.20	2.10	2.05
	" 26年	0.70	0.98	1.46	1.43	1.45	1.33	1.43	1.36	1.33
麦	田	" 24年	1.17	1.17	1.27	1.11	1.56	0.96	1.18	1.17
		" 25年	1.10	1.13	1.25	1.22	1.25	1.21	1.25	1.21
		" 26年	1.20	1.15	1.28	1.23	1.26	1.21	1.25	1.22
	畑	" 24年	0.75	0.75	0.76	0.77	0.70	0.63	0.75	0.74
		" 25年	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80
		" 26年	0.80	0.78	0.70	0.80	0.80	0.85	0.90	0.80
甘 藷	" 24年	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360	貫 360
	" 25年	378	378	378	378	378	378	378	378	378
	" 26年	340	340	340	340	340	340	340	340	340

(ロ) 地目別面積（昭和四十年四月一日現在）（単位 平方軒）

田 九・四四、畑 八・三二、宅地 二・三二、山林 三〇・九三、原野 四・六三、その他 七・八五、公共用地 一・五二、計 六五・一、水面 二・二二、計 六七・二五

⑦ 昭和四十年作目別面積、数量、生産額

(イ) 食糧作物 水稻 九八五ha、陸稻 一七五ha、甘藷 二八〇ha、麦 一、〇三六ha、その他雑穀 二七二ha、計 二、七四八ha、生産額 三四、六五〇万円、

(ロ) そ菜園芸 大根 六九ha、かんらん 一五ha、白菜 一五ha、馬鈴薯 六〇ha、その他 一〇ha、計 一六九ha、生産額 二四五〇万円、

(ハ) 果樹園芸 温州みかん 九ha、桃 二ha、生産額 三四三万円、

(ニ) 特用作物 たばこ 六二ha、茶園 四九ha、桑園 八ha、工芸作物 一二〇ha、菜種 二五〇ha、計 四八九ha、生産額 一、九八〇万円、

(ホ) 畜 産 和牛 一、一六〇頭、乳牛 五三頭、馬 六七〇頭、豚 二、一〇〇頭、山羊 四〇〇頭、鶏 三二、〇〇〇期、仔生産（和牛 三二〇頭、鶏卵出荷 二二五、〇〇〇個、生産額 八、〇〇〇万円、

(ヘ) 林 産 用材 七二、〇〇〇石、薪炭材 三五〇、〇〇〇束、木炭 三、〇〇〇俵、

(ト) 水 産 漁船数 六五隻（動力船 三七隻、無動力船 二八隻） 網類 八田網 八統、いか曳網 五統、手繰網 五統、地引網 三統、水揚高 一、一二五屯、生産額 三、〇〇〇万円、

(チ) 一戸当り生産額並びに販売額

農産物 七六、三〇〇円、畜産物 一二、三〇〇円、林産 一八、五〇〇円、水産物 四、六〇〇円、総生産額 七二、四二三万円、一戸当り 一一一、八〇〇円、総販売額 四五、三〇〇万円（一戸当り七万円）

⑧ 昭和二十九年合併当時の隼人町・日当山町の主要農産物作付けと収穫高

農産物主要作物の作物の作付面積と収穫量は次の表によって知ることができる。

隼人町・日当山町ともに米（水稻・陸稻）が第一位を占め、次に麦類である。大豆・甘藷・菜種子の順であるが、日当山町が畑

隼人町農産物生産量及び金額

部門別	生産物名	総生産量	総金額
		kg	円
耕	早期水稲	150,000	10,000,000
	普通水稲	2,815,200	181,000,000
	二期水稲	21,600	144,000
	早期陸稲	156,750	10,450,000
	普通陸稲	151,800	10,120,000
	大麦	4,500	150,000
	ビール麦	1,500	50,000
	小麦	618,000	20,600,000
	裸麦	581,250	19,375,000
	なたね	581,400	27,907,200
	標草	175,100	56,557,300
	甘藷	5,253,750	45,025,000
	馬鈴薯	540,400	5,764,000
	粟・そば	127,500	4,250,000
	きび	1,500	70,000
	大豆	354,000	16,520,000
	小豆	22,950	1,530,000
	えん豆	1,500	78,000
	そら豆	750	30,000
	いんげん	1,000	60,000
	落花生	1,500	105,000
	大根	3,514,750	18,740,000
	かんらん	910,000	960,000
	白菜	807,500	1,252,000
	玉ねぎ	153,750	1,640,000
	里芋	150,000	2,000,000
	きゅうり	37,500	40,000
	南瓜	91,875	980,000
	人参	56,240	1,200,000
	ほうれん草	78,750	3,500,000
	茄子	315,000	3,360,000
	トマト	150,000	1,600,000
	ごぼう	157,500	5,040,000
種	(緑肥作物)		
	れんげ	3,807,000	30,600,000
	青刈大豆	2,538,000	20,304,000
	ルービン	45,000	360,000
	(飼料作物)		
	れんげ	669,018	5,353,440
	とうもろこし	1,500	12,000
	その他	36,750	294,000
	(果樹)		
	みかん	28,110	1,054,400
	夏かん	4,685	249,600
	雑かん	9,370	187,800
	日本なし	1,875	90,000
	うめ	1,875	1,000,000
	かも	4,685	125,000
	茶	1,875	80,000
	茶	374,300	4,994,800
	種苗	1,500,000	3,000,000
	計	—	524,480,540

(昭和33年度)

主要作物作付生産額 (昭和29年)

隼人町				
		作付・収穫面積		反収と実収高
作目	作付面積	収穫面積	反収	収穫量
水稲	628.0	627.9	2,050	12,869
陸稲	59.8	59.8	0.490	293
小麦	676.3	276.3	1.211	3,346
裸麦	330.5	330.5	1.123	3,713
大麦	7.0	7.0	1.752	17
甘藷				
春馬鈴薯	21.4	21.4	281.0	60
大豆	158.6	158.6	0.775	1,229
あわ	111.0	111.0	0.311	345
そば	20.1	20.1	0.199	40
菜種子	41.9	41.9	0.815	341
日当山町				
水稲	339.3	339.2	1,968	6,675
陸稲	130.0	130.0	0.498	648
小麦	162.4	162.4	1.023	1,661
裸麦	295.6	295.6	0.959	2,836
大麦	10.0	10.0	1.592	159
甘藷	324.2	324.2	427	1,383
春馬鈴薯	15.1	15.1	276	42
大豆	206.1	206.1	758	1,563
あわ	185.5	185.5	0.320	594
そば	67.2	67.2	0.286	192
菜種子	182.7	182.7	0.814	1,487

水稲から大豆までの主要品目について、別に抽出したもので、甘藷、雑穀等については、合併町としての面積・収量である。水稲作付面積は両町ともに、昭和二十九年比較して差異はないが、陸稲においては作付面積が増加し、旧日当山町では作付が減

作においては隼人町を凌駕している。昭和三十三年の農産物生産量と金額を見ると、米・麦・甘藷・たばこ・菜種子等が有力作物である。大根・大豆なども生産額から見のがすことのできない作物である。

⑨ 昭和三十年隼人町旧日当山町の主要農産物と収穫高

左の表は合併の翌年の昭和三十年の隼人町の主要作物の作付、収穫面積、反当収量、実収高推定であるが、旧日当山については、

少している。小麦においては隼人町が増加し、旧日当山町は減少している。裸麦は隼人町・旧日当山町ともに作付が減少している。大麦は僅かではあるが、隼人は増反となり、日当山は減反している。麦類の増減は外国産麦の輸入や国内需要の動向によって増減があり、甘藷等の増減も輸入澱粉や畜産飼料としての需給によって大きく左右される傾向が見える。いわゆる貿易の自由化の影響が国内産業に直接影響してることが理解される

# ⑩ 昭和三十三年の農業生産物の生産量と金額

合併後五年目の昭和三十三年の農産物の生産量と生産金額を見ると、米・麦・甘藷・たばこ・菜種子等が有力な作物である。大根・大豆等も生産額から見逃すことのできない作物である。穀類の王座は米で、小麦・裸麦も主要作物である。近年麦類の作付が低調となる傾向がある。

## ⑪ 農業粗生産額（昭和三十五年より昭和四十二年まで）

次の表は隼人町の昭和三十五年から昭和四十二年までの農業粗生産額の概況であるが、昭和三十五年度は麦、雑穀、豆、いも類は一本で計上、昭和三十六年度は麦と雑穀、豆類と芋類の分類で表示し、他年次は耕種別に表示したものである。

年次別に見ると昭和二十五年粗生産額の合計は六億一千六百万円で、八年後の昭和四十二年度においては十一億八千二百万円と二倍近くの粗生産額となっている。

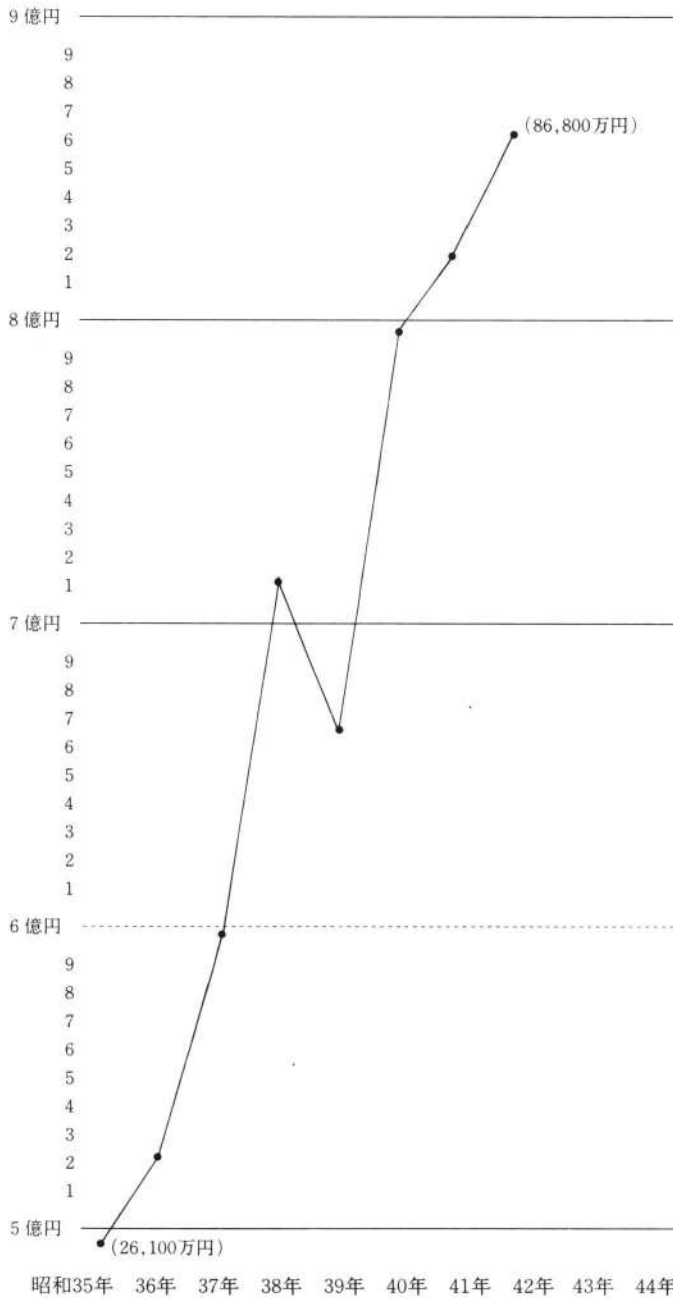
耕種別、養蚕、畜産、加工、工芸作物について見ると、米の生産額が一位を示め、次に畜産、芋類、野菜、工芸作物等が優位を示している。現時点においては米の生産額が他作目と比し、大きな数字となって表われている。

政府は膨大な古々米のストックと累積する食管会計の赤字対策として、休耕地の制度を実施し、昭和四十六年度から生産調整

主要作物面積と収穫高（昭和30年）

旧 隼 人 町					
		作付・収穫面積		反収と実収高	
作 目		作付面積	収穫面積	反 収	収穫量
水 稲	町	6,267	町	石	石
陸 稲	84.1		6,267	2,358	14,776
小 麦	3,147		84.1	0.970	816
裸 麦	3,086		3,147	1,025	3,257
大 麦	8		3,086	1,071	3,304
甘 藷	3,673		8	1.625	13
春馬鈴薯	340		3,673	543	1,995
大 豆	3,208		340	285	97
あ わ ば	2,637			0.86	2,759
菜 種 子	61.3		2,637	0.599	1,580
	2,818		61.3	0.415	260
			田 382反 畑 2436 "	1,043	2,940
旧 日 当 山 町					
水 稲	町	町	石 円	石	
陸 稲	3,393	3,393	2,241	7,603	
小 麦	1,053	1,053	1,040	1,095	
裸 麦	1,472	1,472	0.874	1,287	
大 麦	2,576	2,576	0.930	2,395	
	71	71	1,465	104	
備考、旧隼人町の水稲～麦類までは旧町別であり甘藷以下は旧隼人町・旧日当山町合計の数字で示してある。					

昭和35～42年農産物粗生産額総計



耕 種
米 麦
雑 穀
芋 類
野 菜
果 樹
花 卉
工 芸
作 物
種 苗木

年	単 位
35	261
36	522
37	598
38	713
39	663
40	794
41	820
42	868

(休耕田一六〇町歩)と買い入れ制限とを平行して実施した。脚光を浴びた米作も、漸くかげりが出てきた。

延暦十九年（八〇〇）大隅薩摩両国の百姓に墾田を収め口分田を授く。  
万寿三年（一〇二六）平季基島津荘開発。

① 土地制度変遷年表

17、土地制度

隼人町耕作別生産額の概況 (粗生産額) (単位百万円)

作目 年次	米	麦類	雑穀・豆	芋類	野菜	果樹	花き	工芸作物	種苗・木	計
昭和35年	261	—	113	—	61	6	0	57	0	498
" 36年	283	—	44	57	42	9	1	81	5	522
" 37年	319	31	26	65	68	11	1	72	5	598
" 38年	388	3	14	99	118	8	1	82	2	715
" 39年	344	14	17	68	102	9	1	102	6	663
" 40年	429	38	31	101	92	11	0	91	1	794
" 41年	474	10	7	111	104	22	1	91	0	820
" 42年	552	13	9	70	87	23	0	114	0	868

耕種以外の農産物加工物等粗生産額 (単位百万円)

区分 年次	養 蚕	畜 産	合 計	加工農産物	農業粗生産額
昭和35年	2	70	570	46	616
" 36年	2	137	661	10	671
" 37年	5	95	698	7	705
" 38年	8	105	826	1	827
" 39年	11	173	847	2	849
" 40年	13	197	1,004	1	1,005
" 41年	15	197	1,032	1	1,033
" 42年	22	292	1,182	0	1,182

茶栽培面積並びに生産量・工場数

区分 年次	茶栽培面積	摘採面積	製茶工場	生葉生産量	生 産 量	
					荒 茶	緑 茶
昭和35年	466	—	11	—	40.700	—
" 36年	486	—	11	—	56.340	—
" 37年	486	—	10	196.600	45.780	—
" 38年	486	436	9	197.800	44.870	454
" 39年	466	436	9	219.470	49.670	503
" 40年	470	428	9	197.060	44.640	460
" 41年	400	360	8	202.500	43.780	563
" 42年	400	360	8	203.260	44.040	565
" 43年	370	370	8	208.650	51.760	564

建久四年（一一九三）島津忠久薩隅日の守護となる。

建久八年（一一九七）薩隅日三州の凶田帳なる。

永正七年（一五一〇）三州乱れる。

文祿三年（一五九四）検地、大口から始まる。

慶長十一年（一六〇六）服部宗重はじめて国分梅木に煙草を植栽する。

慶長十五年（一六一〇）直川智、サトウキビをはじめて大島の大和浜に栽培する。

寛文六年（一六六六）国分の新田が開かれる。

宝永二年（一七〇五）前田利右衛門が甘藷を琉球から山川に移し植える。

享保十九年（一七三四）出水五万石溝が完工。

宝暦四年（一七五四）幕命により木曾川治水工事に着工。

宝暦五年（一七五五）木曾川治水工事完工。五月二十五日平田靱負ほか七十余人自刃。

文化二年（一八〇五）成形図説成る。

文化七年（一八一〇）伊能忠敬、藩内を測量。

天保六年（一八三五）調所広郷に財政改革を命ず。

元治元年（一八六四）砂糖取締り嚴重のため大島伊仙村大田布の農民一揆起る。

明治九年（一八七六）地租改正に着手。

明治二十七年（一八九四）一月加納知事就任。

三月、鹿児島市地方天気予報がでる。

明治四十一年（一九〇八）鹿児島高等農林学校開設。

大正十三年（一九二四）東襲山、清水、国分村の小作争議。

## ② 土地制度の推移

（古代）大和時代 屯倉、田莊。

大和末期 — 奈良時代（平安期） 班田制

奈良・平安 — 鎌倉、南北朝 — 荘園制

（中世）鎌倉、室町時代 — 守護の領国化、戦国大名領国制

（近世）安土、桃山、江戸時代 — 大名知行制

（近代）明治、大正、昭和 — 土地私有制

### ③ 班 田

律令の制定によつて田令がはつきり示された。田令第九によると田三十歩。広さ十二歩と為よ。と面積を指定している。これが田の単位とされたようである。

十段を町と為よ。として町の単位も示された。

この段に対する課税も段に対して租稲二束二把、町の租稲二十二束と定められた。

口分田は男に二段、女は二分の一を減じ五歳以下には口分田の割当はなされなかった。

その地によつて土地広く規定の口分田を与へ得る地方は又土地が狭くて規定通り割当の出来ない地方は、その地方の法によつて口分田がきめられた。

班田収授は六年毎に改め収授が行われたが死亡などで変動がない限りは同じ田を継続して耕作することが許された。田の長さ三十歩とある一歩は当時の五尺で約一、八米とされている。

### ④ 荘 園

律令の田令による班田制が農民の逃亡等によつて班田制は動揺を来した。この反面に荘園は八、九世紀頃から発達の兆を見せて来た。

荘園の発達過程において墾田地系と寄進地系の形態で形成された。

(イ) 墾田地の系態は貴族、寺社の位田、職田、功田、寺田、神田、封戸等の賜田が私有化され、貴族社寺の経済力の必要性に基づくものであったと考えられる。七四三年に墾田の永代私有を認める法令が発せられたので貴族や富豪等の墾田は大いに開発され朝廷の勅旨田、役所の官田等が増加して来た。

一方農民の負担は増加し浮浪逃亡が増加して、土地は荒廃し農民は寺社へ流入して課役（税金と労働力の負担）を逃れた。

(ロ) 寄進地荘園

一〇世紀以降になると国司の苛政に対抗する方法として摂関家や院、皇室へ寄進する形がとられる様になった。名義上だけ時の権力者である摂関家が領することによって荘園の利権を安全化した。それは不輪（税を納めない）、不入権の獲得を目的としたものであった。

地方の豪族や農民の墾田は貴族や寺社へ名目上寄進して実質的には領主としての権利を確保しつつ、課税を免れる方途として利用した。然し寄進した領主は貴族や寺社へ収入の何割かを納めることになった。

貴族や寺社は寄進された土地に領家を置き預り所を設けて、寄進者の収益から年貢形式で「荘園」とした事による不輪、不入権の代償を収めた。この様な根柢のもとに荘園は権力者の私有地化され増大して来た。

(ハ) 寄進

重枝（重久）二十町郡司藤原篤守所知、重富三十三町税所藤原篤周所知

件両名依令私奉寄於正宮耕作御佃三丁也

（大隅国国田帳）

と書いてある。これは郡司藤原篤守、税所藤原篤周の両名が正宮（正八幡宮）に寄進、領主直営田（佃）は三丁である。正宮に寄進するのは名目だけで不輪田として課税を免ぜられ、所知している郡司篤守の二十町、篤周の三十三町の収穫高から正八幡宮へいくらかを割いて弁済したものであろう。

(ニ) 勅旨田

八世紀から起り九世紀に急に増加したと見られる。大土地所有の点では荘園と同じであるが、開発のためには国の用水を利用し、諸国の税などを用い、労働力も公民を利用したと見られて居る。不輪租田であって全国的に広大な土地があった。

(ホ) 官田

中央地方の役所が直接に田地を掌握して農業を経営したり、農民に土地を貸して年貢を納めさせ不足する役人の俸禄に充てたものである。八二八年頃は九州で約一万三千町歩の田地に六万余の農民を三〇日宛働かせ収穫の稲を全部大宰府のものとした。役所が経営する土地であるので公営田とも呼ばれた。

(ハ) 農民の利得

農民は勅旨田や官田で働くとき一日何らかの労賃と食費が与えられた。(労賃として稲八束、食費として四束) また農民の庸、調の負担も、これ等の土地の収穫から差引かれ農民は働くだけで庸、調の心配がなかったたので農民は勅旨田や官田で働く者が多かった。

⑤ 土地に対する課役に移る。

名田は一〇世紀を境として班田制は実質的に崩れて行き、有力者、田堵といわれる富農の成長に応じて、これにかゝる政府、国衙側の収取の体制が次第に形づくられてくるのであるが、その中で名が現われてくる。国衙は従来の口分田を私田化して治田などの名目でその拡張に努めていた有力な農民に、その田に名前をつけることを認め、租庸調などの負担を所当官物、雑公事の形で責任を負わせて徴集してゆく。このような形で有力な農民の土地私有が次第に固まり、従来の人身に対する課役が次第に土地に賦課される形に変わって来ることになった。

貴族や寺院の私有地(初期荘園)を耕作している農民の間にも同じ頃から同様な動きが出て来た。この体制が名田制或は名体制といわれる程になるには長い期間を要した。(二世紀以上)

⑥ 不輸、不入の権

(イ) 不輸|| 墾田は田租を納める義務をもつ輸租田であるが、貴族や権力者が地位を利用して政府に免租を申請して許可を得、不輸の特権を獲得した。

(ロ) 不入の権|| 不輸の特権をもつ荘園には徴税や検田のため国司の使者が荘内に立入る必要がなく、国司の入部を拒否し得る権利、所謂不入権が伴った。のちに不入の意味が拡大して犯人逮捕などのために国家の警察権が荘園内に及ぶことも拒否する権利にまで発展した。

この地方では鹿兒島神宮一の鳥居以内に犯人が逃げこむと犯罪者に手の及ばなかったことが伝えられている。これらも荘園関係と寺社奉行管轄の二面からであったこと



米良重直起請文 (島津忠重所蔵)



榊山主計書状（蛭児神社蔵）

が考えられる。

#### ⑦ 土地制度の確立

日本国内の土地制度がはっきり示されたのは六世紀からで大和朝廷が、田荘も倉制を公布して全国各地にも屯倉を置いたことである。六四五年大化の改新の律令を制定して田令を設け、班田収授の制をしき口分田の法を実施したことである。

#### ⑧ 律令土地制の崩壊

霊龜元年（七一五）の五月朔。諸国の朝集使に勅して、天下の百姓が本籍地から逃れ他郷に流浪して、課役をいといのがれる者が多い。浮浪者が三か月以上流浪の土地にいるものは土着したものとして調庸の課税をかけるように命じている。

班田農民が律令制下の重い負担を逃れるために各地に流浪したので、耕作者のいない口分田は荒廃し増加することになった。本籍地（口分田収授の土地、計帳に所載した土地）を逃げ出して有力な貴族社寺等に寄食して、貴族や社寺等の私有地で働き開墾などに従っていたとみられている。

又課役を免除されている僧侶に勝手になつて課役をのがれる者が多くなった。

このような状況となつたので律令の土地制度は貴族階級と農民の双方から漸次崩壊して行くことになった。

#### ⑨ 三世一身法の制定

奈良時代の中期になると課役の重い負担にたえかねて農民の逃亡が多くなり、その結果租税収入は減り、大和朝廷（政府）の財政状態は悪化して来た。この対策として当時の政府は百万町歩開墾計画を樹立したが、翌年には三世一身の法にきり替えた。

養老七年四月（七二三）太政官奏言につきの文書がある。近年百姓が多く増加して田地が狭くなったので天下に勸めて田地を開拓せしめよう。

新に溝や池を造り開墾する者があるならば多少に限らず給して三世に伝えしめん。即ち多少にか、わらず開墾した土地は子、孫、曾孫まで与え授けるとした。所謂三世一身の法である。

もし旧溝池の灌漑施設を利用して開墾したならば一生授け耕作せしめること、した。(続日本記、養老七年)

⑩ 墾田の永代私有を認める。

天平十五年(七四三)五月、詔して墾田は養老七年の三世一身法に依って耕作せしめ収公しないこと、した。このため農夫はなまけて開墾した土地は再び荒廃して来たので、三世一身の法も効果が無くなった。このため天平十五年五月に墾田の永代私有を認める法令を発したので、公地公民の原則は政府自らの手で崩壊することになった。

⑪ 寺院の土地墾田を保護

天平十五年墾田永代私有令が出されて数年後の天平神護元年三月に再び墾田禁止令が出た。

これは天平十五年以来諸人が競って墾田したので、富裕な者は榮え貧乏人は苦しんで居るからとの理由であった。然し一方寺院は天平勝宝元年七月に定めた開墾面積は禁じなかった。

開墾面積は東大寺は四〇〇〇町歩、元興寺は二〇〇〇町歩、諸国の国分寺は一〇〇〇町歩、諸国法華寺(国分尼寺)は各四〇〇町歩、その外各寺領が定められて居た。

このころ国家の保護指導下に各地の田野を指定した。これらの寺地を集めた方法の最大のもは朝廷および私人の施入、寺自身の開墾によるもの、買得、質流れであった。

天平神護元年の墾田禁止が僧道鏡の権勢盛んな時に出されたもので、理由は最もらしいことであるが、目的は寺院の保護と貴族抑制にあったと言われる。従って道鏡失

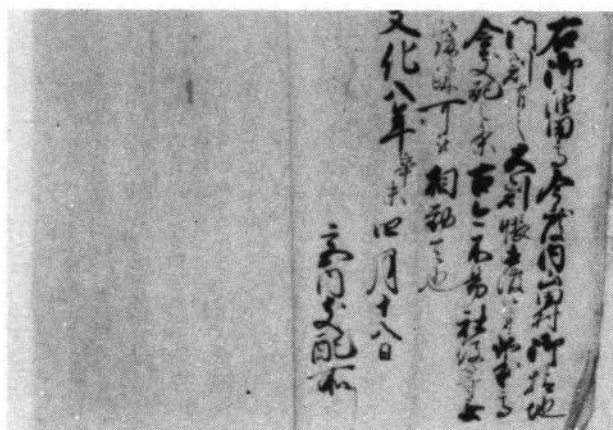
脚後の、宝龜三年一〇月には、この再禁令は解かれ以後墾田禁止令は出されなかった。

⑫ 荘園の整理令

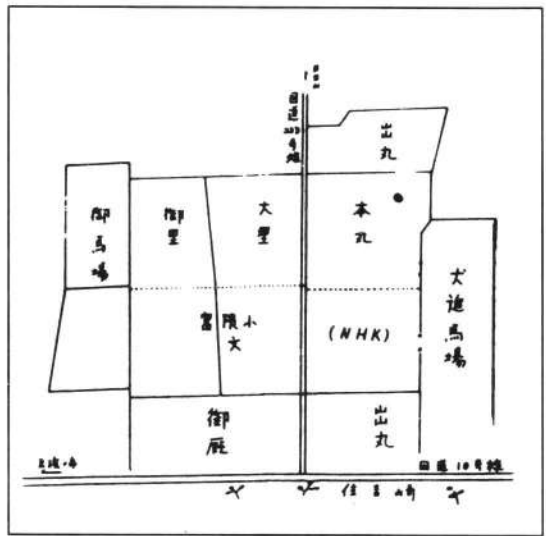
平安朝の初期に勅旨開田(勅旨田)や貴族、寺社等に寄進した荘園が多くなったので朝廷は一〇世紀以後これを整理する政策を数回にわたって実行した。

延喜二年(九〇二)、永観二年(九八四)、寛徳二年(一〇四五)、天喜三年(一〇五五)、延久元年(一〇六九)に整理令が出された。

延喜二年三月の大政官符には、勅旨開田並びに諸院諸宮および五位以上、百姓の田



宮内支配所大割帳(種子田十郎蔵)



富隈城復元図

地、舍宅を買取り閑地荒田を占請するを停止すべき事。として「頃年勅旨開田（平安前期に多く設置された皇室領）遍く諸国にあり。空閑荒廢の地を占むと雖も、是黎元（人民、百姓、班田農民のこと）の産業の便を奪ふなり。」と、勅旨開田が班田農民の産業を圧迫している。

又一方に於ては「諸国の奸濫の百姓、課役を通れんがためにや、もすれば京師に赴き、好んで豪家に属し或は田地を以て詐り寄進し」とも書かれている。

又「国史、矯蝕（詐り）の計を知ると雖、而も権貴の勢を憚り、口をつぐみ舌を巻き、敢て禁制せず。」と国史も貴族や豪族の権勢に怖れて敢えて詐りであることを知っても禁制しなかったことを書いています。

更に「出挙の日、事を權門に託して正税を請けず。収納の時、穀を私宅に蓄えて官倉に運ばず」と課税を納めず、これ等のために賄賂を役人に送り遂には田地は豪家の庄となり、「民烟長く農桑の土地を失う」と百姓の

転落を示している。

このため朝廷は荘園の整理令を出し寛徳二年以降の新立荘園を停止した。この整理令を実施するため延久元年には、記録荘園券契所（後三条天皇が荘園整理事業のため設置された役所）を置いて記録所の事務官を置いた。この事務官を寄人と言った。

### ⑬ 武士による荘園の侵略

大隅国諸所に山城国石清水八幡の神領があつたので弘安年中に石清水善法寺了清が下向して神領を掌り帖佐平山に八幡社を建て城を築いて平安城と号し、平山村の領家職となり平山と称したが、第九代越後武豊の代となり島津忠国が享徳年中（一四五二）に攻落した。平山一族を指宿と鹿兒島の武村に移したことが諸書に出ているが、この善法寺了清の子孫とみられる一つが日当山高畑の松元一郎である。川辺町平山城（河辺氏）あり。了清は医師、陰陽師、大工以下総勢九百名という規模で下向したという。

平山村は石清水八幡の荘園で了清が領家として支配したものを守護地頭方の島津が武力によって横領したことを物語っている。

享徳年間は室町期（足利時代）の中期であるが、戦乱の時代で守護、地頭や領家をとわず地位と生命の安全は期せられなかった時代である。

建久八年閏七月の大隅国田帳によると、正宮領本家八幡 地頭掃部頭 田千二百九十六町三段小 不輸五百町五段小 応輸七百九十五町八段。

これは鎌倉時代に入ってからのものであるが、建久八年（一一九七）の社領としては可成り大きな社領である。

本家は八幡で領家に当るのが地頭掃部頭である。（この頃は地頭制が設けられていた）この内容を見ると不輸五百町五段小とある。五百町五反は税を納めない土地である。

応輸七百九十五町八段とある。この土地は税を納める土地である。

正宮領は曾野郡、小河院、桑東、桑西、帖佐、蒲生院、吉田院、加治木郷、禰寝（根占）、栗野院、鹿屋院、始良庄等に跨った広大な土地を持っていた。これ等の土地は荘園であると言える。

#### ⑭ 地頭請

鎌倉時代には武家政治が台頭して来るのであるが、これは武家の所領の増加によるものであった。

武家領の増加は公家所有の荘園の侵略であったと言える。地頭による荘園の侵略は年貢米を押えて荘園の領主に上納しないことであつた。

年貢米の不納等によって訴訟が多く発生するので領家や本所などの荘園領主は訴訟等の煩しさから逃れるためや確実に年貢を受領することが得策と考え地頭に年貢徴収を請負せる制度を考え出した。所謂「請所の制」である。

鎌倉時代の初め頃から地頭請が発生するのであるが、地頭の勢力の増大するに従って多くなることは必然であった。

このような状況になるに従って領家等の荘園に対する直接の支配権は衰えて「下地」土地は地頭の掌握するところとなるのである。

別項に載せた島津御庄領家近衛殿地頭尾張守殿 新立庄七百六十丁名越尾張入道殿 御下知とある条文の中に深川院百五十余町は謀反人故有送平分換于今知行也。とあるのを見ると他国同様荘園の侵略が横行して深川院も、その例に洩れなかったと考えられる。文から見ると平等に損を分け送り知行したとある。

檢地は土地の調査で現在の土地一筆調査とも言えるもので現在のそれよりも嚴重であり威令を伴ったものであることは過去の檢地の有様から見て伺い知ることが出来る。高調帳にある田畑一筆毎に縦、横の間数を示し面積が示され一筆毎の生産量と貢租額が記入され村郷、寺社領等の面積や生産量の集計がなされていることである。

検地（土地調査）は古代から行なわれ鎌倉時代には太田文などが作られ荘園では検注、内検が行われた。

室町時代後期になると大名領国で検地が行われたが、各莊園、領国ごとに差違があり、土地の面積なども種々の基準で示されて一定していなかった。

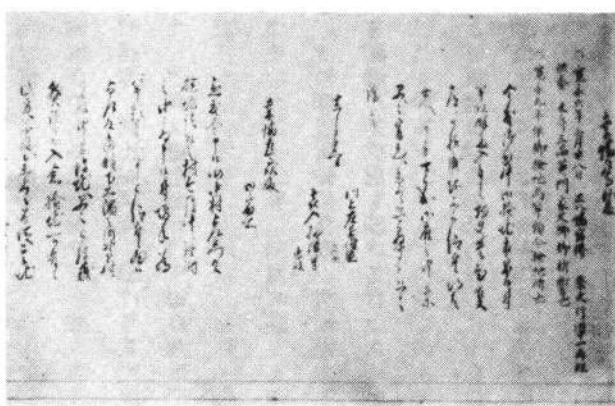
天正八年九月二十六日（一五八〇）織田信長が寺社、本所諸寺、諸山、国衆（地侍等農民迄）悉く差出しを命じた。これは領主のもつ所領の台帳や写しを「差出」とよぶ。

信長も近江、伊勢、山城の国などの征服地に実施したが、この時は所領の台帳、明細書を差出させたもので役人を派遣して規則を設けて行なうに至らなかった様である。

この検地は信長の勢力圏の武士を自己の支配機構の中に組織化しようとするもので直接農民の統制を行なうにはいたらなかった。

「差出」の形式は諸大名等も、この制になつたもの





桑 幡 文 書 (桑幡公秀蔵)

と考えられる。明暦元年乙未八月に止上座主兼林寺の堯音が奉行所へ「神社仏閣御改被仰渡候に付右ノ通書指出」とある「差出隅州曾於郡」とある。

(ロ) 太閤検地

天正十八年(一五九〇)八月に奥州に向かった秀吉が浅野長政に命じて全奥州の検地を行った。

奥州地方全体が半農奴的農業の経営であつて、領主階級と一般百姓とが結合している、この古代的な民衆との結びつきを打破することが封建制度を確立するために必要であつたとされている。秀吉はこの検地に當つて浅野長政に与えた文書の中で次のように述べている。

国人並びに百姓共に合点行き候様に能々申聞すべく候。自然相届かざる覚悟の輩(不届きの輩)これあるに於ては、城主にて候はじ、其もの城へ追入れ各相談、一人も残し置かず、なできりに申付くべく候。百姓以下に至るまで、相届かざるに付ては、一郷も二郷も悉くなでぎり仕るべく候。六十余州堅く仰付けられ、出羽奥州迄そさうにはさせらる間敷候。

右の文中に検地に反対したり応じないものは一郷も二郷も悉くなでぎりにすると言つ強い態度を示していることである。

この太閤検地では面積の単位を統一し六尺三寸四方を一步、三〇歩を一畝、一〇畝を一段、一〇段を一町とし、収穫高をはかる柁も京柁(高四寸九分、深さ二寸九分)に統一して、田畑屋敷に等級を定めて石盛(生産量を決める)をして、その石高に應じて租税を負担させる近代的検地を行ったと言えよう。

又耕地、屋敷の所持者を定めて検地帳に登録し、実際の耕作農民を登録する政策をとつた。このため農民の耕作の実体が把握され領主が直接に耕作農民から年貢を取立てることになり耕作者が土地所有者となつた。

これと併行して秀吉は刀符令を出して諸国の百姓が刀、弓、鉄砲などの武器を所持することを禁止する令を出した。

「其の子細者は入らざる道具をあひたくわへ、年貢所当を難渋せしめ、自然一揆を企て」(小早川文書)とある通り百姓の武器

を取上げて百姓一揆などを抑える手段であった。

太閤検地については薩隅日三州の地に於ても行われ細川幽斉をして実施せしめている。

▽止上社領十三町一反

右者止上御知行十三町一反二斗五升ニテ候処太閤様御代勘落知行無之候処、義久様御代知行三十一石御寄進被成候処、先年寺社家之知行被召上候付今ニ無之候。但目録隨有之候以上。

明暦元年乙未七月二十一日、止上座主乗林寺

堯音書判

右の文書から見ると止上社領の十三町一反を太閤検地によって勘落（社領を取上げられること）されたことが示されている。

このため島津義久は三十一石を寄附して寺社家が之を知行したことが、この寺領勘落のため三内侍、殿守、御司、羽坂之代、棚司、権大宮司、敷司、宮代官、百司等の社人は屋敷を失ったことが記るされている。

右十人の社人皆屋敷御座候得共勘落以後無之候得共今ニ社役者御奉行ニ勤申候事とある。

慶長年中細川幽斉が豊臣秀吉の命によって当国（薩摩、大隅）を検地、寺社領ことごとく勘落したことが般若寺村（吉松町）の般若寺の項にも見られる。

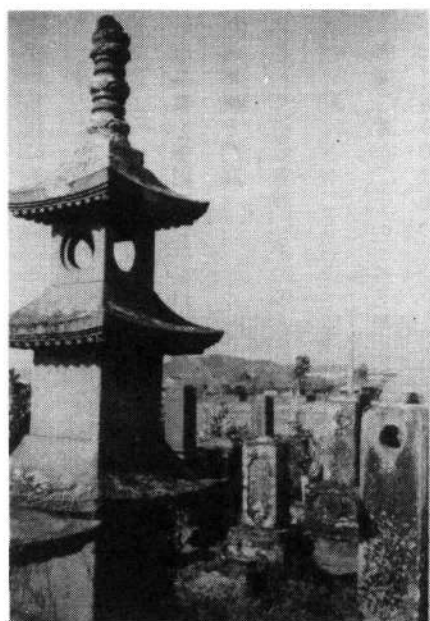
⑬ 土地に対する制限

徳川幕府は本百姓の維持と貢租の確保のために土地に対して制限を設けた。

寛永二〇年（一六四三）には土地永代禁止令を出して田畑の売買を禁止した。寛文十三年（一六七三）には「分地制限令」を公布し、高二十石または反別二町以上の土地がなければ分割相続することを禁止し、実際に売買されたと同じ質入れや寄進を禁止した。

又名主は高二〇石、百姓は高一〇石を限度として、これより小高の者の分割譲渡を禁止した。

享保六年（一七二一）には高一〇石、地面一町を限度とする田畑



林氏由来記 国分市正覚寺



桶ガンサア（姫城山野石関家蔵）

配分の定が公布された。

寛永、享保の年代に見る高、地面の制限が当時の農業経営の規模を示すものと言えよう。「たわけ」は「田わけ」の転化である。

土地の売買禁止令や分割相続を禁止したことは土地の細分化を防ぎ貢租の財源基盤を強固にしたものと考えられる。

(1) 検地名寄帳と門高

町内に残されて居る寛政六年の国分郷小田村の検地名寄帳によると門高は各門の殆んどが二五石台で脇門の二〇石一斗、新門の一七石、最高の西井上門の二八石三斗八升がある。門内の名子数は一が多く二となって居るのは極めてすくない。これ等も貢租と門高の関

係があるものと推量され分地制限令の影響によるものと考えられる。

名主頭が幼少であったり経営が悪く貢租を事欠く場合には五人与の頭や親族筋の名主頭が高を一時預りの形で高はそのまゝの形で差配して預り主が名頭に代って貢納し上木高、口米、役米、代米、賦米を納め賦役等を一切引受けて代納した。これを「高を繰る」と言った。いわゆる「くくる」ということである。

よく古老などは借財や出来（だしめ）（出費の事）が多くなると生活が苦しくなるので「高をくくって貰った方が気楽だ。」と言って笑い話などをするところがある。所謂門高に名頭や名子が従属し勝手に門高の移動は出来なかった証拠と言えよう。

土地に対しては郷士と雖自由に出来なかった。

延宝二年寅七月二十一日清水家中高帳奥書に、敷根外城立の砌清水士二十人可被召移旨被仰渡実処（中略）違背仕候。然処右人数の内菊野、古川、上野、池田、橋口五人相語を以て敷根へ引移候故残り拾五人御科目被仰付高、屋敷没収にて御取揚被仰付候。と記るされている。この時の地頭は伊集院兵吉郎である。

現今で言うならば転勤命令を拒否した、め停職処分にあつて給与支給を停止された処分である。否それ以上の処分と言えよう。全く生活権を剥奪され、それでも尚郷士階級として清水衆中のうちに名を連ねて、主君である島津に忠勤を尽さねばならなかった。

のち家屋敷は返還された。「雖然以後屋敷之方御免にて被成下候」とある。

#### ⑰ 郷士の分地別立

郷士階級の分地については清水郷の例をとると、弘化二年巳三月二男新九郎江高壺石壺斗二升九合八夕外に高拾六石余買入分地別立御奉公之願申上候処御免許。

神崎新介二男 新右衛門正直 天保十二年丑二月二十八日生 安政三年辰三月高五合七勺三才別ニ高七石貳升余買入分地別立願申上候処御免許。

右の例から推測すると、二、三男の分家別立の場合、本家からの分地高は何れも低い。別に買入高を合せて分家別立が行われている。

文中に分地別立御奉公之願申上候処御免許とある通り、分家の際は藩庁の許可を必要としたことである。これ等の場合地頭賦所から差免の一札が手渡され初めて分家別立が認められた。

#### ⑱ 検 地

封建時代の貢租の対象の主たるものは土地であったから各時代に涉つて度々検地が行われた。町内に保有されている検地名寄帳がある。寛政六年の国分郷小田村の高志らべ帳、宝暦六年丙子三月二十一日隅州桑原郡日当山嘉例川御検地名寄帳がある。

○小田村高志らべ帳 小田、長福多治兵衛所蔵

○嘉例川村検地名寄帳 表木山、福留純保所蔵（隼人町歴史民俗資料館へ寄贈）

表木山、福留純保所蔵に次のような記録もある。

明治十二年卯十一月の大隅国桑原郡襲山郷嘉例川村 地位等級反別調牒

明治十三年 襲山郷嘉例川村収穫調

明治十三年十一月 等級収穫地価調牒 大隅国桑原郡嘉例川村

明治十三年 襲山郷嘉例川村収穫調



姫 木 城（隼人町姫城）

明治十三年辰五月 襲山郷六ヶ村新藍税差引帳、嘉例川村

明治時代のこれ等の記録は明治九年地租改正が始められ、十二年四月より改正（丈量、実測）一筆毎の調査があり、明治十七年地券証下渡し迄の間に於ける基礎資料となっている。

④ 投げ竿と山竿

薩藩の検地は度々行われているが郡奉行、郡奉即郡見廻等の役人が竿取人や筆算者を従えて各郷村々を検地した。筆算者等は郷内や村の者ではなく他郷の人が任命されて検地した。

投竿と言つて竹竿（二間竿とも言われている）で重複するようにして間数を計った。従つて竹竿を握っている部分と手加減が出るだけ面積がせめられた。

この様なことは薩藩が幕府に対する駆引きで実際よりも面積をすくなく上申するための方法であつたと言われている。名寄帳よりも実質的に広いことを延畦（のっせ）と言っているが鹿児島県の土地は昔のまゝの土地であれば大体において台帳面積（名寄帳面積）よりも広いとされている。寛永九年、検地竿頭の桑幡文書も参考になる。

山林等は山竿と言つて台帳面積よりも何倍もの広い地積があるものが多いことは常識である。

⑤ 浮 免

門高に入らない自作自収の熟地で租米九升二合を納める士族給養の田畑であつた（原口虎雄鹿児島経済大学教授）

宝暦六年子三月嘉例川村の検地帳の中に二十八庄屋浮免、永作浮免と出ている。庄屋浮免の初めに中屋敷五畝大豆三斗 庄屋屋敷、以下、下畑、上畑として地積石高が記入されている。

庄屋浮免

中屋敷十五間 五畝 大豆三斗

下畑十三間 壺反四畝九歩

庄屋屋敷 小右エ門

大豆貳石壺合

立神上畑二十五間 壺反四畝拾五歩

同人

大豆三石三升八合

豆田  
山畑

豆田山畑十四間

六畝拾□歩

小右エ門

大豆九升壺合

一、茶拾匁 粳壺合四勺

一、桑貳本 粳二升

一、楮壺本 粳一升

永作浮免

桜谷

七右衛門

山畑二十七間 九畝 大豆壺斗一升七合

この外嘉例川検地名寄帳（宝暦六年三月検地）の中に十七筆の田畑、畦町、地積等が筆毎に記るされ右の如く下段に耕作者の名前が記るされている。

この永作浮免は

合田畠六反六畝七歩

田方 五反拾三歩

畠方 壺反五畝二十四歩

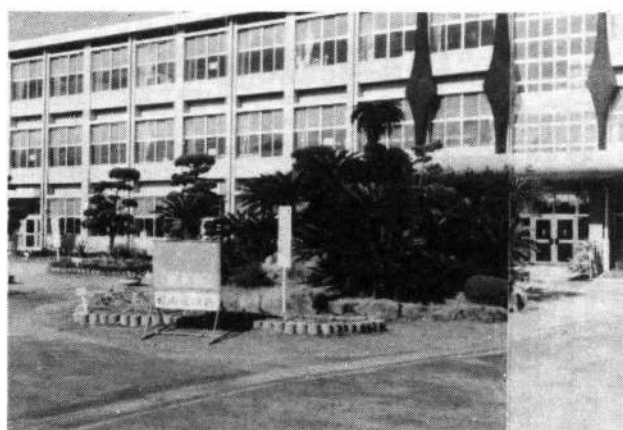
合粳大豆貳拾五石貳斗四升壺合

粳貳拾五石二升

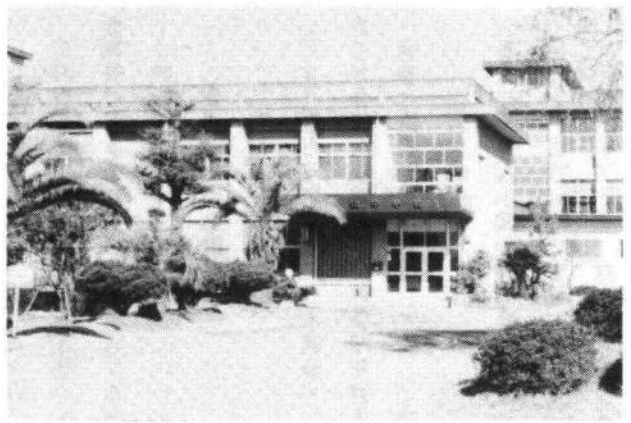
大豆貳斗貳升壺合

高九石三斗六升五合六勺貳才 外五

とある。嘉例川村で宝暦六年三月（一七五六）には六反六畝七歩の永作浮免があつたことが分る。



日当山小学校（隼人町東郷）



日 当 山 中 学 校 (隼人町東郷)

右筆数のうち

用志やく

山畑 五間 参畝二十歩 大豆六升六合 ××左エ門

の永作浮免が朱書によつて次の通り修正されている。

明和四年亥五月(一七六七)は竿行四元八左エ門殿畠田成

下、田 二十四間 内貳拾壹歩 (この間朱書 虫喰判読出来ず) 小兵衛

この文面から見ると山畑であつた土地を四元八左エ門が検地竿入れをして、貳畝貳拾歩を下、田として内貳拾壹歩は畠で耕作者も小兵衛に代つている。

この様に土地の変動に対しては竿入れ検地を行つて田畑等の地目を明確にし貢租を一筆についても改めていることである。非常に厳しい土地制度であつたことが推測される。

◎ 永 作

郷士等の武士階級の者や百姓その他一般に作人が大山野や古荒地を自分が費用をかけて仕明し、門地、高同様に貢租を納め永代耕作する蔵入地であるが、次の文書は、永作の願出をして認められたいきさつを證文としたものであつて当時の土地制度と行政的措施を物語つてゐる。(次の文献は隼人町小田の田辺宅に所蔵されているもので同氏の祖竹原田氏より伝えられているものである)

永作の許可に関する文献

藩政時代は土地に対しては勝手に耕作することは出来なかつた。武士階級と言えども藩庁の許可を必要としたことは言う迄もないことである。

百姓は門高の中の田畠を耕作する以外山畑等を造成しても許可を必要とした。

次の文は「免證文写」となつており樺山右京家来本村五左エ門が古荒地と山野を自分の費用で耕地を拓いて永作の許可を願ひ出したのが許可になつていたものを何かの手違いで本人に許可状が渡つていなかった、め天明五年五月二十八日付をもつて安永五年八

月十四日に許可になったものを確認して後年になって検地内割があっても永作すると約束したものである。開拓して三年作地は四年目に古荒地の方は二年耕作して三年目に竿入れの願を申出よと言っている。若し竿入れがなされなかった時は検者へ申出て田掛即ち年貢（税金）を納めるようにせよと申渡している。当時の土地制度を知る貴重な資料である。

免證文写

国分 当時

樺山右京家来中高

宇都 大山野田畦極

畠開

本村五左エ門

右者 古荒地並大山野地ニ而候処自分夫掛を以て相開御納戸御蔵入可差上候所永作人致御済願申出ニ付郡奉行岩元半右エ門与助之席揚所致見分候処古田新田其外改□無之候付願旨永作差免右之日ヲハ安永五年申八月十四日山岡齊宮殿御治時證文を以可差免旨を伝不置候間右地方可引渡左候而三年作地四年目御竿入古荒地之儀ハ二年作地三年目御竿入之願可被申出兼吞無之御竿不入候はば年々溝下検者まで申出可被致田掛候後年御検地門割有之候とも可為永作候以上

郡奉行 岩元半右エ門印

天明五年巳五月二十八日

牧野仁左エ門

郷士年寄中

郡見廻中

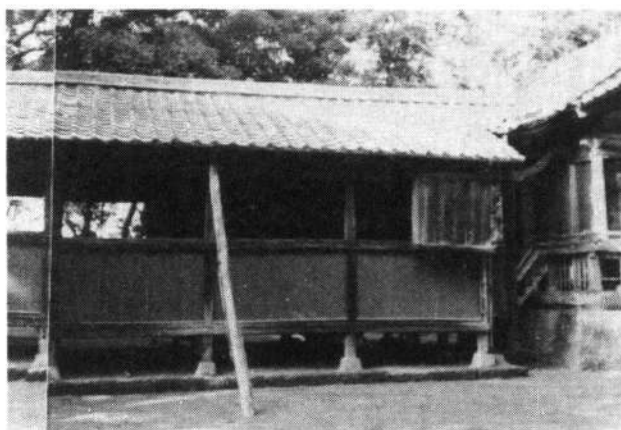
右之通置御渡被為写相渡候以上

国分郷賦所印

天明五年巳六月五日

御納戸開地畠掛

種子田新右エ門



菅原神社（隼人町姫城）



隼人中学校（隼人町真孝）

③ 抱 地

諸士が大山野、古荒地等の内現高等に支障のない場所を免許を得て自費仕出し、その所有高とされた土地である。門高や中高（うちだか）に入らない自作自収の土地で租米を納める武士階級の給養の田畑とされていた。

これに関する碑文が国分市重久岩戸の本田親友宅にある。

本田氏祭神燈炉碑文

御振之志当二十七代与左衛門親良当所地西見立抱地之願申上候処御免被仰付寛延二丑四月御郡奉行相良次兵衛殿御竿被石入難有奉致候。夫故曾祖父者当家□□切開旨祖父与里伝置候

寛政四年未四月御郡奉行村田源左衛門殿直御竿被石入其後祖父与左衛門親行親孝左衛門親以相語之上前田六右衛門、前田助市、前田亀次郎、前田亀助、岩崎伝八、右五人与里被入、文化四卯八月田神建致石碑筭候処同親致死去不相調同十五寅四月御道奉行郡奉行与兵衛殿直御竿記石入同十一月祖父致不相調候、文政五与里前田半左衛門、永瀬門前田覚太郎、前田市兵衛、岩崎伝八、馬場平右衛門、本田三左衛門、川越五左衛門、細山田三助、右十二与里与取入候。（以下略）

右の文面から見ると本田与左衛門親良が抱地を見立て、願を出し許可になり寛延二年四月に郡奉行の相良次兵衛が竿入れをして石入れ（石盛り）をしている。

寛政四年四月に郡奉行村田源左衛門が検地竿入れをして石入れをしている。文化十五年四月に道奉行郡奉行の与兵衛（本田与兵衛と思われる）が直竿（実測）して石入を記したとしている。

文政五年より前田半左衛門等十二人が石代元入をしている。この前田半左衛門等十二人が直接に耕作して地料を本田家へ納めたものであろう。本田家はこの地料から貢租を差入れ（税金を納める）して抱地から利潤をかせいでいたこと、なる。

前田半左衛門以下の十二人は本田家に従属した士分の人達であると推測される。

抱地には自費仕明しと言う開田開畑の財政的負担があるので財力のある者が抱地をもつことが出来たものと考えられ十二人は抱地開拓の労力提供者であつたとも推測される。

宝暦年間の検地名寄帳には、各地目の上に上、中、下、下の下と一筆毎に地位等級を現わす文字が記入されて門高貢租の根拠が明らかにされている。

○田 上田、中田、下田、下々田（下の下田）

○畑 上畑、中畑、下畑、下々畑

○ 山畑

○屋敷 上屋敷、中屋敷、下屋敷、下々屋敷等、現在で言ふならば賃貸価格の土地評価等級が記入されている。

この様に四等級に区分し土地の評価（田畑の品位をきめ出来高（収穫高基準をきめる）をしてあることは太閤検地の例によるものであると考へられる。

この検地帳に名前がのせてある土地所有農民は本百姓と呼ばれ年貢納入の義務（納税の義務）があつたが、一方村内での生活では、用水、採草、村所有山林から薪木をとる権利があつた。

#### ⑤ 嘉例川の検地

次に宝暦六年丙子三月二十一日に出来た日当山嘉例川村の検地名寄帳の中から徳丸門の名寄せを引用して参考とすること、した。

記録されている通り徳丸門は男拾人女四人馬貳疋と当初に記るされている。

名頭は利左エ門で名子は清左エ門、五左エ門、太郎兵衛、新左エ門、市助である。

名頭利左エ門の下に五人の名子がある、この名子にそれぞれの家族構成がある。これが徳丸門の構成である。

名頭、各名子の屋敷がある。これを名頭屋敷、名子屋敷と呼ばれ名頭の家族の名が付けられている。屋敷、田畑、山林等が名頭高、名子家族の名が付けられている屋敷、



宮内小学校（隼人町内）



田の神像（鹿児島神宮斎田）

田畑、山林等が名子高と言われ、これ等の集計された田畑、屋敷面積、桑、楮等の上木に対する課税額が高と呼ばれた。

徳丸門の高は三拾貳石七斗五升四合壹勺六才である。この様な門の組織と門に割当てられた土地に対する門高、門割り制度によって課租収入の合理化が成功して幕政、藩政の歳入源が確保された。

徳丸門の検地名寄帳の内容

二十七

徳丸門

男拾人  
女四人

馬貳疋

下屋敷<sup>十二間</sup>  
十五間

五畝拾五歩

利左エ門

大豆壹斗六升五合

柴竹三束

名頭

一當四拾六歳

利左エ門

一同拾七歳

初亀

一當拾六歳

喜兵衛<sup>名頭子</sup>

一同七拾七歳

清左エ門<sup>名子</sup>

一同七拾貳歳

妻

一同三拾四歳

太左エ門<sup>子</sup>

一同三拾九歳

名子

一同貳拾七歳

松右エ門<sup>五右エ門弟</sup>

一同七拾七歳

右同親

一同六拾貳歳

妻

一當四拾五歳

名子

一同拾三歳

大郎兵衛<sup>大郎兵衛女干</sup>

一同三拾八歳

名子

一同六拾貳歳

市助<sup>名子</sup>

下屋敷<sup>十四間</sup>  
三十間

一反四畝

五右エ門

下屋敷<sup>十五間</sup>  
二十間

壹反八歩

新右エ門

下屋敷<sup>十五間</sup>  
二十間

大豆壹俵

二升五合

下屋敷<sup>十七間</sup>  
十七間

六畦拾三歩

太郎兵衛

下田<sup>十二間</sup>  
三十間

下長追

五左エ門

下田<sup>十六間</sup>  
三六間

壹反貳畝

七町八

五左エ門

下田<sup>十六間</sup>  
三六間

壹反三畝二十三歩

七町十九

市左エ門

下田<sup>十六間</sup>  
三六間

六畝二十七歩

七町十

市左エ門

下田<sup>十四間</sup>  
二四間

八畝

七町十

市左エ門

鎖守免<sup>下田</sup>  
二五間

壹反壹畝二十歩

七町十七

市左エ門

すけのまた<sup>下田</sup>  
十間

赤粃

三俵壹斗八升

清左エ門

下田<sup>十間</sup>  
二四間

壹畝二十歩

七町十一

松右エ門

鎖守免<sup>下田</sup>  
十四間半

四畝拾三歩

七町六

赤粃壹斗

下田<sup>十四間半</sup>  
十四間半

赤粃壹斗八升

七町六

仁左エ門

鎮守免  
下田 三間半  
拾四步<sup>七町</sup>  
仁左工門

すけのまた  
下田 十八間  
三畝二十壹步  
赤粳三升

下長迫  
下田 十五間  
九畝拾五步<sup>七町六</sup>  
粳二俵四升

下田  
四畝二十貳步  
藏右 欠

砂入  
下田 十六間  
八畝二十四步<sup>七町十二</sup>  
粳六升

下田  
四畝拾貳步  
粳壹俵三升  
清右工門

下田 十一間  
六畝二十四步<sup>七町一</sup>  
粳四俵貳斗市左工門

すけのまた  
下田 十三間  
七畝二十四步<sup>七町七</sup>  
粳四俵  
新左工門

下田 十一間  
三十八間  
壹反三畝二十八步<sup>七町十七</sup>  
粳六表壹斗三升  
六畝二十九步俵壹斗三升孫右工門

帶田  
下田 十四間  
三十間半  
壹反六畝三步<sup>七町二十六</sup>  
粳三俵六升五合

下田 十八間  
四間  
貳畝拾貳步<sup>七町六</sup>  
壹俵四升  
孫兵衛

砂入  
下田 十六間  
十八間  
九畝拾八步<sup>七町十一</sup>  
粳貳俵貳斗四升

下田  
四畝二十四步  
源右工門

下長迫間  
下田 七間  
二八步<sup>七町三</sup>  
粳五升  
長助

かりや迫  
中 畠 十四間半  
三十間  
壹反四畝拾五步  
大豆貳俵貳斗八升六合  
同人

大塚  
下 畠 十八間  
二十六間  
壹反六畝拾八步  
大豆壹俵貳斗七升四合  
仁右工門

樋口  
山畑 十九間  
二十九間  
壹反八畝拾壹步  
五郎左工門



国立鹿児島工業高等専門学校（隼人町真孝）

大豆壹俵壹斗壹升

(中略)

一、桑貳本 粳貳升

合田畠屋敷五町九反六畝三步

田方壹町貳反三畝拾八步

畠方四町三反六畝九步

屋敷三反六畝六步

合粳大豆八拾九俵貳斗九升四合

粳五拾壹俵九升六合

大豆三拾八俵九升八合

上木粳壹斗

高三拾貳石七斗五升四合壹勺六才

一、桑九本

一、櫛壹本

一、柴竹三束

合男女拾四人

男 拾人

女 四人

合馬貳疋

次の記録は宝暦六年丙子三月二十一日、日当山嘉例川村検地名寄帳貳冊之内二番瀬尾武右エ門とある検地帳の門名と門番号

を記るし検地の順序を示して居るものである。

嘉例川村検地名寄帳貳冊の二番には、

一、前田門	一、堂脇門	一、福元門	一、有嶋屋敷
一、有村屋敷	一、引地門	一、富田門	一、上福元門
一、米沢門	一、米丸門	一、横井屋敷	一、福永屋敷
一、徳丸門	一、庄屋浮免	一、永作浮免	

この門の中 徳丸門の検地名寄を引用して当時の検地の内容を見ると門の男女の人数、屋敷の面積、これに対する生産量を示して居る。

名頭の氏名年齢並に家族の名前と年齢、名頭との続柄を示し、次に名子の年齢、名前と名子家族との続柄を記るして居る。各名子の屋敷面積評価額の生産量が記るされて居る。門内の各人の耕作地の字、地目、地積、評価が記入され評価が出来高を以て記るされて居る。

各門の検地名寄の最後に田、畑、屋敷の面積が集計され内訳が田方、畠方、屋敷と各面積の集計がなされて居る。

次に粳大豆の生産量の集計と内訳の粳、大豆の生産量が集計されて記るしてあるが、田は粳、畑は大豆で地価評価がなされて居る。

次に上木に対する評価が集計されて居るが上木は壹木に付粳一升で換算されて居ることが判る。

次に高が記るされて居る。徳丸門の高は三拾貳石七斗五升



中山神社（隼人町野久美田）

四合壺勺六才となつて居る。

次に桑九本、櫛壺本と記されて居る。計拾本である。この拾本に榎一升を充てると壺斗であるので上木榎壺斗と記るされて居る理由がわかる。田は榎で示し畠は大豆で示されて居る。

嘉例川検地帳二冊の二の高

合田畠屋敷六拾町三反九畝二歩

田方拾三町五畝拾八歩

畠方四拾三町六反四畝拾三歩

屋敷三町六反九畝壺歩

合榎大豆千七拾六俵三斗四升六合貳勺貳才

榎六百三拾俵八升三合

大豆四百四拾四俵四升五合壺勺貳才

上木榎貳俵貳斗壺升八合壺勺

高三百九拾貳石六斗五升貳合三勺壺才

合茶壺斤百六拾五匁

合桑五拾六本

合柿貳拾貳本

合櫛八本

合山唐竹五拾三束

合柴竹 六拾四束

合男女百七拾壺人

男百八人

女六拾三人

合馬三十八疋

嘉例川検地帳の二冊の一、二の惣合高

惣合田畠屋敷百八町九反七畝二十壺歩

田方貳拾参町三反拾五歩

畠方七拾七町九反九畝二十三歩

屋敷七町六反七畝拾三歩

惣合榎大豆貳千三百三俵四升三合壺勺

粃千貳百四拾五俵壹斗五升

大豆八百五拾二俵三斗

上木粃三俵貳斗九升三合壹勺

高七百六拾六石七斗六升三合六勺五才

惣合茶貳斤百六拾五匁

惣合桑 七拾貳本

惣合柿 四拾三本

惣合櫨 拾 本

惣合小唐竹百三拾五束

惣合柴竹七拾四束

惣合男女三百六拾九人

男二百三拾九人

女百三十人

合牛馬八拾疋

牛 壹疋

馬七拾九疋

郡見廻  
古川太市左エ門

宝曆六年子三月五日

暖(?)

最勝寺 利 助

筆算 小根占

久木山 彦九郎

右同 出水

井上 半右エ門

右同 郡山

白坂 喜兵衛

筆算 山崎

今村 奎右エ門

右同 指宿

山田 武兵衛

筆者

池水 助右エ門

徳尾 武左エ門

(瀬?)

### ◎ 貢 租

a 薩政時代の地価等級「検地名寄」

宝曆六年丙子三月二一日隅州桑原郡日当山嘉例川御検地名寄帳(貳冊ノ内二番) 徳尾武左エ門とある検地帳のなか、ら検地による屋敷、田、畠、山畑等の格付がなされて居るのを見ると一筆毎に調査され屋敷、田、畠は上中下の他下々等数階級に分けられて居る。



水 神 碑 (大津川原)



県立隼人工業高等学校（隼人町内山田）

石盛をする。この石盛を土地面積に掛ければ土地の石高が算出される。

屋敷は、上・中・下・下々屋敷と四階級に分け、田も同様上、中、下、下々に分けられ、畠も上・中・下・下々畠と四階級に分けられて居る。山畑は級別の区分はなく一通りである。

#### b 屋敷

上屋敷

。註 同名寄の中に上屋敷は見当らない。

中屋敷 十間 七畦

貢租の大部分

は土地に課せられたので、その基礎になるのが石高で地価に相当する。

石高を定めるため田、畠、屋敷を一筆毎に測量して面積を算出し、地味水利等を調べ、その土地からの収穫高をだすために

大豆 壹俵八升四合

下屋敷 二四間 貳反貳畝二四歩 佐左エ門

大豆 三俵九升

下々屋敷 二九間 壹反三畝九歩 三左エ門

大豆 壹俵二斗三升五合

田 五反田

上田 十一間 壹反二畝二十五歩 吉左エ門

籾 九俵一斗一升

中田 十二間 五畝拾貳歩 源七

籾 三俵一斗

山王免下 下田 十一間 壹反六畝四歩 籾 十俵八升

籾 五俵四升

立神 下々田 十五間 九畝〇九歩 籾 三俵二斗九升

赤籾 壹俵三斗二升

市左エ門

#### c 畠

上畑 八間 六畝四歩 莊助

大豆 壹斗五升三合

狐ヶ迫 中畠 十六間 壹反三畝二十六歩 次兵衛

大豆 貳俵貳斗七升一合

豆田 下畠 十四間 四畝二十歩 三右エ門

大豆 壹斗八升七合



白坂助左衛門墓（日当山城內）

後ヶ追  
下々畑 十四間  
三十間

壹反貳畝

六左エ門

大豆壹俵壹斗三升

山畑

北山  
山畑 十二間  
五十間

貳反歩

權左エ門

大豆三俵壹斗五升

（註） 地目の脇に小字名が記るされ反別の脇に七町が記入されて居る。

d 上木高

柿、桑、櫨等上木は壹本粃一升、茶五十匁は粃七合。（茶の匁と

粃の割合は多少の差違も認められる。）

豆で示されて居る。この何斗何升〃合〃才とあるのが地価を示し税金の基礎である。

前にも述べたが、本田与左衛門親良が抱地を見立て、抱地の願出をして居るが寛延二年四月郡奉行相良次兵衛が竿入れをして居る。同抱地について寛政四年四月郡奉行の村田源左衛門が石入れをして居る。

碑文に「寛政四未四月御郡奉行村田源左衛門殿直御竿被石入」とある。これは抱地を実測して居る事である。その面積の出来高を算定して貢租の対象農地として居ることである。

# ① 年貢と百姓

江戸時代領主は村高に対して何割といって賦課したので村では名寄帳に記された名頭を始め名子家族の持高に応じて賦課した。当時は租税は三種に分けられ第一の年貢は田畑、屋敷の地租で本年貢、本物成などと言われ貢租の基礎であった。

租米には口米その他附加税的な附帯した貢租があった。江戸幕府は元和二年（一六一六）七月に一俵三斗七升につき口米、欠米として各一升宛、銭納の時は百文につき三文の口米と定めた。

第二に雑税として小物成、運上、冥加などがあつた。これは本租に対する小年貢と言うべきもので小物成とも言われ山林原野などに課せられた。

第三に課役として夫役または雑租とも言ふべき高掛物であつた。これは石高に応じて課するもので諸種の夫役や役用米等として徴集した。貢租は領主や地方によつて、それぞれ差があつた様である。

万治二年（一六五九年）知行物定帳によると、

一、御蔵入並諸給地行高、高一石に付、定代三斗五升、外高一石二付役米三升、但從年役米多少可相定事、先当年如斯相究也。

右從<sub>レ</sub>年風損干損に逢百姓より郡座江申出候は、以<sub>二</sub>相談上<sub>一</sub>檢者可<sub>二</sub>相定<sub>一</sub>候。

一、高三十石の門一ツに付年中納物の定。

#### 正月の納物

一、藁筵三枚、代銀三匁 一、節木四束、代銀二匁、一、萩二束、代二十文、一、炭壺俵三斗入、一、薪四束錢七拾文。一、箸木

拾五匁 一、芋三升、三十文、一、山ノ芋 一、きね二つ、二十文 一、若木二束三十五文 一、おやし五合漬三十六文

一、いずり葉近所より 一、もろむぎ一枚、一、たら 一、門松

三月三日、五月五日、從<sub>二</sub>近所<sub>一</sub>

一、蓬 一、ききがや 一、しょうぶ

右從<sub>二</sub>五里<sub>一</sub>内、現物にて色々相納、五里より外は代物たるべし

一、物干竿 一、右台四本

#### 七月盆の納物

一、ともし松壺束長一尺五寸回り二尺 一、津萩並水子用の茶三十文

#### 風構納物

一、長木五本二匁 一、わら筵四枚代銀一匁六分 一、半繩拾房<sub>三十尋</sub> 一、小繩三房<sub>五十尋</sub> 一、畳裏二帖但六帖代銀二匁六分

一、右からくり糸並へり付糸一匁代銀一匁

一、夫仕、拾五才より六拾才迄の者、面付一人に付年中拾貳人宛可<sub>二</sub>召仕<sub>一</sub>事。

一、百姓納物持參候時逗留仕候はば可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>領主賄<sub>一</sub>事

一、諸給人より百姓江右御定之納物夫仕可被申付幾度も庄屋江可被申渡直ちに百姓方江被申付儀可為停止勿論御法の外は庄屋請付けまじく候。庄屋百姓江至非道之儀於有之ては百姓より披露可申候。

右之条々此度相定候間何れも可被致其心得若此外に領主より百姓江無理非道の儀被申付人於有之者可為御沙汰候条右之条々堅与中へ可被仙渡者也。

万治二年亥八月朔日

右衛門

筑前

以上は国分郷土史に記載されている。門高に対する基本税（年貢）は高一石について三斗五升であつた。この本税に対する種々の附加税として、次のようなものがあつた。

上木高——茶、柿、桑、ハゼの木等に課する税で田高並に米で納めた。一本に一升の割であつた。

口米口入——輸送中の欠損を補充する為高一石に七合を納めさせた。取扱中の減目（へりめ）を補うためのもの。

役米——これは前記した年中納物の代納米で高一石に付一升を納めさせた。この米を納めない者は現物を納めた。

賦米——参勤交代その他役人出張に対する夫役でかつて高一石に付一升一合の代納米を納めさせた。

以上の正税、附加税まで合計すると玄米四斗が高一石に対する上納米（年貢）であつた。高一石は粳高であつたので玄米換算五斗余りとなり約八割が年貢で重税を課したことになる。

百姓は米作りの米くわずで、粟、甘藷、雑穀などの畑作によつて生存した所以がこゝにあつたのである。「百姓は盆、正月と普請と葬儀の時だけしか米の飯は食へなかつた。」と古老の語り草があるが、それ程年貢に米をとられていたことが分かる。

畑高は一石当り雑穀七斗の定めで大豆、粟となり粟は通常代銀納めであつた。

賦役（公役）は百姓は十五才以上六十才未満として義務づけられた。役所の普請、溝、川、井戸、道路、橋の改修等非常に多く「一月に三十五日の公役」と言われた。女子は十五人で男子一人分の賦役代銀二分納めた。

このような重い税を負担させられた百姓は農産物生産高から人件費、農具欠損、肥料代など差引くことも出来ず貧しい生活に陥いつて、上からの重圧に屈して居なければならなかつた。江戸時代三百年の間に農民の生活が停滞して進歩しなかつた原因と言えよう。

明治の時代に入っても領主（知行主）と門百姓の貢納形態は地主と小作人の関係に移行して重い小作料は現物納入として残り年中貢物の慣例は太平洋戦争前迄つゞいた。

現在に於ても籠と在の關係は形の上で残り在方の家人（下人）であつたものは籠の旦那の桓根の補修、正月の飾り、盆の墓清掃など旦那家の仕事を先に済まして自分の仕事に取かゝる習しが残っているが、これ等は江戸時代からの形態が現在迄引つがれている。所謂風構物の名残りであると言えよう。

年貢を怠納すると清水村では十二月末から一月の真冬の一寒い時季に籠地区のトブ溝浚えに早朝から引出された。これは明治中頃迄行われたとのことである。後年日露戦役の勇士が帰郷して満州の冷たさを語つたところ、トブ溝浚えをさせられた古老が「師走のトブ浚え位はあるだろうか」と、その冷たさを語つたことが伝えられて居る。それ程の体罰を加えて年貢の取立てはきびしく行つた例である。

#### ④ 百姓の困窮と高の処理

江戸時代の農民は武士階級の生活を維持するための道具でしかなかった。封建制度を維持するために重税が課せられたことは前に述べた通りである。

生活に困つた百姓は土地を質入れしたり更に困つたものは逃散した。所謂潰れ百姓の数は相当数にのぼつたと言われる。「御年貢に差詰つた」のが理由である。すなわち年貢が完納出来ないことであつた。

薩藩内のこの地方では古老の話によると五人興が加勢（援助する）をしたり、それでも立直らない場合は、高を名子が預つたり他の門の名頭が一時預つて経営を続け、他藩に見るような逃散や潰れ百姓はなかつた。門高を預つた百姓は年貢一切を引受けることが条件で高を預けた者は預つた者の差配に従つた。このようなことは名頭が幼稚であつたり、名頭が病氣であつたりして一門の切回しが不能の状態である場合が多かつた。

別項でも述べた通り「高を繰つて貰う」と言う言葉通り門高の差配をして貰うことである。この様にして藩では門を潰すことは許さず代理人を置いて年貢の完収を計つたものと推量される。この「繰つて貰つた」門高が明治の地租改正、地券公布時は「高く、つた」者の所有に歸した例は多いが如何なる理由によるものかは判然としない。

#### ⑤ 小作制度

困窮した門百姓の土地の売買は禁止されて居たので借金の担保物件として土地を差入れたことは許されていた様である。この土地は年限をきめて質入れしてその間年貢等は一切貸主に於て引受け貸主が耕作した。又借主が耕作する場合は金利を支払ふことは勿論であるが、差入れの土地の出来高の何割かを金利として貸主に納めた。この様な関係で質流等が多くなり大土地所有者が出てくると小百姓の数が増大して来た。明治の地租改正までは地主、小作人の関係は極めてすくなかったが、地租改正後地券が下渡され土地永代売買の禁止がとかれると急に土地売買が始まり地主、小作人の関係が多くなって来た。

この地方では「書入れ担保」と言つて借用証に土地の地番地積地価地租金所有者を書き入れ、若し年限内に返済出来ぬ場合は右土地については貴殿に於て勝手に可被成と書入れて担保流れを承諾して居る。この様にして土地所有が金主に移動して行つた。

年限をきめて土地を売渡し又金を借用し土地を売渡す約束で担保として、その期間内に借入金返済し土地を取返すことを「本目返し」と言つた。この場合買主、貸主とは異議無く土地を返済しなければならなかった。所有権の移転から、後には占有のみを移転する質物が生じ、土地私有の認められない農民は、その子女の労働力が質物視された。

借財のため田畑を質入れして質流れなどによつて土地の移動が行われ大土地所有者や権利者が出来来て借主が耕作を続けて地料として米を貸主に納める様になり小作関係が出来てきた。

この頃は多く口約で行われ文書契約はない様である。地料の現物米は領主の貢租と同じように歩納米と言われ納期は旧暦師走（十二月）の二十五日迄と決められたが、明治になって太陽暦となつたので一月二十五日と変つた様である。

抱地等は郷士が受引け各村の門名頭、名子等へ耕作させて利鞘をとつて所有者へ上納米を納めた。所謂転貸であるが抱地の所有者との約束は郷士達であつて納米の責任者であつた。このような関係も小作発生の一因と言えよう。

小作料は検地名寄帳にある上、中、下、下々田等の地位によつて上納米は相応にきめられた。大体に於て生産量の五割から五割五分位であつた。

#### ⑭ 明治時代

#### ① 土地に対する統制の解除と所有権の確認

江戸時代には土地に対する厳しい統制が行われていたが明治維新の大改革をむかえて封建時代から解放された。諸新制度が統制と公布になったが庶民に直接の影響があつたのは明治四年の土地利用の制限を解除したこと、明治五年の田畑の売買禁止令が解除

され土地の取引が自由になったことである。明治五年二月二四日に地券制度が設けられ個人の土地所有権が確認されることになったことである。明治四年県政の中心人物大山綱良は中下級士族や私学校の力を背景に中央政府に反抗した。

清水郷土史によると明治十二年地租改正丈量を行って、十七年に地券証が下渡しになっている。鹿児島県は丁丑戦等の関係から他府県よりも遅れたのではないかと推量される。木戸孝允をして「半ば独立国の如し」となげかせる有様であった。

#### ㊦ 抱地を郷士族に売渡す事

「明治三年八月鹿児島より諸郷江掛持の抱地高総て其郷々士族に売渡す可き旨且自今抱地名目は自作地と召替らる」とある様に鹿児島士の抱地持分は諸郷の郷士へ売渡す様に命ぜられた。当時の農地改革と言えよう。明治政府は版籍奉還後の政策として更に明治六年（一八七三）十二月田畑の売買譲渡を自由にし、地租改正令を公布したので明治維新の影響が一般庶民の生活に及ぶことになった。

#### 地租改正の主要な点は、

- 一、従来の収穫高標準の課税法から地価を定めて標準とした。
- 二、その税率を全国一率に三パーセントとした。
- 三、課税対象を耕作者から地主に改めさせた。
- 四、従来の石高を廃して、耕地面積を反別で表した。
- 五、物納から金納に改められた。

#### ㊧ 作付の制限

正宮政所下文の中に芋、桑、漆等を植栽せしめることを下知している。

正宮政所下

上小河

仰下

参簡条

- (二簡条略ス)  
一、可早殖加芋桑漆等事

右治政之習以芋桑漆為要者可殖加之以前参簡条任下知

近日宜承知依仰行之

延文三年正月十八日

修理執行当息長

(一、三三八)

修理執行綾カ

右の文から見ると勝手に作物を植付けることは出来なかった。これは貢租の関係があるからである。この文によつて国

分地方に苧麻桑による繊維製品の原料が生産され、漆を植えて工業原料が生産されたことがわかる。

同様の政所下文が嘉吉元年(一、四四一年)修理別当大法師名で出されている。

## ② 土地制限の解除

明治六年(一八七三)政府は維新以後の諸事業に莫大な経費を要した。この費用は三井、小野、島田、鴻池等の大商人に課した御用金や大政官札を発行して財政を賄った。版籍奉還後は藩が徴収していた貢租をそのまゝ受継いだ。この貢租主に現物の米穀で納められたが、農作物の豊凶や米価の変動に左右せられたので、予算として政府が計画をたてにくかった。又藩によって税率も違っていた。

以上の様な理由で政府は地租の改正を行った。

## △地租改正令

廃藩置県後、大蔵省から「米麦雑穀に限らずその土地に適するものを栽培せしむ」と土地利用の制限を解除し耕作の自由を認め、明治五年(一八七二年)太政官布告で「地所永代売買の儀従来禁制の処、自今、四民共売買致所持候儀差許候事」として、田畑永代売買の禁、分地制限令を解除した。

## 永代売渡証書

中城  
上畠

五間半  
二十二間  
四畦  
壹歩

新右衛門

大豆壹石五升三合

地価五百三十拾貫文⑩

右地面双方熟談ニ依テ永代売渡し候儀

相違無御座候 就而ハ地価金右員数ノ通正ニ受取申候左候而往々ニ至リ何事申上間敷後リ為メ(念)御規則ノ印紙並證杯人連印ヲ以売渡し証書如件

売主 満富袈裟次郎⑩

か、り合 小松惣右衛門⑩

明治十二年卯四月三日

松田仲之丞様

(註) 證杯人(シヨウハイニン)證據人  
か、り合(関係人、証人)

売渡証

字竹下  
二千八百七十三番

一、田反別七畝二十三歩

持主 徳持金太郎

此地価金四円六十七銭

此地租金十一銭七厘

右之地所 地価金三十二円ヲ以貴殿へ

売渡候儀ハ実正也券状等ノ書換之儀ハ

御方御勝手次第可被成候依為後日

売渡証如件

売主

徳持金太郎

保証人

永吉吉三次

明治十六年旧三月一日

松田仲之丞殿

前書之地所相違無之候也

姫城村與合世話人

満富計左次郎

これは明治十二年の永代売渡証書であるが、大豆壺石五升三合とあるのは検地による收穫高を物納させた土地評価額であり、課税（貢租）のための土地評価であると考えられる。この頃迄

明治二十年になると各郷に登記所が設られ旧清水郷に弟子丸登記所があった。

明治二十四年頃になると国分に加治木区裁判所国分出張所で土地売買の登記移転事務がなされている。これから現在の不動産登記が行われる様になった。

#### ⑤ 地租改正と新税法

明治維新の新政府によって封建的諸制度は廃止改革されたが、租税については江戸時代の貢租制度が踏襲されていた。明治五年には新政府の型を整える等の事情もあって増税の兆候さえあった。

封建時代の貢租は作物の出来高によって左右せられたので藩政や幕府、明治新政府に至っても財政の不安定さがあった。新政府はこの不安定財政は貢租が現物であることにより豊凶または物価の上り下りによることが原因であることを究めて税法を改正して財政の安定を企図した。政府は明治七年（一八七四）に地租改正条例を公布して地租の改正に着手した。

この新税法の改正点は従来收穫を標準としていたのを改めて地価を定めて課税標準として税率を地価の百分の三と決め、物納制

は地券が各個人に手渡されていなかったものと見られる。

明治十六年頃になると整備され売渡証に字、地番、地目、地積、地価金、地租等が明記されて居る。売渡書の最後に前書之地所相違無之候也とあって姫城村與合世話人満富計佐次郎が、売買を証明している。

明治十七年頃になると売渡証と地券と戸長役場の割印がなされ、証書の最後に地売第×号と朱書して「前書之地所相違無之候也」と書かれ、右戸長代理、田係何某⑥と書き割印がなされて売渡し証明されて所有権の移動が行われている。

明治十七年五月頃になると各村（大字）の戸長名で土地売買所有権の移転が証され、明治十八年九月になると戸長名で「田第×号、前書地所之売買ヲ公認ス」と公証している。

を廃して金納制としたことであつた。作物の豊凶によらず増減無く一定の税収が確保できることであつた。

新税法は明治九年（一八七六）から実施され金納制となつたが、その価額は「旧蔵の米価」によって収めることにしたが、米価が下落した、め貢租の額は倍額となつた。その上收穫が納らないのに納期が迫つた、め農民は苦境に立たされた。そのほか畑の租も増え民費賦課の法が新に設けられ増税の方向にあつた。

封建時代から解放感に喜んだ人民も貢租という「かせ」から脱する事は出来なかつた。重税に困窮して来た農民は減税を主張し全国に騒動が起つた。この世論によつて政府は明治十年（一八七七）に地価の百分の二・五に貢租を引下ることになつた。

「竹槍でどんと突き出す二分五厘」というのはこの時のことである。

明治六年（一八七三）から明治十四年（一八八一年）迄の間に検地を行つて地券（土地所有証明）を発行して、準備の出来た地方から地租改正を実施した。

従来收穫高によつて耕作農民に課し米穀などを物納させて居たのを改め、地価の百分の三を土地所有者に課し現金で納めさせ入会地を国有にした。

#### ④ 地租改正に対する明治十年の措置

地租改正令が出て明治十年の西南役によつて鹿児島県は他府県より遅延したものと先にも述べたが次の「地租改正事務総裁への上申書」を見ると官軍賊徒が一時占拠して兵災に罹り焦土荒廃して士民が帰住しかね非常の苦困に陥りとある通り税の賦課徴集等に困難を來たしたことを知ることが出来る。

罹災の深淺調査の上税額を徴し」とあるのを見ると戦災による度合に依つて賦課徴集が勘案されたこと、思われる。

#### ⑤ 地租改正事務総裁への上申書

当県下本年租額を定むるの儀御委任被成度旨八月中上申致候処九月二十七日付を以云々御指令相成候に付不遠徴集之貢額を結具了申可仕運々有之然るに沽券税地之開戦以來鹿児島は勿論谷山、重富、加治木、福山其他各郷麓（所謂外域是也方言）の如きは官軍又は賊徒一時占拠する所となり自然兵災に罹り焦土荒廢に属するもの不少未だ全く士民帰住仕兼実に非常の困苦に陥り候儀に付是又先般御指令済に基き罹災之深淺調査之上相当の税額を徴し田畑一同可申上候間御聞置被下度此旨上申仕候也。（丁丑日誌より）

#### ⑥ 明治十年々貢米上納手続き

明治十年西南の役で薩、隅、日等の地は混乱し貢租米等についても懸念されたようである。明治十二年十二月十二日雨水曜日、丙第三十二号布達を以て次の様に薩隅両州へ貢米上納手續書が布達された。

布達の内容は次に掲げる通り従前の方式通りで取立てについては戦災地と雖もゆるめて居ないことがわかる。

第五条を見ると縄俵及米拵等一俵毎に米性の善悪、縄俵等を正副戸長が検査して不都合の分は説諭して拵直しを命ずるようにし又第八条では小撰より三俵つ、量り様し若し不足の節は其の小撰丈けの俵数へ其の不足米を増加せしめ石詰別俵を以て上納を申付可しと厳しい達しをしている。又九条では三盃入りは九十五升を以て定法とし軽重定法より四斤以上の差あるものは別俵とし拵直を申付る等の布達をしている。当時貢租米の上納が厳しかったことを推測することが出来る。

① 明治十年貢米上納手續き

薩隅両州

本年貢米上納手續の儀別紙之通相定候条此旨布達候事

第一条 貢米拵方の儀は従前の通り碎ヶ米糲交り等無之様可成丈ヶ念ヲ入レ可申事

第二条 縄俵拵方は是又従前の通相心得精々念入れ粗漏の拵方致間敷事

第三条 俵入の儀は其村々の仕来に拠り従前の通り三盃入或は二盃入に相仕立目溢れ欠減等無之様可致事

第四条 貢米量り立の儀は従前の通り起先の法に倣左の通り収納取計可致事

三盃入一俵 本租米三斗二升

延米壹升六合

小以来三斗三升六合

外米一升六合込米金納の分は此込米上納に

及ばず

合米三斗五升二合

此量目八十八斤従前の一先に当る

外縄俵此量凡七斤

量用合九十五斤

二盃入一俵

本租米二斗一升三合

延米壹升一合

小以外二斗二升四合

外米壹升壹合込米 金納の分は此込米上納に及ばず

合米二斗三升五合

此量目五十九斤 従前の一先に当る。

外縄俵

此量凡六斤

量目合六十五斤

第五條 各村に於て縄俵及米拵等出来候はば其村村便宜の場所へ取集めさせ割印村收納と云正副戸長に於て壹俵毎に米性の善惡縄俵及俵入等を檢査し不都合の分は説論の上拵直し申付格護致し置べし

第六條 右格護中火盜等に罹らざる様昼夜番人を附置其俵数は戸長より県庁へ届出べし

但本文番人の費用は其村費たるべし

第七條 第五條の通村收納出来其旨届出候節は上納の月日を期し官員本藏所迄出張し米拵の善惡及び俵入等を檢査し受取の上藏入取計べし

但官員出張の期限は其時に可相達事

第八條 俵入改方は五百俵を以て一大撰とし其内より同斤の俵数を各小撰に分ち闖入の上各小撰より三俵つ、量り様し取計ひ若し不足の節は其小撰丈けの俵数へ其不足米を増加し石詰別俵を以上納申付可し但五百俵以下百俵迄は本文の通り取計ひ百俵以下三拾俵迄は一小撰より二俵つ、量り様し三拾表以下は一小撰に壹俵つ、量り様し本文の通取計ふ可し仮令へは其例左の如し

三孟入

一米五百俵 一大撰とす

百俵 九十六斤

三百俵 九十五斤 一小撰

百俵 九十四斤 一小撰

二孟入

一米五百俵

内百俵 六十六斤 一小撰

三百俵 六十五斤 一小撰

百俵 六十四斤 一小撰

右一小撰毎に闖入の上当闖の三俵を量り様し又百俵迄は一小撰に付二俵つ、三拾表以下は一小撰に付壹俵つ、量り様し本文の通り取計ふべし

第九條 前條の斤量を收入す可しと雖ども三孟入は九十五斤を以て定法とし若し輕重定法より四斤以上の差異あるものは別俵とし更に拵直し申付へし又二孟入は六十五斤を定法とし定法より以上の差あるものは別俵とし更に拵直し申付べし

第十條 赤米の俵は米性も粗惡なるが故自然斤量も又輕量なるべし因て實際收入の節斟酌の上前々條に準ず。

第十一條 倉庫の儀ハ從前のヶ所迄收納の筈に候共自然兵乱の為の焼亡或は大破等に罹る分は接近便宜の藏の莊所へ合収し又小破の分は至急修繕を加へ設所迄收納候儀と相心得べし

第十二條 從前延米及込米の如きは現に收納すと雖ども渾て其の受納証へは登記せざるの習慣に候処本年は本租は勿論

延米とも御規則の通收入し其請取証を下附すべし

第十三条 斤量及び耕廻は其方にて事馴れたる者を撰み取扱を  
申付すべし

第十四条 差札の儀は左の通りたるべし

長さ壹尺位、巾八分位竹にて宜し

表 月日 見分 戸長 何之誰

裏 何郷何村 何之誰

(以上)

地租改正の後は政府の財政は安定して地租の經常歳入に対する割合は一八七二年には八割強となり、一八七三年には八割五分を占め、政府当局は「地租は國家ノ經費ヲ供給スル大本ト爲ス」全國ノ租税中地租ハ十ノ八、九ニ居ル(地租關係書類彙纂)と述べている。産業の發展、對外活動を進めやすくなり、農民の土地所有權が明確になった。

然し一方に於ては地租は當時の土地收入の三割以上に當り、藩政時代の貢租と變らなかつた。土地の所有權が明確になると小作人(下作人)は以前と變らず高い小作料を現物で納めなくてはならなかつた。そのうえ金納は地主に有利で大地主も發生した。入会地の國有化は、農民にとって不利で飼料や薪類などを採る土地を失はせた。本土山(東國分本土)など、その一例である。

## ㊦ 改正後の變化

御一新の政府の政策は國民の期待を裏切つた形となつた。新らしい政策が次々と出され、太陽曆採用、學校設立、種痘の實施、戸數調査、穢多の開放、キリスト教禁制撤廃等に農民は反抗的であつた。その件數は明治の初年から十年間に百九十回以上に達した。

政府は明治十年(一八七七年)に地租を百分の二・五に引き下げた。この反抗運動で自信を得た農民は、「竹槍でどんとつき出す二分五厘」などといつて、のちには自由民權運動と結びついた。

## ㊧ 地租改正の收入の變化

上の表は地租改正後の國、地主、小作人の各々の收入率を示しているが、地主の率だけが上つてゐる。當時米価は上がり、現物で納める小作料には變化がなかつたが、小作料から地租を控除した地主の收入は米価の上つた分だけ増大したことになる。

當時の地方官心得に示された檢査例によると、田一反の收穫米一石六斗、石三円として代金四円八十銭のとき、地租は一円十二錢四厘、村入費は地租の三分ノ一で四十錢八厘、地租と村入費を合せると收穫米代価の三四パーセントに當つて居る。

	國家	地主	小作人
1823 (明治6年)	34%	34%	32%
1874~76(明治7年~9年)	13	55	32
1877 (明治10年)	18	50	32
1878~83(明治11年~16年)	10	58	32

㊦ 地租改正前後の取りまゑの変化

江戸時代の小作関係は、明治以後になると、地主または自作農が地租納入責任者となり、その関係も物納小作料によって再統一された。然し地租改正以後、年貢である地租は金納であるのに、小作料は物納であつたため商品生産や資本制生産の急激な発達によつて米価が高騰し地主は利益を収めることが多くなつた。そのため一定している地租は相対的に地主、自作農の収入に対する割合を減ずることとなつた。

地主は土地所有者となり、實質上全余剰生産物を搾取するようになるので税が減ずるに反して地主の総米は増加していくことになつた。耕作者は江戸時代末期に比べ一八八五年（明治十八年）には僅かに三パーセントの増加しか示していない。

（中田一反あたり取りまゑの変化）

㊧ 反収基準引上げによる増税

明治十二年五月襲山郷嘉例川村の地位等級反別調牒があるが田は一等級から等外一等迄七段階に区分されて畑は同じく一等級から等外一等迄六階級に区分、宅地は一等から六等級迄区分されて居る。切換畑は一等、二等の二段階に区分されて居る。

明治十二年に等級別反別調をして一応基礎を押え、翌十三年に反当收穫量を等級別に定め同十三年の十一月に地価金の決定をして居る。

この調査は税率が三分から二分五厘に引下げられた後の調査であるが明治十三年の初の調査では一等田反収壹石二斗二升となつて居るが、同年十一月の等級收穫地価調べによると、一等田反収は一石八斗と五斗八升の上昇が見られる。二等田に於ては壹石壹斗が壹石六斗と五斗の上昇が行われ以下全地目等級別反収は全部引上げられて居る。税率を二分五厘に引下げて同十三年の基準反収が十二年調査より〇・四七％上昇して居ることによつて二分五厘の引下げは十三年には増税となつて現われた事は間違いない。

㊨ 田、畑、宅地、切換畑の等級区分

明治十二年卯十一月の大隅国桑原郡襲山郷嘉例川村の地位等級反別調牒があるが、

○田は一等級から六等級にわけ等外一等の七階級にわけられて居る。

○畑は一等級から五等級迄にわけ等外一等の六階級にわけられて居る。

○宅地は一等級から六等級迄わけられて居る。

○切換畑は一等二等の二階級にわけられて居る。

明治十二年卯五月の嘉例川村の地位等級反別調牒は次のように区分されて居る。

襲山郷嘉例川村地位等級反別表

一等	田七反三畝拾七步
二等	田六反七畝四步
三等	田壹町四反壹畝拾壹步
四等	田貳町五反五畝二十四步
五等	田七町四反五畝五步
六等	田拾町七反壹畝二十貳步
小計	反別貳拾三町五反四畝二十三步
等外一等	田拾町貳反八畝二十步
合計	反別三拾三町八反三畝拾三步
一等	畑四反拾七步
二等	畑壹町七反四畝拾步
三等	畑四町三反八畝拾七步
四等	畑拾七町九反壹畝六步
五等	畑百町九反七畝二十五步
小計	反別百二十五町四反貳畝拾五步
等外一等	畑五拾三町六反五畝拾八步
合計	百七拾九町八反八畝拾貳步
一等一宅地	八反八畝拾貳步

二等 宅地壹町七反四畝二十步

三等 宅地四町貳反壹畝二十九步

四等 宅地三町八反四畝四步

五等 宅地五町六反壹畝拾三步

六等 宅地四町四反貳畝二十壹步

合計反別 二十町七反三畝九步

一等 切換畑五拾三町八反九畝拾步

二等 切換畑百二十四町壹畝拾九步

合計 百七拾七町九反二十九步

惣合計反別 四百拾壹町五反五畝二十四步

明治十二年卯十一月二十四日

収 穫 調 (明治十三年)

明治十三年襲山郷嘉例川村収穫調がある。等級別に田、畑、切換畑の反別が集計され反当生産量が決められ収穫米量が算出してある。

この調へは田は米で畑、切換畑は大麦で反収基準が示されている。藩政時代は水田を除く畠、山畑、屋敷は大豆で評価されているが明治になって畑類は大麦で示されて居る。

③ 反当収穫量基準級差

田に於て反当収穫基準は一等田壹石貳斗五升で六等級迄は壹斗五升の級差が附せられて居る。六等級と等外の級差は五升である。

畑に於ては一等級より等外迄の反当基準級差は一等級九斗五升を基準に壹斗五升の級差が附せられて居る。

切換田に於ては一等級と二等級の差は田地と同様五升の級差が附けられて居る。

明治十三年

襲山郷嘉例川村収穫調

一等田 反別七反三畝拾七步 壹石貳斗五升

収穫米九石壹斗九升五合

二等田 反別六反七畝四步 壹石壹斗

収穫米七石三斗八升四合

三等田 反別壹町四反壹畝拾壹步 九斗五升

収穫米拾參石四斗二升九合

四等田 反別貳町五反五畝二十四步 八斗

収穫米貳拾石四斗六升四合

五等田 反別七町四反五畝五步 六斗五升

収穫米四拾八石四斗三升五合

六等田 反別拾町七反壹畝二十貳步 五斗

収穫米五拾三石五斗八升六合

等外一等田 拾町貳反八畝二十步 四斗五升

収穫米四拾六石貳斗八升九合

合計反別 三拾三町八反三畝拾參步

収穫米百九拾八石七斗八升二合

平均壹反歩二付

五斗八升七合五勺三才

畑 (収穫調) 明治十三年

一等畑 反別四反拾七步 九斗五升

収穫大麦三石八斗五升三合

二等畑 反別壹町七反四畝拾步 八斗

収穫大麦拾三石九斗四升六合

三等畑 反別四町三反八畝貳拾七步六斗五升

収穫大麦貳拾八石五斗六合

四等畑 反別拾七町九反壹畝六步 五斗

収穫大麦八拾九石五斗六升

五等畑 反別百町九反七畝二十五步 三斗五升

収穫大麦三百五拾三石四斗貳升四合

等外畑 反別五拾三町六反五畝拾八步 貳斗

収穫大麦百六拾石九斗六升八合

計反別百七拾九町八畝三步

収穫大麦六百五拾石貳斗五升七合

平均壹反歩二付

三斗三升三合一勺五才

切換畑 (収穫調) 明治十三年

一等畑 反別五拾三町八反九畝拾步 壹斗五升

収穫大麦八拾石八斗四升

二等 反別百二十四町壹畝拾九歩 壹斗

收穫大麦百二十四石壹升六合

計 反別百七拾七町九反二十九歩

收穫大麦貳百四石八斗五升六合

平均壹反歩二付

壹斗壹升五合壹勺五才

田畑總面積に対する等級別反別の百分比

地目 級	田 (百分比)	畑 (百分比)
一等級	0.02%	0.025%
二等級	0.02%	0.01 %
三等級	0.04%	0.024%
四等級	0.08%	0.100%
五等級	0.20%	0.560%
六等級	0.32%	—
等 外	0.30%	0.300%
	100%	100%

表の通り一等級は田、畑

共に二%〜二・五%。

三等級迄は何れも比率は

低い。

四等級以下の比率は大き

いことがわかる。

田畑共に五等級以下が何れも八%以上を示して居る。

明治十三年十一月に作成提出された大隅国桑原郡嘉例川郷(村)

の土地等級收穫地価調牒によると明治十二年の地位等級反別調べと同十三年の收穫調を一諸にして等級別に反当収量の基準を決め等級別に区分された面積集計が行われ、この面積の收穫米、地価金、地租金が算出されて居る。地価金に対する地租金の割合は二分五厘である。この時の米価は石当り四円九拾参銭、利子六朱となつて居る。米の平均反収は八斗八升一合六勺二才六

毛となつて居る。

○畑は各等級別に集計し一等級から等外六階級に区分反当收穫量基準は麦石で決められて居る。維新前は畑は大豆で基準反収が決められていた。平均反収基準量は大麦五斗五升一合二勺九才外八三五となつて居り大麦価は石当り貳円三拾八銭、利子六朱となつて居る。地租金は地価金の二分五厘となつて居り政府が三分から引下げた率であることがわかる。

○宅地に於ては一等から六等迄の六階級に区分して等級別に地積が集計されて居る。最高の一等宅地の反当り二十四円三拾銭から六等級の反当り五円八銭五厘八毛迄六階級の反当り基準が金額で示されて居る。平均すると反当り金拾貳円九厘三毛〇八となつて居る。地租金は地価金の二分五厘となつて居る。

○切換畑は一等から二等迄の二階級にとどまり区分され等級別の面積集計がなされて居る。反収基準は平均大麦壹斗一升三合三勺となつて居る。大麦価は石当り貳円三拾八銭、利子六朱である。

○林は一等から二等迄区分せられ壹町歩に付壹等級拾壹円五十銭、貳等拾円二十銭となつて居る。

○山林 一等級から三等級迄区分され、一等一町歩に付九円六拾四銭六厘から三等級壹町に付七円拾五銭迄である。

○藪 一等級から三等級迄三等級に区分され壹等級一町に付

八円拾五銭から三等級壹町に付六円拾五銭迄区分されて居る。

○秣場 一等級から貳等級迄区分され一町に付貳円二十三銭、二等級壹町に付壹円九拾銭に区分されて居る。  
○山 一等級から貳等級に区分され一等級に付壹円四十二銭、二等級一町に付壹円十二銭となつて居る。

林、山林、藪、秣場、山と細かく分類されて地価決定がなされて居ることは明治時代のめん密なる地租改正の周到さが伺われる。この他に嘉例川村の中に温泉敷地の地価評価があることである。反当り約二二四五〇銭見当で宅地一等級と二等級の間である。所謂宅地一等級に近い評価がなされて居ることである。

卷末に嘉例川戸長の園田彦左衛門、書載人石橋儀輔外嘉例川村の惣代福留太左エ門他五人の惣代が連署捺印して、

萬一不都合之調方仕後日相顕於て者如何様之御処分被仰付候共不苦候と正確であることを誓約して居る。

書載人は何れの場合でも近隣の郷や在所の者ではなく、この場合は福岡県筑前国鞍手郡小牧村出身の石橋儀輔である。恐らくこの石橋は明治十年丁丑の戦時から県や郡の官員として指導的立場の人が転属して居るが、その一人ではないかと推量される。この様な緻密な検地調査が行われて地租改正が行われ従来の米、大豆等の反当收穫基準から円、銭の金銭数字に変わつて来たことである。物納貢租をやめて一律に金納制とし豊凶による政府の貢租増減の差をなくし安定した歳入源を求めた新税法とも言ふ可きものである。

明治十三年の反当基準反収の引上げ。

明治十三年一月頃の反収基準と同年十一月の基準反収比較であるが、各等級別に増収されて居る。

一等田で44%、二等田で45.5%、三等田で47.4%、四等田で50%、五等田で53.8%、六等田で60%、等外田で35%の増率である。一等級から等外迄の平均増収率は48%である。下位等級の増収率が高くなつて居ることもわかる。

(襲山郷嘉例川村収穫調)

年次	等級	1等級	2等級	3等級	4等級	5等級	6等級	等外1等	
明治13年4月	石斗合	12.50	11.00	9.95	8.00	6.500	5.00	0.450	地区申告
明治13年11月		18.00	16.00	14.00	12.00	10.00	0.800	0.618	検地による決定
反 収 増		5.50	5.00	4.50	4.00	3.50	3.60	1.68	地区申告と検地との差
増 収 石 %		0.44%	0.454	0.474	0.500	0.538	0.600	0.351%	増 加 割 合

明治十三年辰五月襲山郷六ヶ村新旧税差引帳嘉例川村と言うのがある。

襲山郷六ヶ村とあり、襲山郷六ヶ村の地目別地積、検査収穫量、地価金、地租金等が集計され下段に但貢納石代相場八掛算出、反当石壹斗六升五合、米価四円九拾三錢利子六米と但書がある。

更に明治十三年十一月に、等級収穫地価調牒大隅国桑原郡嘉例川村がある。内容は全十三年辰五月襲山郷六ヶ村新旧税差引帳と差違は無いが五月の新旧税差引帳には米価四円九拾三錢、利子六米、大麦貳円三十八錢利子六米の算定基礎数字等が書入れてあるので十一月の調牒の下段に記入し地目、地積等の重複をさけた。

#### 襲山郷六ヶ村

定免貢金七千八百三拾貳円七錢三厘但十一年貢納石代相場八掛算出

一、改正田三百拾六町八畝二十三歩

検査収穫米三千六百八拾貳石四斗貳升一合三勺

此地価金拾五万四千三百拾壹円八拾六錢但反当二石一斗六升五合

此地租金三千八百五拾七円七拾九錢七厘但米価四円九拾參錢利子六米

定免トノ差引金三千九百七拾四円貳拾七錢六厘減但居同所

定免貢金千七百七拾七円五拾三錢

一、改正畑地反別八百八拾壹町七反貳畝九歩

此地価金拾三万三千貳百六円九拾九錢

此地租金三千三百三拾円拾七錢五厘

定免ノ差引金千五百五拾貳円九拾四錢五厘増

#### 内訳

畑反別七百九拾壹町三反六畝拾九歩

検査収穫大麦五千七百拾三石六斗六升四合九勺

此地価金拾壹万五千五百八拾七円四拾四錢但反当七斗二升二合

此地租金貳千八百八拾九円六拾八錢六厘但大麦価貳円三拾八錢利子六米

宅地反別九拾町三反五畝四歩

此検査地下金壹万七千六百拾九円五拾五錢

此地租金四百四拾四円四拾八錢九厘但反当金拾九円五拾錢

一、不定田反別壹町三反六畝九歩

検査収穫米三石八斗壹升六合四勺但反当貳斗八升

此地価金百五拾九円九拾三錢

此地租金三円九拾九錢八厘但米価四円九拾三錢利子六米

不定畑反別三町七反拾八歩

検査収穫大麦七石七斗八升二合六勺但反当貳斗壹升

此地価金百五拾七円四拾四錢

此地租金三円九拾三錢六厘但大麦価貳円三拾八錢利子六米

一、切換畑反別四百四拾壹町九反八畝拾歩

検査収穫大麦六百六拾貳石九斗七升五合

此地価金壹万三千四百拾壹円九拾八錢但反当壹斗五升

此地租金三百三拾五円三拾錢但大麦価貳円三拾八錢利子六米

嘉例川村

一、田反別三拾三町八坂三畝拾三步

此收穫米貳百九拾八石三斗五升九合七勺

此地佃金壹万貳千五百貳円七拾六錢

此地租金三百拾貳円五拾六錢九厘

但一反二付米八斗八升壹合八勺貳才六

一、畑反別百七拾九町八畝三步

此收穫米九百八拾七石貳斗七升六勺

此地佃金壹萬九千九百七拾貳円四拾八錢

此地租金四百九拾九円三拾壹錢貳厘

但一反二付麦五斗五升壹合貳勺九才八三五一

一、宅地反別貳拾町七反三畝九步

此地佃金貳千四百八拾九円八拾九錢

此地租金六拾貳円二十四錢七厘

但一反二付金拾貳円九厘三毛〇八

一、切換畑反別百七拾七町九反二十九步

此收穫麦三百八石三斗貳升

此地佃金六千貳百三拾七円三拾壹錢

此地租金百五拾五円九拾三錢貳厘

但一反二付麦壹斗七升三合三勺

明治十三年十一月

等級收穫地佃調牒

大隅国桑原郡

嘉例川邨(村)

壹等田七反三畝拾七步

此收穫米拾三石貳斗四升壹合九勺

此地佃金五百五拾四円九拾錢

此地租金拾三円八拾七錢三厘

貳等田六反七畝四步

此收穫米拾石七斗四升壹合三勺

此地佃金四百五拾円拾壹錢

此地租金拾壹円貳拾五錢三厘

三等田壹町四反壹畝拾壹步

此收穫米拾九石七斗九升壹合貳勺

此地佃金八百貳拾九円三拾五錢

此地租金貳拾円七拾三錢四厘

四等田貳町五反五畝二十四步

此收穫米三拾石六斗九升六合

此地佃金千貳百八拾六円三拾貳錢

此地租金三拾貳円拾五錢八厘

五等田七町四反五畝五步

此收穫米七拾四石五斗壹升六合六勺

此地佃金三千百貳拾貳円六拾貳錢

此地租金七拾八円六錢六厘

六等田拾町七反壹畝二十貳步<sup>壹反步二付 米八斗</sup>

此收穫米八拾五石七斗三升八合六勺<sup>金三十三兩五十二錢四厘</sup>

此地佃金三千五百九拾貳圓八拾八錢

此地租金八拾九圓八拾貳錢貳厘

等外一等田拾町貳反八畝二十步<sup>壹反步二付 米六斗壹升八合</sup>

此收穫米六拾三石六斗三升四合壹勺<sup>二十五兩</sup>

此地佃金貳千六百六拾六圓五拾九錢

此地租金六拾六圓六拾六錢五厘

合計反別三拾三町八反三畝拾三歩

此收穫米貳百九拾八石三斗五升九合七勺

此地佃金壹萬貳千五百貳圓七拾六錢

此地租金三百拾貳圓五拾六錢九厘

但平均一反歩二付

米八斗八升一合八勺二才六毛

但米佃金四圓九拾三錢

利子六朱

一等畑四反拾七歩<sup>壹反歩二付 麥壹石四斗</sup>

此收穫大麥五石六斗七升九合貳勺

此地佃金百拾四圓八拾九錢<sup>金二十八兩三十二錢二厘</sup>

此地租金貳圓八拾七錢貳厘

貳等畑壹町七反四畝拾歩<sup>壹反歩二付 麥壹石貳斗</sup>

此收穫大麥貳拾石九斗二升金四圓二十七錢六厘

此地佃金四百貳拾三圓貳拾壹錢

此地租金拾圓五拾八錢

三等畑四町三反八畝拾七歩<sup>壹反歩二付 麥壹石</sup>

此收穫金大麥四拾參石八斗五升六合六勺<sup>金一十四兩三十錢</sup>

此地佃金八百八拾七圓貳拾貳錢

此地租金貳拾貳圓拾八錢壹厘

四等畑拾七町九反壹畝六歩<sup>壹反歩二付 麥八斗</sup>

此收穫大麥百四拾三石貳斗九升六合<sup>金拾六兩拾八錢四厘</sup>

此地佃金貳千八百九拾八圓八拾八錢

此地租金七拾貳圓四拾七錢貳厘

五等畑百町九反七畝二十五歩<sup>壹反二付 大麥六斗</sup>

此收穫大麥六百五石八斗七升<sup>金拾貳圓拾參錢八厘</sup>

此地佃金壹萬貳千貳百五拾六圓七拾五錢

此地租金三百六圓四拾壹錢九厘

等外一等畑五拾三町六反五畝拾八歩<sup>壹反歩二付 麥三斗壹升二合四勺五才〇一</sup>

此收穫大麥百六拾七石六斗四升八合八勺

此地佃金三千百九拾壹圓五拾四錢<sup>金六兩三拾貳錢〇九毛</sup>

此地租金八拾四圓七拾八錢九厘

合反別百七拾九町八畝三歩

此收穫大麥九百八拾七石貳斗七升六勺

此地佃金壹萬九千九百七拾貳圓四拾八錢

此地租金四百九拾九圓三拾壹錢貳厘

但平均壹反步二付

大麦五斗五升一合二勺九才外八三五

但大麦価金貳円三拾八錢

利子六朱

一等宅地八反八畝拾貳步<sub>壹反步二付</sub>  
二十四四三拾錢

此地価金貳百拾四円八拾壹錢

此地租金 五円三拾七錢

二等宅地壹町七反四畝二十步<sub>壹反步二付</sub>  
二十四四十錢

此地価金三百五拾六円三拾貳錢

此地租金八円九拾錢八厘

三等宅地四町貳反壹畝二十九步<sub>壹反步二付</sub>  
拾六円六十錢

此地価金七百円四拾七錢

此地租金拾七円五拾壹錢貳厘

四等宅地三町八反四畝四步<sub>壹反步二付</sub>  
金拾貳円七拾錢

此地価金四百八拾七円八拾五錢

此地租金拾貳円拾九錢六厘

五等宅地五町六反壹畝拾三步<sub>壹反步二付</sub>  
金九円

此地価金五百五円貳拾九錢

此地租金拾貳円六拾三錢貳厘

六等宅地四町四反貳畝二十壹步<sub>壹反步二付</sub>  
金五円八錢五厘八毛

此地価金貳百二十五円拾五錢

此地租金五円六拾貳錢九厘

計反別貳拾町七反三畝九步

此地価金貳千四百八拾九円八拾九錢

此地租金六拾貳円九拾四錢七厘

但平均壹反步二付

金拾貳円九厘三毛〇八

壹等切換畑五拾三町八反九畝拾步<sub>壹反步二付</sub>  
麥貳斗一升六合九勺二才一四

此收穫大麦百二十貳石貳斗九升五合五勺

此地価金貳千四百七拾四円四錢<sub>金四円五拾九錢〇六毛</sub>

此地租金六拾壹円八拾五錢一厘

二等切換畑百貳拾四町壹畝拾九步<sub>壹反步二付</sub>  
麥壹斗五升  
金三円〇三錢四厘五毛

此地価金三千七百六拾三円二十八錢

此地租金九拾四円八錢貳厘

合計反別百七拾七町九反二十九步

此收穫大麦三百八石三斗貳升

此地価金六千貳百三拾七円三十壹錢<sub>外壹錢已</sub>

此地租金百五拾五円九拾三錢貳厘<sub>外壹錢已</sub>

但平均壹反步二付

大麦壹斗七升三合三勺

壹等林貳反六畝拾貳步<sub>壹町步二付</sub>  
金拾壹円五十錢

此地価金三円四錢

此地租金七錢六厘

貳等林九畝步<sub>壹町步二付</sub>  
拾四円二十錢

此地佃金九拾貳錢

此地租金貳錢三厘

合反別三反五畝拾貳步

此地佃金三円九拾六錢

此地租金九錢九厘

壹等山林四町八畝拾五步 壹町二付  
九円六拾四錢六厘

此地佃金三拾九円四拾錢

此地租金九拾八錢五厘

貳等山林九町六反拾六步 壹町二付  
八円四拾錢

此地佃金八拾円六拾八錢

此地租金貳円壹錢七厘

三等山林五拾貳町七反四畝拾步 壹町二付  
七円拾五錢

此地佃金三百七拾七円拾壹錢

此地租金九円四拾貳錢八厘

合反別六拾六町四反三畝拾壹步

此地佃金四百九拾七円拾九錢

此地租金拾貳円四拾三錢

壹等藪五反六畝貳拾步 壹町二付  
八円拾五錢

此地佃金四円六拾貳錢

此地租金拾壹錢六厘

貳等藪貳町五反四畝二十六步 壹町二付  
七円拾四錢

此地佃金拾八円貳拾錢

此地租金四拾五錢五厘

三等藪三拾町三反四畝九步 壹町二付  
六円拾五錢

此地佃金百八拾六円六拾壹錢

此地租金四円六拾六錢五厘

合反別三拾三町四反五畝二十五步

此地佃金貳百九円四拾三錢

此地租金五円二十三錢六厘

壹等秣場壹町八反壹畝步 壹町二付  
貳円二十三錢

此地佃金四円四錢

此地租金拾錢壹厘

貳等秣場七拾五町五反九畝壹步 壹町二付  
壹円九十四錢

此地佃金百四拾六円六拾錢

此地租金三円六拾六錢六厘

合反別七拾七町四反壹步

此地佃金百五拾円六拾九錢

此地租金三円七拾六錢七厘

壹等山反別 三反步 壹町二付  
壹円四十二錢

此地佃金四拾三錢

此地租金壹錢壹厘

貳等山反別 五反四畝步 壹町二付  
壹円十二錢

此地佃金六拾壹錢

此地租金 壹錢五厘

合反別 八反四畝步

此地佃金壹円四錢

此地租金貳錢六厘

惣計反別七百九拾壹町九畝二十步

内訳

民有地反別六百拾町貳反七畝貳步

此地佃金四萬貳千百九円七拾四錢

此地租金千五拾三円貳拾四錢貳厘

内訳

反別四百拾壹町五反五畝二十四步

此地佃金四萬千貳百貳円四拾三錢

此地租金千三拾円四拾六錢九厘

内反別三拾三町八反三畝拾三步

此地佃金壹萬貳千五百貳円七拾六錢

此地租金三百拾貳円六拾三錢四厘

畑反別百七拾九町八畝三步

此地佃金壹萬九千九百七拾貳円四拾七錢

此地租金四百九拾九円四拾三錢六厘

宅地反別貳拾町七反三畝九步

此地佃金貳千四百八拾九円八拾九錢

此地租金六拾貳円貳拾七錢貳厘

切換畑反別百七拾七町九反二十九步

此地佃金六千貳百三拾七円三拾壹錢

此地租金百五拾六円拾貳錢七厘

温泉敷地反別貳畝六步

此地佃金四拾五円

此地租金壹円拾貳錢五厘

反別百七拾八町四反八畝拾九步

此地佃金八百六拾貳円三拾壹錢

此地租金貳拾壹円六拾四錢八厘

内林反別三反五畝拾貳步

此地佃金三円九拾六錢

此地租金九錢九厘

山林反別六拾六町四反三畝拾壹步

此地佃金四百九拾七円拾九錢

此地租金拾貳円四拾七錢三厘

藪反別三拾三町四反五畝二十五步

此地佃金貳百九円四拾三錢

此地租金五円貳拾六錢拾六錢三厘

秣場反別七拾七町四反壹步

此地佃金百五拾円六拾九錢

此地租金三円七拾八錢六厘

山反別八反四畝步

此地佃金壹円四錢

此地租金貳錢七厘

荒反別拾九町七反八歩

内

田反別三町壹反九畝二十九歩

明治十二年ヨリ  
全十八年迄 七ヶ年季

畑反別拾六町五反九歩

明治十二年ヨリ  
全十六年迄 五ヶ年季

反別五反五歩

内

墳墓地反別四反六畝五歩

溜池反別 四畝歩

官有地反別百八拾町八反貳畝拾八歩

内訳

社地反別四反貳畝二十壹歩

反別百八拾三町壹反八畝五歩

内

山林反別三町壹反八畝五歩

藪反別 壹町七反貳畝二十歩

原野反別百七拾五町貳反八畝拾七歩

柴生地反別 壹反壹畝拾四歩

草生地反別 九畝壹歩

字九拾四筆

筆数四千四百七拾五筆

右者今般地租御改正私共立会一筆限地価調査候処前記之通相違無御座候萬一不都合之調方仕後日相顕於テ者如何様之御处分被仰付候共不苦候依之戸長惣代人連署仕帳面差上申候也

大隅国桑原郡嘉例川邨(むら)

惣代 福留太左工門印

全 今村 甚太郎印

全 今 吉次郎印

惣代

全 堂下 助市印

全 福永嘉石工門印

全 上福元八次郎印

福岡県筑前国鞍手郡小牧邨

書載人

石 橋 儀 輔印

戸長

園田彦左工門

②① 農民の経済不調と小作制度

江戸時代末期になると土地の集中が、郷土や商人の手に移行し明治初期になると相当な土地がこれ等の階級のもとに集

ったものと考えられる。

封建時代の属地的社会制度の奴隷的存在でしかなかった農民は圧倒的屈従から解放され自由になったが、経済的に国家からの保護されるべき何者もなかった。僅かな土地を所有し自作して生産品を商品化して新時代の厳しい経済との対決は無力に等しいものであったと言える。貢租さえ済めば、あとは気楽に次の貢租の生産と食ぶちのために農耕に終始すれば事たりたのであるが、前にも触れた通り御一新の新風は吹きまくっても一定の税金を納入する義務をまぬがれることは出来なかった。その上天災地変の災厄（凶作、暴風雨、旱魃等）や社会的変動（農産物価の変動、税金の増加）があっても納税の義務は果さねばならなかった。

一方価格の変動はあっても貢租は現物納めであったものが金納制となった、め生産米を金銭に替えねばならないことが余計に加った。この様な状況に対処するためには借財、農地の売却等であった。この借金を返済する手段は殆んど無く二五%から三〇%の税金の他に債権者に高利を支払ひつ、農耕に定着し貨幣経済の嵐の中にふきまくられて行かねばならなかった。

税金と金利の貨幣を得るためには収穫期の直後の米価の安い時期に米を売り高値を呼ぶお盆から先きの瑞境期まで持ち越すことは出来なかった。富農は高値の時期迄持ち越し貧富の差は増大して来た。自作農は農業経営の借財を返済する事に努力はしたが、経営規模の上から銀行からの低利融資は不可能なことで村内の富裕者や米商人から高利の金を借入する以外にはなかった。

江戸時代から資本蓄積を計って来た富農階級は高利の金融によって抵当流れや売りに出る土地を手に入れ、これを小作地とし利潤を得る方向へ自己経済の焦点をもつて行くことによって土地が投資の対象と化して来た。農民の農地を小作地化することによって地主は農村に於ける支配的階級の基礎を必然的に形成して来た。

この頃の清水郷の経済知識を紹介して参考としたい。郷士で戊辰戦の隊長格であった浜田某は堅実なる経済基本として取上げたのが土地、山林、現金、債権であった。これを四本立て経済と称して確実にこれを推進した。「土地は地球の亡びざる限り永遠のもので放たぬ限り年々生産がなされ利潤がある。山林は木を植栽すれば在不在を問はず、昼夜を分たず伸び太る。現金は儲けの資であり、何時でも役立ち子を産む（利息が増える）債権は箆笥の中で増えて人に知られず萬一の場合は、その日に現金に代る。この四本建ては経済の四要素である。これを崩さねば富裕間違いない」と人に勧めた。彼れは明治戊辰の出役によって国債を買った。人々はこれを売却して金に替えたが彼れは銀行に担保として差入れ借金して明治の変動期に土地を買った。そして昭和の農地改革まで地主としての財を蓄積して子孫に遺した。勿論土地を担保として農民に金を貸し土地を手に入れたことは言をまたないところで

ある。

これは一例であるがこのようにして郷士や富農等は土地を入手し私有財産をふくらませて小作地の利潤を追及して行った。当時の話で「金利年一割にあたれば土地を買え」と話して居たそうである。

#### ○西南の役インフレとデフレ政策

地租改正が軌道に乗って着々進行して居たところ、明治十年丁丑（一八七七）の西南役が起りインフレの状態となった。米一升一〇銭となり俚俗に「米が十銭するやつこらさのさ」と言う時代になったが政府は、これを抑制するデフレ政策をとったので米価は変動して低落の線を辿り農家の借財はかさみ土地の集中化は益々激しくなった。

明治十年丁丑戦（十年戦争）で鹿児島県の郷士階級は続々と西郷軍に加わり混乱した、めか他府県よりも地租改正、これにともなう地券下渡し等も遅延したものと考えられる。次の表は姫城松田氏の祖父が農地取得の登記申請をした件数であるが、明治十二年の土地永代売渡し証から始まり件数は頭初はすくないが、明治十八年から二十四年迄の申請件数が多い。一件の申請の内容は数筆に及んで居る。地積筆数等は現存の当主があるので遠慮申しあげた。明治十八年から二十四年迄の件数が多い。一郷士のこの頃の農地の取得申請件数が毎年連続して申請され、その内容の筆数、地積はこの数倍に及んで居る。

#### 登記移転申請数（松田家取得の分）

年次	申請数
明治12年	2
17	2
18	9
19	5
20	5
21	6
22	3
23	6
24	8
25	1
26	2
27	7
28	0
29	0
30	0
31	2
32	5
33	0
34	6
35	6
36	0
37	1
大正元年	1
2	4
3	1
4	4
7	4
8	0
9	4

以上の表から見ても農地の売買移動が郷士や富農層に集中していったことが想像出来る。

明治二十七年は七件の申請で数十筆の移動が行われて居る。この年は日清戦争の年である。

明治二十七年、八年の日清戦争を中心にわが国の資本主義は発達し三七、八年の日露戦争に勝利を得て愈々確立された。資本主義の発達に従って農村は商品経済の渦中にまきこまれ貨幣経済の支配に屈服せねばならぬ状況に迫られて行くのである。農家の現金支出は多くなる反面、農産品は買いた、かれ副業は多く手工業の域を脱せぬ状況にあったので、組織化される産業資本によって

壊滅して行くことゝなった。

百姓は綿、藍、苧麻をつくり、桑を植えて養蚕を行ひ、櫛、コオゾの繊維資源を菜種子から食油、櫛から蠟を得る資材生産等の副業的収入は運輸交通の便の発達に従つて綿、藍は米綿、印度藍に圧迫され食油礦油等も外国からの輸入によつて国内の資源的生産品は著しく減退することになった。

農業生産の必需品目の肥料も堆肥、厩肥、人糞尿等であつたものが支那大陸等からの油粕、大豆粕、骨粉、外国からの硝石燐礬石等の輸入によつて生産費は昂騰して米価は生産費を割る状況になった。この様な諸要素の累積なりが農民の経済を圧迫、不調にし農業の基盤である農地を金に変えねばならないことゝした。自作から小作への転落が増加することになった。

次に掲げる鹿児島県の明治四〇年から以降の自、小作面積の表であるが明治四二年から小作面積は増加の傾向を辿つて居ることがわかる。

大正時代に於ても大正三年の不況時代から小作地面積は上昇線を辿り七、八年の第一次欧州戦争の影響による好景気時代に入つても小作地は増加して居る。これは地主は米価の値上りによつて現物の小作米が高値で取引きされて上々の景氣を迎えたが、小作人は売る米がないので高値の恩恵はなかった。高率の小作料と自家飯米を差引くと売る米はあつても僅少なものであつた。

# ○鹿児島県の明治四〇年～四四年自作、小作面積

(鹿児島県統計調査より)

姫城村の新家に残つて居る「地所売渡証」による土

年次	總数	自作	小作
明治四〇年	二二八、八三五・七町	一四四、九四六・四町	七三、八八九・三町
四一	二二九、五〇〇・九	一四六、一七五・八	七三、三二五・一
四二	二二八、二〇四・五	一四二、七七九・二	七五、四二五・三
四三	二二一、一七三・九	一四四、七六三・一	七六、四一〇・八
四四	二二二、三八四・四	一四三、四八五・九	七八、八九八・五

年次	總数	自作	小作
大正元年	二二二、二四・一町	一四四、三七四・三町	七七、八三九・八町
二	二一七、七五九・〇	一三九、八三三・六	七七、九二六・三
三	二二〇、三九三・〇	一四〇、一三三・一	八〇、三五九・九
四	二二一、六一五・四	一三八、四八八・六	八三、一二六・八
五	二二四、〇六四・二	一三七、三〇八・三	八六、七五五・九
六	二二七、八一四・六	一四一、三八六・八	八六、四二七・八
七	二二二、二四五・七	一四三、四八五・〇	八八、七六〇・二
八	二二五、八九五・〇	一三六、八〇八・六	八九、〇八六・七
九	二二六、五七五・一	一三七、八七八・八	八八、六九六・三
一〇			

地の移動を見ると次の表の通りであるが明治二十二年から二十五年の四年間に田畑七反から一町歩を取得し、明治三十一年から四

年次	買取り 田畑面積
明治二十二年～二十五年	七反
明治三十一年～四五年	一町五反
山林・宅地	一反七畝

十五年迄の一〇年間に一町五反を取得、二十三年間に二町二反を越す田畑を買収取得して居る。(登記申請をしないものがあるが二町近くある)一農家の買収取得面積に於て、これだけの土地の移動があったことから推量すると土地の移動は頻繁で富農と貧農との差は拡大して行ったことが推量出来る。これ等の取得の土地は全部小作地に貸付られ反当一石八斗から二石の上納となつて居る。

# ○明治末期の上納米

明治三十九年新原惣右衛門の記録によると上納米一升蒔(五〇歩)に米三斗、元川田(川の跡を田にした)一升蒔一斗三升三合、(この川田と言うのは水害地で川成から復旧した土地を指して居る、下々田の等級と思われる。)普通の水田で反当り壹石八斗、下々田で反当八斗位が上納米となつて居る。当時の米価は「一升の代十二銭宛」と記るしてある。

明治三十六年 玄米 一升 一一銭二厘

〃三十七年 玄米 一升 一一銭五厘

〃三十八年 玄米 一升 一二銭

明治四十年 米 一升 一五銭 と記るし、一五銭は少し高値と記るしてある。

尚現物上納の場合はそのまゝとし金納者の場合は当時の米価より一銭一二銭米価を高く見積つて取つて居る例がある。これは米価変動に対応する策であつたと推測される。

## (イ) 増税(日露戦争による増税?)

明治三十九年より増税となり約三〇%の増徴となつて居る。一例を引用すると、

字中水流百八十八番

一田反別 壹反貳畝拾歩

此地価金 七拾円三拾六銭

此地租金 壹円七拾六銭

増徴 五拾六銭

この書類から見ると七〇円三六銭の〇・二五%が一円七五銭九厘（四捨五入一七六銭）である。増徴分五六銭は一円七六銭の〇・三一二%となつて居ることがわかる。これは日露戦争の終戦処理等による政府の増税と推量される。

この他明治三十八年には政府は債券を発行して居る。新原惣右衛門の覚記帳の中に貸附金合計壹千円也内五拾円但軍事庫債券也と記してある。日露戦争の遂行には増税と債券を発行して戦時予算の編成をしたことが窺われる。

#### (ロ) 郷土、富農の貸付金と金利

郷土や富農階級が農民にどの位の金利で貸付けていたかを見ると新原惣右衛門の金貸付覚帳の中から一二七件を年次別にひろつて見ると月最低一割五分から二割の金利となつて居る。対象は零細農から自作農へおよび範圍は西国分、日当山、襲山、牧園の他町村迄広範圍に涉り、その地域に田、畑、山林等を購入し上納米を取つて居ることである。

新原惣右衛門覚帳による明治二十九年～四〇年迄の利率。(月利)

年 次	月 利 率
明治29年	0.13～0.15
30	0.13～0.15
31	0.15～
32	0.15～0.14
33	0.15～0.14
34	0.15～
35	0.16～0.14
36	0.15～0.20
37	0.15～0.16
38	0.12～0.15
39	0.13～0.17
40	0.15～

上のような金利によつて農民は土地を郷土や富農へ売渡すことになつたのである。

#### (ハ) 欧州大戦と農村経済

大正三年（一九一四）欧州大戦がはじまり先進国の資本主義国は戦渦の中にあつて混乱している時日本は参戦はしたが戦禍は及ばず返つて経済界は一般的に好況を迎えたが鹿児島は桜島大爆発のため農村は恐慌を来す兆候さえあつた。

冬作は降灰のため全滅が伝えられ農民の自己取得となる裏作の被害は大きかったので全国的好況の兆に反して県下の農村は不況が伝えられたが思つたより被害は僅少であつた。被害は鹿児島市を始め周辺で止つた。

続いて大正四年（一九一五）六月、九月に台風の被害があり農産物の被害は三割程度と伝えられたが経済界は好況が伝えられた。

この大戦をきっかけとして鉱工業は発展して安い工業製品は大量に農村に流入して来た。衣服、食糧品、農機具、肥料等の購入額も増大して農村は商品経済の渦中に放り出された恰好になった。農村の消費経済は増加し自給自足の経済は崩壊して行つた。自給肥料は金肥に変わり手織りの紺の農作業衣はコクラ地になり、山草履は地下足袋に変わり生活必需品等も枚挙に遑のない程の商品が流入して来た。このため農村の生産品収益では対応出来ない経済動向となつた。農村に於ても都市経済の好況不況の影響は従来よりも早急

に反映することとなった。

大正七年（一九一八）に欧州大戦は終りとなったが、好景気を齎して米穀を始め農産物価格も値上りを来し米一俵（六〇kg）の卸売り（庭先き）で二十一円十二銭、石当り四二円から五五円位迄にはね上り農村にも百円札が回って来る好景気を迎えた。一方仲買いや卸問屋、小売り店も売り惜しみの状態が出現して、ある米が出回らず連日高値が伝えられ遂に全国的に都市には米騒動が起った。

町内に於ても浜之市の米穀仲買人の松山庄次郎、芝常次郎、塚田吉次郎等が当時稀れに見る自転車で駆け回り浜之市港から日々海路鹿兒島港へ米俵が積出され好況を呈し当時地主であった山内敬二、森常二郎等が百町歩以上と言われる田地を所有したのも、この頃である。地主階級や富農、商売人は景気好調の波に乗って土蔵が建つ時代となったが一方農民は消費経済に圧倒されて苦境に立つこととなった。

海運業も好調となり鹿兒島港と浜之市港との往復によって郡内東北部、宮崎県の小林、加久藤辺りの商品も浜之市港を中心として移出入が行われ森船、芝船の通称で繁栄した。

## （二）地主と小作人の収入対比

昭和元年より三年頃の隼人町の地主の反当収入（小作料）による収入状況は次の表によって知ることが出来る。

二毛田で反当二石の小作料で地租その他の掛目を差引いて四八円の益金となり湿田では上納一石二斗で益金二九円の利益となつて居る。畑は大体一石で作物によつては小作人の場合が有利であったが地主の取得益金は反当二八円位であった。

小作人は二毛田で裏作の収益があり反当三四円四七銭の益となつて居る。湿田に於ては半分の一七円二〇銭となり稍不利を物語つて居る。

畑に於ては煙草作の場合、粟麦等の収益を入れて一六円の収益となり、大根作の場合、大豆麦等を加算して差引き収益五四円三〇銭となり寧ろ畑作の場合が小作人の収益は良かったことを示して居る。

但し一般的にはこのような収益があつたことは考えられない。煙草、大根の特用作物が、この収益をもたらしたことがわかる。古老の誌によると大根葉（漬物の残滓物）の堆肥の肥効のあつたことを力説されたことがある。

## (西国分村)

地目区分	反当収入			反当支出		差引益金	反當時価	反当公定
	小作料	単価	金額	附加租税	用水費その他			
畑 大麦・大豆根	一・〇〇〇石	三〇円	三〇・〇〇円	一・六三円	〇・三〇円	一・九三円	二八・〇七円	
畑 粟・麦・草	一・〇〇〇石	三〇円	三〇・〇〇円	一・六三円	〇・三〇円	一・九三円	二八・〇七円	
田 一・湿毛作田	一・二〇〇石	三〇円	三六・〇〇円	四・六八円	一・八〇円	六・四八円	二九・五二円	
田 二・毛田	二・〇〇〇石	三〇円	六〇・〇〇円	九・二〇円	二・五〇円	一一・七〇円	四八・三〇円	

(昭和元年～三年)

地目	区分	作物	収入				支出				差引損益		
			収 量	単 価	価 格	その他収入	計	肥料・種子	労務賃金	小 作 料		その他	計
田	二毛田	青刈米・麦 青刈大豆	二・八八〇石	三〇・〇〇円	八六・四〇円	三五・五〇円 三三・八〇円	一二五・七〇円	二五・四三円	―	六〇・〇〇円 二二・〇〇円	五・八〇円	九一・二三円	三四・四七円
田	湿田	稲作	二・〇五〇石	三〇・〇〇円	六一・五〇円	五・五〇円	六五・〇〇円	九・〇〇円	―	三六・〇〇円	二・八〇円	四七・八〇円	一七・二〇円
畑	普通	煙草 麦・粟 草	二五四・四〇円	二二一・〇〇円 二六・九〇円	―	―	二五四・四〇円	一〇七・五〇円	―	三〇・〇〇円	―	一三七・五〇円	一一六・九〇円
畑	―	大豆 根豆	一二三・二〇円	二六・〇〇円 二〇・八〇円	―	―	一二三・二〇円	四七・九〇円	―	三〇・〇〇円	―	七七・九〇円	五四・三〇円

○この支出面に於て小作人の労働賃金は算入していないことが記るされている。

(六) 農業恐慌来る

歐洲大戰後農村經濟も變動を繰返しながら昭和五・六年頃になると不況となり農業恐慌の時代となった。原因としては世界的大豊作によるものとされ昭和五年に農産物の価格が暴落し米一俵（六〇kg）が地相場で五円六〇銭位から七円位迄に下落し農村は地主小作人を問わず苦境に立つことになった。

農家の負債は増加し自力更生が叫ばれ農村救済の一策として国は土木匡救事業を起し道路建設工事を勧めて就労賃金を農村にばら

まくことよつて農村救済策とした。町内に於ても日当山、重久間の県道工事も救国事業で県が施行したものである。松永耕地整理組合「昭和六年設立認可」西園助市が組合長となつて施工した中に「時局匡救耕地関係農業資金供給ニ関スル件」として県耕地加治木出張所長田島亭助名で組合借入の件に關して通達して居る。これ等も匡救事業で一部施工したことである。

当時工事関係の単価、

○建設積割石一個八錢ゝ十二錢、人夫賃男六〇錢、女四五錢ゝ五〇錢、この賃金は上夫の標準で一般就労者は二五錢位からであつた。

# ○土地所有の変遷 経営規模別農家面積

年次	三反未満	三反五反	五反一町	一町一五町	一五町二町	二町三町	三町五町	その他	計
昭和二六	二〇九・〇六	二六〇・二五	四四六・九一	一一六・三二	一一・七九	一〇・五一			一、〇五五・七三
昭和三六	二八七・一〇	三七〇・一一	(五反七反) 二三八九六・三二	(七反一町) 二二七四六・〇四	(二五・五町) 二二八九六・一七	(二五・五町) 三八一七・〇五	(二五・五町) 一八〇三・〇〇	一七六四・二〇	一六・二八 九四三町七反三畝二歩

# ○関係町村の農地開放による自・小作地の變遷（県統計）

区分	昭和二〇年十一月三〇日現在			昭和二五年八月一日現在						
	總數	自作地	小作地	買取済面積	売渡済面積	總數	自作地	小作地	被買取地主	売渡を受けた戸數
町村										
隼人	六八〇・四	三三四・八	三四五・六	二三八・五	一七二・三	六七七・五	五七三・四	一〇四・一	五一九	一、六六三
日当山	六三三・八	四一・〇	二二・八	一七一・一	一七二・三	七六六・〇	七二五・二	四〇・八	四三一	八二一
霧島	七二二・二	三四九・九	三七二・三	三五〇・五	三四六・九	七二〇・四	六九〇・六	二九・八	二九一	五三九
清水	七二五・二	三九三・六	三三三・一	二二二・〇	二二二・二	七二五・二	六二六・七	九八・五	五六九	一、二三五
東幾山	三四九・一	一七六・二	一七二・九	一四八・七	一四八・七	三六三・九	三三三・一	四〇・八	一七〇	三九一

# ○隼人町自・小作別農家戸數（県統計）

年次	自作	自作小	自作小	小作	その他	計	農用地面積
昭和二二	一、六五六戸	五九一	一八〇	一〇六	二九	二、五六二	一〇五五・七四
昭和三六	三、二五八	六〇九	一四六	九八	一三	四、一二四	

○ 隼人町自作別面積（県統計）

年次	自作	自作小	小自作	小作	その他	計
昭和二五	七二六・九二	二四一・二三	五九・四一	一九・九三	八・二五	一、〇五五・七四
〃 二六	六六六・九六	二四四・九七	六三・二七	一八・二二	一、五六	九四四・九八

○ 日当山村自作別面積（県統計）

年次	自作	自作小	小自作	小作	その他	計
昭和二五	四九三・二八	七三・三六	八・四五	六・七九	—	五八一・八八
〃 二六	六二六・六五	一一八・五五	一八・二七	八・五五	〇・一三	七八二・一五

○ 自作別農家戸数

合併前の町村	年次	自作	自作小	小自作	小作	その他	計	面積計
日当山	昭和二五	五六二戸	一四四	二七	三六	—	七六九	五八一・八八
隼人	昭和二五	一、六五六	五九一	一八〇	一〇六	二九	二、五六二	一〇五五・七四
隼人	昭和二六	三、二五八	六〇九	一四六	九八	一三	四、一二四	

○ 自作別面積

合併前の町村	年次	自作	自作小	小自作	小作	その他	計
日当山	昭和二五	七二六・九二町	二四一・二三	五九・四一	一九・九三	八・二五	一、〇五五・七四
隼人	昭和二五	四九三・二八	七三・三六	八・四五	六・七九	—	五八一・八八

○ 昭和二六年二月一日農用地面積と耕地面積

区分	農用地						耕地面積			
	總數	自作	自作兼小作	小作兼自作	その他	その他	總數	田	畑	耕一戸當り地
日当山	七八二・一五	六二六・六五	一一八・五五	一八・二七	八・五五	〇・一三	七〇一・七二	二四二・八七	四五八・八五	五九・〇
隼人	九四四・九八	六六六・九六	二四四・九七	六三・二七	一八・二二	一・五六	八九八・五八	五八二・一五	三一六・四三	三四・八

○いね收穫面積広狭別農家 経営規模からみた農家戸数

町村	年次	三反未満	三・五反	五反・一町	一・一・五町	一・五・二町	二・三町	三・五町	計
日当山	昭和二五	二〇四	一六四	二〇〇	七七	八一	四二	二二	七六九戸
集人町	昭和二五	一、一二三	六六五	六六二	九九	八	五		二、六六二戸
集人町	昭和二六	九三二	一九九	(五・七反) 三九 (七・一町) 一八	(一・一・五町) 三	三			四、〇三六戸
集人町	昭和二六	二、七一四	一、〇〇七	二九八	七	一			

21 小作制度と小作料

(イ) 日支事変・太平洋戦争中の変遷

○小作制度の改正

大正九年（一九二〇）頃から小作農を保護する小作法の立法化は問題となったが議会を通過せず昭和十三年（一九三八）に至って漸く農地調整法が制定された。

この法律は「小作権を物権化して第三者に対抗する権利を認め地主、小作人に信義に反する行為のないかぎり小作契約の解除をゆるさず、また小作料を滞納しても宥恕すべき事情があれば契約を解除する事は出来ないこととし耕作権を保護したものである。」当時日支事変の拡大するに従って農村の安定が強く要求されたが、自作農創設は、その性質上急激に拡大する事は出来なかつたので小作立法が強められて来た。

昭和十五年（一九四〇）に小作料統制令が出され、同年九月一八日現在で小作料を据置き不当に高い小作料は知事の命令で引下げることが出来ることにした。

(ロ) 供出制度の施行と小作料率の低下

昭和十五年（一九四〇）から米の供出制度が行われることになったが、在村地主の自家保有米をのこして小作米はすべて供出することになった。供出は小作人が地主に納める上納米を供出して、供出代金を地主に支払うことになったので事実上小作料は金納の形となった。

昭和十六年（一九四一）度産米からは生産者には供出総量に対して奨励金が交付されることになり増額されたが小作料の計算の基

準となる地主米価は据置となったので小作料率は昭和十六年約四五%、一七年約三八%、十八年約九%と低下した。

#### イ 供出制度

昭和十五年（一九四〇年）食糧管理法により供出制度がとられ政府が必要量の食糧を買い上げることになった。供出量の計算は収穫見込量から自家消費量、種子用等一定の基準による自家保有量を差引き残り全部を供出する内容であった。

戦争が長期化するに従って食糧事情が次第に窮屈になって来た、め昭和十六年（一九四一）中国、九州地方の干ばつを契機として食糧管理は強化された。

十六年度には計算方式は据置き収穫の確定前に仮割当をおこなって種粃を残し、全部の米を政府が買い上げ保有米の自発的供出も勧誘すると言ふことになった。

昭和十七年（一九四二）麦が管理の対象となった。

昭和十八年（一九四三）更に供出制度が強化され割当は部落単位に割当を行って部落を供出責任者とし一部保有農家にも割当ると言ふ方法が取られた。割当の主体も農業会長から町村長に変更された。

昭和十九年（一九四四）には戦時供出制度が強化され四月植付前に割当をおこない、奨励金や報償金を交付する方式をとった。また自家保有米を減額して割当を増し割当量を超過する供出を強要したのである。

この頃になると農家、非農家が区別され増産供出が第一とされ多くの弊害を残すことになった。部落に於ては割当量を水増しして個々の農家に割当て部落役員は割当以上の供出が出ると自己の割当量の片替りをさせ保有米を残して闇米として私腹を肥すものも多かった。

#### （二）小作慣行

明治大正昭和初期の小作制度は町内に於ては殆んど慣行小作で大正十二年以降小作争議が起つた以後は小作契約書による文書契約が行われたが、それ以前は殆んど口頭契約によるものであった。

一、小作の種類 殆んど賃貸借である。永小作はなかった。

二、小作の契約 口頭契約で小作争議以後文書契約による小作がある。

○小作証書 明治、大正の初期迄は口頭契約で小作証書による契約は無かったが小作争議以来農民組合側、地主とも小作契約証書を

作成して契約した。農民組合に加入しない小作人とは口頭契約であった。大地主や他町村の地主は大概小作証書を取った。

(六) 契約の継続と解除

小作証書で期間が定めたと否とを問わず実際には無期限なものが多く上納米の滞りさえなければ親から子や孫まで永続的に小作関係は続いた。

地主、小作人何れかが小作契約を解除する申出によって解除した。契約解除の原因は耕作上の問題、水利の便、交通の不便、小作人の労力不足、転業等種々あったが、一方的通告の場合が多かった。

地主は土地売買に当って一応小作関係を解除して第三者へ売却する場合が多かった。自作地とする者以外多くの地主が小作人の手柄等から判断して元の小作人に継続せしむる場合が多かった。

○契約解除の通告の時期。

a 田の場合、地主からする場合是一月二十五日（上納米納期）まで、あったり不時に通知する場合も多かった。小作争議以後は六ヶ月前とされた。

b 畑の場合、麦蒔迄には通告し遅くとも麦の間に作付をしない前に通告した。小作人の方も同様であった。

c 小作関係の終了時期

水田、畑ともに麦作迄（裏作）は小作人の権利として決められ、それ以後実質的な解除となっていた。

水田は緑肥（青刈大豆、紫雲英）の播種を次の耕作者が行うので大体三月中旬から四月上旬頃迄が解除時期とされて居た。畑も麦間に大豆等の播種があるので四月頃迄とされていた。田畑ともに麦、菜種子の收穫期迄が一般的な時期であった。

新しい小作者は春作（水田稲作から、畑大豆、甘シヨ作付）からが一般的であった。

○小作料の種類

a 水田の小作料は全部物納で玄米一升蒔（五〇歩）を基準にし玄米枧目で決められた。

裏作には小作料は課せず、小作人のものとされていた。

b 畑の小作料も全部玄米で水田同様一升蒔（五〇歩）を基準にし玄米枧目で決められていた。町内に於ては煙草、大根等の金目になる作物の一作の借地の場合は金納小作料があった様で、この場合は普通の小作地よりも高率の地料を払った。

c 苗代の小作料 水利の関係で苗代だけ借地をする場合があるが、小作料は決っていない。苗代後は所有者か小作人が作付するが、多くの場合肥料を貸主に地力消耗を補う意味で地料代りに持参する場合が多い。

## (b) 小作料

小作料は大体藩政時代から上・中・下等の階級等級によつて区分され一升蒔を単位として定められ、水利交通等の他作物によつても差違が付けられていたようである。

煙草、大根作に適した土地は上納米（小作料）も比較的高率の場合が多い。明治、大正、昭和と小作料の枘目による小作料は差違は余り認められないが金銭換算すると変動がある事は当然である。

新原惣右衛門の覚帳から拾つて見ると次のようになって居る。田、畑の所在地（町村字）小字のなかでも中心部と山寄りや溝の上等は地料の差違がある。所謂土地条件による小作料の決定がなされて居る。地区別に見ると、

水田 明治四〇年～四三年

畑

姫城羽坂（一等田）反当二石～一・八石（明治四〇～四三）清水村一等地

松永麻苧迫 反当〇・一八石（明治四〇年）

砂走

一・六八石（明治四〇～四三）畑拓き水田

峯下

一・二石（明治四三年）

石踊

〇・七五石～一・四四石（明治四三）

森

〇・四八石（明治四〇年）

上新原

一・六八石（明治四三）水害地

姫城石踊

〇・七五（明治四三年）

松永豊後田

一・六八石（明治四三）松永小学校附近

宇都

〇・四八石（明治四五年）

松永園田

〇・九六石（明治四三）水利不便、当時天水田

宇都

〇・七八石（明治四五年）

姫城字宇都

一・二石（明治四〇年）半湿地

宇都

〇・七八石（大正元年）天水田

松永片平田

〇・七二石（明治四四年）

湿地、有水田

姫城金竹

〇・七八石（大正元年）天降川水害地

牧園戸迫

〇・一二石（大正二年）畑地

郷土史料による隼人町の小作料（反当）昭和二年頃、水田、新田二毛作 二石、湿地一毛作 一・二石、畑（煙草その他普通作）

一石、畑（大根・大豆・麦作）一石。

○旧隼人町（西国分村）の小作料から見た生産量の取得割合。

校區別に生産量から見た収支取得による小作料の割合は次の通りとなつて居る（郷土史料より）

宮内校区 地主六割 小作人四割 他校区も同様の結果を示して居る。

煙草作の場合の取得は小作人が多く地主取得の四倍で小作人が有利であつたことが示されて居る。町内を全般的に見ると水田に於ては特別の低位級地を除くの外は反当り小作料は、

上田 一・八石〜二石、中田 一・二石〜一・六石、下田 〇・八石〜一・二石

上畑 一石〜一・二石、中畑 〇・七石〜一・二石、下畑 〇・一五石〜〇・四石

であつた様である。この数字は正確なものではなく一部分の地主の覚帳から推量したものである。大体に於てさきにも述べた通り小作料（上納米）は一升蒔（五〇歩）を基準にきめられ、例へば四升八合蒔あるものは五升蒔として小作人に貸し五升三合五勺蒔とあるものは五升五合蒔として切り上げて小作料が枅目できめられて居ることである。

水害地や塩入り田や冷水かゝり等はそれぞれ地主と小作人の話合いによつて小作料が定められて居る。又普通田の場合に於ても脇並（わきなん）と言つて隣接の田畑の小作料を対比し自然条件等の可否等を勘案してきめられた。又米価や煙草作等の価格が良好なる場合は小作人によつて糶上りがあり小作料の値上り（賃貸料の値上り）を来す場合も多かつた。又田畑を売却する場合は売渡人は生産量を高く評価して土地価格をつりあげる傾向があつたので、自ら賃貸料（上納米）の値上りを来した原因ともなつた。

#### 小作料の納期

○納期は旧暦で十二月二十五日限りとするのが普通であつたが、新暦が採用されてから翌年一月二十五日迄とされた。田、畑、宅地の上納米はすべて右の期限であつた。

○納入場所と運賃 納入場所は地主の家迄で、運賃は小作人の負担であつた。上納米は正俵と端米（はごめ）があつて成（正）俵は検表で端米は地主が枅目ではかつて取つた。

#### （ト） 納入と奨励金

期日迄に完納した場合は奨励金として一俵に対する奨励金を出した。期限迄納入ないものは、この奨励金は支給しなかつた。成（正）俵の場合大正年間には一重俵と二重俵があり二重俵にすると俵代を地主が出した。

○検査料の支払 穀物検査には、県の証券によつて検査料を納めた。これは小作人が負担した。

○豊凶による小作料の減免 豊作の場合に於ても契約以上の小作米は取らなかつた。凶作の場合は小作人から二割とか三割とか台風等の被害割合によつて減免を交渉した。

○小作米の滞納 天災地変病氣等の災厄の場合は延納が認められたが大正後は滞納者は増加した。地主によつては直ちに返地させる者もあつたがこれは郷土地主であつた。多くは滞納小作料は時価に換算して借用証とするか貸付覚帳にのせて金利を附した。

(イ) 小作地の費用負担

a 耕地整理、道路改修、用水路の補修等の場合は地主が費用を負担し、分水溝（直接田に通ずる溝）の作業は小作人が出役した。

b 地主が小作地の改良を行った時は増額する場合もあつた。客土、天地返し、畦町だおし（数枚の田地を一枚田にする）等の場合話し合いによつて小作人に日当を支給した。あるいは小作料で操作する場合もあつた。

c 補修費用 水害等によつて畦畔が大きく落ちた場合（崩落ちる）杭、竹等の資材は地主が出し労力は小作人が負担した。小作人が事毎に地主に請求するといやがられ小作地として契約する地主がいなくなるので小作人は自己負担する場合が多かつた。このようなことは藩政時代の慣習が踏襲されて居た様である。

(ロ) 小作地の転貸と譲渡

○転貸（また貸し） 種々な理由で転貸する場合普通地主の承諾を求めた。地主の承諾を得なくても小作料さえ滞らねば地主は黙認する場合が多かつた。気のきいた小作人は転貸して上納米の鞘をかせいで居る者もあつた。普通また作人（転借人）は地主に上納米を直接納めるのが方式であつた。転借人が地料を納めない場合は地主は契約者に請求した。

○小作地売買の時 小作地を売買する場合は小作人には無断で売買してよかつた。新地主と小作人との小作契約は普通継続された。前地主から小作継続の依頼等売買条件の中に入れることも行われた。小作料は時期によつて新旧地主間で話し合いの結果で定められた。大概上納込みの価格とすることが普通であつた。

(ハ) 農地法による土地解約

農地法が出来てからは小作地の取上げは市町村農地委員会（農業委員会）に農地法二〇条による申請を行い知事の許可を必要とした。この場合民法による小作権の主張が出来ることゝなつており離作料を地主に請求するようになった。相方の話し合いによつて合意

解約の場合でも地主、小作人間で離作料の話し合がなされ合意解約の手続きを行うようになった。

この問題点は離作料要求に対する法的取きめがないことで紛争の原因となる場合もある。これらが原因となって土地の流動化を阻害する原因ともなり、小作地として出すよりも荒れ地として放任して居るものもすくなくない。近年人手不足で畑地等は山林転用が多く目立ち畑地等は山林へ転化されつゝある。

(ル) 農地の転用面積、地目別

昭和三八年から四〇年迄の三ヶ年間の農地の地目別転用（現況証明を含む）面積は急に増加の傾向を示し特に畑地の宅地、山林等の転用は増加し三ヶ年間に四一町歩の転用面積を示している。

田地に於ても宅地の転用が多く七町五反八畝を上回り、山林、雑種地の転用は合計一〇町六反六畝となつて居る。

近年住宅の不足により住宅公庫や町営住宅、個人住宅等の建築が増加し、これに伴う宅地の造成等が増加し農地の転用申請が急増することゝなつた。過疎対策として住宅団地の造成が行われる状況となり益々農地の他地目（宅地を主とする）への転用が行われることが推測される。

農業に於ても稼働力の不足を来し生産性の低い農地は山林転用、部落内の畑地は宅地への転用が増大しつゝある。この状況は次の表によつて凡その動向はわかる。

○農地転用地目別面積（昭和三七年～三九年）

転用地目	田	畑	計
宅地	七五、八〇六	一四五、一一九	二二〇、九二五
山林	一六、三二五	二〇四、九〇九	二八一、二二四
雑種地	九四、四二九	五〇〇	一四、九二九
合計	一〇六、六二〇	四一〇、五二八	五一七、二一八

18、  
肥  
料

藩政時代、明治、大正中期頃までは肥料は主としてカシキ（雑草類）牛馬糞、人糞尿等を撒布し、牛馬骨粉、油粕等で化学肥料の

区分	昭和40年	田	畑	地	計	田	畑	林	計	田	畑	地	合計
五	二五、三二七		一三、八一		四九、二〇八		一、〇〇七		一一、一一三		一、一〇五		六三、九〇一
四	五、三〇三		三、八一四		九、一一七		二、二一〇		三八、七二六		一、八〇二		五一、四一三
小計	三〇、七〇〇		二七、六二五		五八、三二五		三、二二七		五〇、九一九		一、九〇七		一一五、三二四
現況証明	二、〇一七		三、五二二		五、五二九		〇		一六、八二八		〇		二二、四二七
合計	三三、七一一		三一、七〇七		六四、四二四		三、二二七		六七、六二七		一、九〇七		一三七、八一

区分	昭和39年	田	畑	地	計	田	畑	林	計	田	畑	地	合計
五	二五、九一九		三一、六一		五七、六〇〇		一、八〇二		一四、九二五		七、三〇九		八〇、四〇四反
四	二、三〇六		一、一〇三		三、四〇九		二六、七一九		三〇、二〇〇		〇		三三、六〇九
小計	二八、二二五		三二、七二四		六一、〇〇九		五、二二三		四五、一二五		七、三〇九		一一四、〇一三
現況証明	一、八〇七		一、六二八		三、五〇五		六二八		四二、六二六		〇		四六、一一一
合計	三〇、一〇二		三四、四二二		六四、五二四		五、九一一		八七、八一		七、三〇九		一六〇、二〇四

区分	昭和38年	田	畑	地	計	田	畑	林	計	田	畑	地	合計
五	九、九二五		七二、六一〇		八二、六〇五		一、〇一一		二六、八〇六		〇		一〇九、四六一反
四	一、六二八		一、一一二		二、八四〇		二、八一〇		四三、四三三		〇		四九、一〇三
小計	一一、六二三		七三、七三二		八五、四一五		三、八一一		七三、〇二九		〇		一五八、五二四
現況証明	一、二二四		五、二〇八		六、五〇二		三、三〇六		五二、四二七		五、二二三		一一一、七二六
合計	一二、九一七		七九、〇〇〇		九一、九一七		七、一一七		一二五、五二六		五、二二三		三七一、三一〇

類は無かった。骨粉のことを「タテ」とよび、それを使用した農作物は実入り（成粒歩合）がよいと貴重視された。

その後大豆粕といつて脱脂大豆（搾粕）の玉が支那大陸から輸入されて窒素肥料として使用度が高かった。油粕も支那油、印度粕といつて搾粕の固形玉が輸入され煙草、水・陸稻等の農作物に使用された。湿田等には生石灰が耕起前後に使用された。これは酸性土壌の中和を化学的に処理したものと考えられるが、一般の農民は稻株、麦株やカシキ類の有機質を早く腐シヨクするものとする考え方が強かつた様である。

カシキ類や牛馬糞の大量使用は上作人（篤農家的存在）として評価され、堆肥の増産には町村農会が品評会等の催しをして優劣を競わしめ地力培養の方途として奨励した。

稲作肥料として青刈大豆、紫雲英等を麦作の畝間に植栽して敷込み肥料とする方法が普及し現在においても踏襲されている。

明治末期（明治二十九年頃）になり過磷酸石灰が使用され始めた。俗に「リン酸」と称して多く麦作等に使用された。

#### ① 鹿児島県立農事試験場における施肥法に関する試験研究

鹿児島県の試験場は明治三十三年に設立された様である。諸種の試験研究が行われた結果、県内に奨励された事は想像にかたくない所である。普通作物水稻に就て行われた項目を挙げると次の通りであるが、その結果については省略したい。

明治34年～41年 磷酸質肥料比較試験

明治42年～大正元年 骨粉施用法試験

37年～41年 県下各郡土壤に関する肥料試験

43年～大正4年 石灰加用試験

34年～42年 肥料三要素試験

44年～大正元年 過磷酸石灰施用法試験

44年～大正5年 硫安施用法試験

昭和10年～11年 加工大豆粕肥効試験

〃 智利硝石肥効試験

大正元年～10年 大豆粕施用時期試験

44年～大正4年 石灰窒素肥効試験

昭和5年～9年 加里肥料肥効試験

以上の試験施行の年次から見て明治後期から既に化学肥料の施用が行われ始めたことがわかる。

硫安、智利硝石、石灰窒素、過磷酸石灰等の施用肥効試験は明治末期から大正の初期頃に行われている。これ等の化学肥料が一般的に使用の域が拡大されて来たのは第一次欧州戦争による好景氣を迎えた頃からである。それまでは堆肥（牛馬糞を主とした）油粕、大豆粕骨粉等が主として使われている。

硫安を使用すると「田圃がやせる。後々肥料がきかなくなる。軟質米が出来る、米の等級が悪い、保存がきかない。」等種々の流言が飛んだという話もある。

「田圃がやせる」というのは当時の農民の知識からして土壌の酸性化と言う言葉の裏返しであると推測される。又軟質米が出来るというのは硫安が速効性の肥料であるので結実が早くなる。したがって実質がち密でなく米が軟いと考えられた生活の知恵と考えられる。このような経過があつて今日の化学肥料の施用期を迎えるに至った。

## ② 大正末期の金肥の使用状況

種別	年次	大正13年	大正14年	昭和元年	昭和2年	昭和3年
油粕		四一・一円	二六・五四円	五二・七六円	九九・三三円	九、一二・二四
大豆粕		—	五	一三・六	四二・六	八九・九
骨粉		—	〇	四七・九	五三・一	八九・〇
燐酸		一六・四	三六・九	二〇・四	二七・八	五二・四
硫安		六・〇	三九・六	二七・二	三七・二	五四・二
其他		×	六	二三	一四五	六九
計		六三・五	三二・四三・〇	六、三九・〇	二、七四・五	一一、一五・六

治によつて同島の燐鉱石が輸入され燐酸肥料の増産が行われたことが推測される。

薩摩求名村史の農事小組合史の中に肥料の共同購入を明治四十年から行つたとして、その主な肥料は過燐酸石灰、大豆粕、油粕、骨粉をあげている。本町の例を見ても大体において宮内信用組合の購買品の表が肥料の動向を物語っている。

化学肥料は終戦後急速に発達し多量に生産され使用されている。戦時中化学肥料工場が軍需産業へ転用された結果生産量は低下したが終戦後平和産業に復帰した結果によるものと考えられる。

戦後の肥料生産は施肥を合理化し各作物に適合した比率によつて合成した配合肥料、化学肥料、複合肥料といわれるものが多量に生産されつつある。本町における化学肥料は配合肥料、組合化成、尿素、塩化アンモニア、硫化アンモニア、過燐酸石灰、塩化加里などが主なるものである。その他石灰、石灰窒素がある。

大正十三年から昭和二年までの宮内信用組合（大正八年創立）の肥料購買状況を次の表によつて見ると大正の末期から昭和初年ごろの肥料の需要量が示されている。油粕骨粉大豆粕の他化学肥料の燐酸、硫安が使用されて居ることがわかる。

大正十三年に宮内信用組合が購買し組合員が農作に使用している。国分郷士史の中に松木部落の松鶴武盛がアンモニアを使用し始めたのは大正八、九年頃だといっている。第一次欧州戦争後グアム島の日本委任統

(図表A)

区分 品目	消費量	購入量		入金額	
		農協	業者	農協	業者
肥料	3,682 <sup>1</sup>	2,867 <sup>2</sup>	815 <sup>3</sup>	5,352万円	1,520万円

主要作物平均反当施肥量

(図表B)

(昭和33年)

作物名	堆肥	硫酸	過石	加里	石灰	石灰窒素	草木灰
	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫
水稲	200	10	10	4	10		0
陸稲	200	10	8	3	15		0
大豆	250	3	10	3	10		5
小豆	150	3	10	3	10		5
甘藷	200	7	10	5	10		0
大麦	250	10	10	5	10		0
ビール麦	250	10	10	5	10		0
小麦	250	10	10	5	10		0
裸麦	250	10	10	5	10		0
菜種	250	11	10	5	10		0
馬鈴薯	250	10	8	6	10		5

の肥料業者からの購入肥料があることが推測される。

#### ⑤ 清水村昭和二十四年の配給肥料割当量(作目制)

終戦後の肥料不足の時代から復興しつゝある平和産業の施設も復旧に向い化学肥料の生産も増加しつゝあったが、自由に肥料の購入も出来ず統制の枠内にあつて配給される状態であつた。次表は昭和二十四年度における町内の反当肥料割当を示すものである。これによると割当基準量の多いのは菜種の十七貫一〇〇匁、馬鈴薯の一五貫五〇〇匁、麦の一五貫〇〇〇匁、柑橘の一四貫三〇〇匁の順になっている。比較的少ないのは稲作の八貫一〇〇匁である。

昭和三十四年、東国分農協調査によると、菜種十五貫、小麦十貫、水稲十五貫、陸稲十五貫の施肥量になっている。水稲複合の成分は、硫酸アンモニア(三二%)、塩化カリ(二八%)、生骨粉(三三%)、油粕類(一八%)となっている。

藩政、明治、大正時代慣行肥料として使用された骨粉、菜種子粕、大豆粕、綿実粕は戦後化学肥料の不足で僅かに使用されたが特殊作物を除いては一般には輸入関係から品不足もあり使用されていない。

#### ③ 肥料の消費、購入量及び金額

本町に於ける昭和三十三年の消費、購入量を示すと上図の通りである。(図表A)

#### ④ 主要作物平均反当施肥量を示すと上の通りである。

化学肥料は硫酸、過石、加里、石灰が中心品目であり大体に於ての施肥基準量である。地域土質や慣行施肥によつて多少の増減はある。(図表B)

○昭和四十二年度単人町農協の購買実績から肥料の取扱い金額を見る三、九八五万円程度である。これは農協取扱以外

肥料配給割当表

(昭和24年)

作物名	割当基準 反 別	窒素質肥料		リン酸質肥料	
		反 当	総 量	反 当	総 量
水 稲	町反 527.6	貫 匁 4,530	貫 匁 23,900.280	貫 匁 3,600	貫 匁 18,993.600
麦	475.2	7,400	35,164.800	7,600	36,115.200
粟	97.1	2,900	2,815.900	2,600	2,524.600
甘 藷	88.4	1,400	1,237.600	1,500	1,326.000
大 豆	84.3	—	—	3,000	2,529.000
煙 草	11.0	9,000	5,490.000	2,500	1,525.000
馬鈴薯	16.2	8,500	1,377.000	7,000	1,134.000
菜 種	11.4	10,100	1,151.400	7,100	809.400
豆 類	4.2	1,000	42.000	3,000	126.000
柑 橘	44.2	10,300	432.600	4,000	168.000
燕 麦	0.7	1,500	10.500	2,000	14.000
その他	70.3	6,600	4,639.800	4,000	2,812.000

⑥ 慣行施肥

帝国農会の系統指導によって農作の施肥管理の面も改善せられた点が多かったが、地方によっては従来の施肥管理を依然として継続し各人各様に肥料を使用している点も見逃せないことである。農家自体の一種の勘によるものが多かったようである。これは自然条件と立地条件とによって支配された面もあったことは土着農民の農耕に対する潜在的『勘』によるものと、地域の慣行性を脱し得ぬものがあつたといえる。ことに有機質施肥を永年の慣行基肥として施用したことは一種の宗教的心理作用の働きと考えられるほど根強いものがあつた。これは化学肥料の存在しない時代の地力培養に基因するものである。

化学肥料の発達によってやや緩和された傾向にあるが、指導されている基準施肥料を軽視し酸性肥料の使用が多いとされている。



鯛車つくり(宮路武二)

旧清水村に於ける水稻肥料の種類と数量

品 目	3 反以下	3 反～5 反	5 反以上～1 町	1 町以上	村全体347町6反
堆 肥	貫 92	貫 214	貫 150	貫 177	貫 524,876
緑 肥	116	78	153	131	351,076
硫 安	4,721	6,375	3,922	3,166	16,358,056
過 石	4,082	4,219	3,083	0.833	12,110,384

それについて化成肥料、配合肥料を使用し、いわゆる中性又はアルカリ性の肥料の使用量が不足している傾向にある。成分的に見るとチッ素・りん酸分は大体において過用の傾向があり加里分は余り施肥されてない。

次に旧清水村の水稻反当施肥の慣行調査を紹介すると上表の通りである。

⑦ 次に水稻肥料に如何なる種類の肥料が使用され、どの位の量が使用されたかを農家規模別に仕

⑧ 慣行施肥と基準施肥の比較

(備考) 基準施肥成分量は普及便覧の第四号により反当収量二石を基準とし計算比較したもの。

水稻において規模別に見ると、三反以下は窒素は不足しているが他の規模別階層三反～五反、五反～一町、一町以上)において

旧清水村水稻 反当施肥慣行調査 (種類と数量)

単位 (貫) 総面積 347町6反

種類	耕地区分	3 反以下	3 ～ 5 反	5 反～1 町	1 町以上	平 均	村全体の使用量
堆 肥		貫 92	貫 214	貫 150	貫 177	貫 151	貫 524,876
緑 肥		116	78	153	131	101	351,076
硫 安		貫 匁 4,721	貫 匁 6,375	貫 匁 3,922	貫 匁 3,166	貫 匁 4,706	16,358,056
過 石		4,084	4,219	3,083	0.833	3,484	12,110,384
石灰窒素		3,026	1,812	2,666	1,416	2,423	84,222,348
トーマス燐肥		0,263	0,375	1,777	1,366	0,806	2,801,656
硫酸加安		—	0,312	0,111	0,250	0,144	500,544
硝 素		—	—	0,055	—	0,017	59,092
骨 粉		—	0,125	—	—	0,033	114,708
油 粕		1,368	0,625	1,272	4,250	0,988	3,434,288
コ ガ ネ		0,657	1,075	0,333	1,666	1,068	3,712,368
ニ シ キ		—	0,312	0,694	—	0,788	2,739,088
ホ ス カ ア		—	—	0,555	—	0,254	882,904
ミ ズ ホ		—	—	0,555	0,833	0,254	882,904
ミ カ サ		—	—	0,416	—	0,127	441,452
興 農		—	—	—	—	—	—
人 糞		—	0,437	—	—	0,208	351,076
木 灰		23,684	12,500	—	—	—	38,291,616
窒 素		0,526	—	0,277	—	0,208	723,008
燐 分		2,706	3,312	2,905	2,860	2,947	10,243,771
加 里		1,196	1,756	1,389	1,703	1,458	5,068,008
自給肥料代		0,999	1,619	1,434	1,375	1,033	3,590,708
購入肥料代		778円	1,207円	1,193円	1,212円	1,065円	3,701,940円
総 肥 料 代		1,444円	1,065円	1,285円	1,406円	1,449円	5,036,724円
石		2,222円	2,272円	2,578円	2,619円	2,514円	8,738,664円
反 収		石 2.042	石 2.018	石 1.800	石 1.950	石 1.951	石 6,781.676

## 5反～1町

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石 合
窒 素	2.905	2.800	103.75		
りん酸	1.389	1.550	89.61	83.57	1.800
加 里	1.434	2.500	57.36		

## 1町以上

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石 合
窒 素	2.860	2.800	102.14		
りん酸	1.703	1.550	109.89	89.05	1.950
加 里	1.379	2.500	55.16		

## 村平均

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石 合
窒 素	2.947	2.800	105.25		
りん酸	1.458	1.455	94.06	80.21	1.951
加 里	1.033	2.500	41.32		

## 麦施肥慣行と基準施肥量との比較

## 3反以下

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石
窒 素	2.451	2.800	87.53		
りん酸	1.506	1.700	88.58	77.56	2
加 里	1.064	1.900	56.00		

## 3反～5反

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石
窒 素	2.900	2.800	103.60		
りん酸	1.633	1.700	96.05	100.05	2
加 里	1.910	1.900	100.52		

## 5反～1町(麦作施肥)

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石
窒 素	2.434	2.800	86.92		
りん酸	1.549	1.700	91.11	82.3	2
加 里	1.280	1.900	67.36		

## 1町以上

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	
窒 素	2.570	2.800	91.48		
りん酸	1.385	1.700	81.47	79.89	
加 里	1.262	1.900	66.42		

## 村平均

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	
窒 素	2.600	2.800	92.85		
りん酸	1.540	1.700	90.58	88.96	
加 里	1.586	1.900	83.47		

では基準量を上回っている。  
 磷酸に於ては三反以下、五反～一町の規模においては不足し三反～五反、一町以下の階層においては基準に近く加里は各階層共に四〇～六〇%程度不足していることがわかる。大体において加里の施用はなされていないのが実状である。窒素過多と思われる作況に施用される場合が多く三原素としての立場からの施用は極めてすくない状況である。改良普及事務所が設置されてからはやや普及し上昇線をたどりつゝあるもので、将来の農作に好影響をもたらすものと期待されている。  
 麦作に於ては三反～五反の階層の施用量が基準量に近く他の階層は各要素共に不足している。裏作としての麦作の経済的価値判断によるものと思われ麦作の動向を考えさせる段階に來ているといえる。

## 水稻施肥慣行と基準施肥料との比較

## 3反以下 (清水村の場合昭和25年調査)

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石 合
窒 素	2.760	2.800	96.64		
りん酸	1.196	1.550	77.16	70.98	2.042
加 里	0.999	2.500	39.96		

## 3反～5反

三要素	慣 行	基 準	基準 100比慣行	平 均	反 収
	貫 匁	貫 匁	%	%	石 合
窒 素	3.312	2.800	118.28		
りん酸	1.756	1.550	113.29	98.77	2.018
加 里	1.619	2.500	64.76		

作物名	堆肥	硫酸	過石	加里	草木灰	石灰	石灰窒素
	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫
水陸稲	200	10	10	4	0	10	
陸稲	200	10	8	3	0	15	
大豆	250	3	10	3	5	10	
小豆	150	3	10	3	5	10	
甘藷	200	7	10	5	0	10	
大麦	250	10	10	5	0	10	
ビール麦	250	10	10	5	0	10	
小麥	250	10	10	5	0	15	
裸麥	250	10	10	5	0	10	
種菜	250	11	10	5	0	10	
鈴薯	250	10	8	6	0	10	
馬鈴薯	250	10	10	5	5	10	

(昭和32(1957)年の町の調査による)

## ⑨ 町内の反当施肥量

隼人町における主要作物反当平均施肥量を示すと表の通りとなっている。(註新町建設計画調査資料による。代表農家抽出による実績調査)

昭和三十三年は経済情勢から見ると不況の年で俗に鍋底景気といわれた。県下の物価も下降し地方も不況の線をたどったが、三十三年末から景気の立直りを見せ上向きの状況となった。

昭和三十三年末から上昇線にあった物価も三十五年二月からじり高となり十月の全市平均指数(三十年 一〇〇)は一〇五・九%と数年来の最高指数を記録した。

鹿児島市でも三十四年二月から上昇線をたどり五・六月の反落があったが八月の台風の影響によって生鮮食料品などの急騰で一〇四・三%と数年来の最高水準を示した。また九月には反落し十月再び上昇し十一月から反落し結局年間平均指数は一〇二・〇%で前年一〇〇・三%に比べて一・七%の上昇率となった。この間の反落は食料品の季節的・一時的な要因であって物価基調は強気に推移した。

## 19、病虫害と農薬

### ① 害虫

農作物に関する病虫害は作物の栽培と同時に発生したものと考えられるが比較的に少かつたとも考えられる。古くは嵯峨天皇弘仁三年(八一二)四年に大隅、薩摩の国に蝗害(いなご)が発生、つづいて弘仁六年(八一五)、十年に虫害が発生したことが伝えられている。

鹿児島県災異誌によると弘仁三年壬辰薩摩国蝗害あり。逋負(未納税)の稲五千束を免す。

又弘仁六年(八一五)薩摩国蝗害あり、調庸田租を免す。

弘仁一〇年(八一九)己亥、薩摩国蝗害あり、田租を免す。

と書かれている。蝗（いなご）や「うんか」などの害もすべて災蝗として考えられ調庸租を免ぜられていることから見ると大被害のあったことが考えられる。

農耕生活がはじまると台風や水害、虫害等が起ると神のなせる業と考えられ神に除災の祈禱などが行われた。現在でも其の風習が残っている。煙草耕作者が朝日三光院殿（日秀神社）に煙草の増収を祈願し煙草の本圃に御幸札をたてて煙草虫の被害を免れようとしている。ここに面白い笑話がある。

或る熱心な煙草耕作者が日秀神社の御幸札を煙草畑にたてて虫除けとしていたところ網の目の如くくいあらされたので、この旨煙草総代を通じて耕作組合や専売局に訴え出た。隼人町出身の技術員である知恵者の某が専売局員と耕作者の間にたつて「耕作者の畑の煙草虫はめくらで日秀神社の御幸札の字がよめなかったので恐れずにくい荒したものだろう。」と説明を加え、お札の靈験を肯定し、一方では耕作者の立場を擁護しておさまりがついた。

葉煙草の虫は一匹一匹捕殺し水田の「ウンカ」「ツマグロヨコバイ」は早朝種子油、石油、豊年油（除虫油ともいつて大正時代になつて欽油に除虫菊粉末を混入したもの）を点々とおとし油が拡がるに従つて竹笹で虫を払い落す方法が取られた。これは昆虫類の氣孔を油でふさぎ窒息させる方法で現在でも行われている。

## ② 捕虫網による駆除と黒椿象の捕殺

苗代の害虫は捕虫網（長さ五尺位の金網張りの箱形のものをも両方からもち短札形の苗代の茎葉部分を滑るように移動して網の中に入つた虫を金網ごとたき火にかざして焼殺する）で駆除した。

黒椿象（クロカメモシ）蝗虫は捕獲し瓶詰にして農会や学校へ持つて行くと一匁何錢で買い上げて駆除を奨励した。明治、大正の村会や農会の予算書を見ると黒椿象買上げ補助、あるいは買上げ費など、勸業予算や農会の事業費の中に必ず見受けられる。蝗虫の被害も大きかったので枯穂抜きや稲株切りを励行せしめた。

県農事試験場においても、あらゆる害虫駆除の試験が繰返された。その中から二・三化蝗虫などの調査、試験等を紹介すると次のようなことが行われている。

### 一、明治42年―大正4年 秋期枯穂中蝗虫存数調査

### 一、大正元年―大正3年 三化蝗虫駆除としての稲株切断（稲がらきり）試験

一、明治43年―昭和3年 二、三化螟虫発蛾時期調査

一、昭和3年

三化性螟虫稲株埋没試験

以上は試験の一部分に過ぎないが、虫害対策が県において行われ、その結果は役場、農会、小組合を通じて農家へ通達し励行せしめた。

黒椿象に対しては大正13年に薬剤駆除試験が行われ、昭和5・6・7年には稲の移植期と黒椿象襲来との関係が誘殺効果試験、駆除剤に関する試験などが行われている。しかし民間にあつては水田稲作の駆除は捕殺、注油、陸稲などにおいて草木灰に葉煙草粉末、除虫菊粉（のみとり粉）などを混合して手で撒きちらす方法が取られた。このような状態は明治、大正と慣行され、終戦時まで続いた。

終戦後は病虫害の駆除も進み強力な薬剤が生産されるに至った。駆除剤としてはBHC三％、DDT乳剤、馬拉ソン、バラチオン乳剤があり、病虫害駆除にボルドー、ダイセン、ミクロチン石灰、モンゼットなど多種多様の農薬が普及し病虫害の早期発見、適期撤布によつて効果をあげ往年の如き被害の状況はなくなったと言える。

これに併行して農業技術の進歩発展を来し農機具なども改善せられ高度の機材と技術が出現し天災地変などの不可抗力的自然現象による被災がない限り病虫害による被災は僅少にとどまり年々増収の方向を示している。

○稲株切り秋期稲刈取り後「稲がらきり」が励行された。これは螟虫の幼虫が稲株の中で越冬するので、稲株を切断すると幼虫も切断されるので、この方法がとられ大正元年の三化螟虫駆除稲株切断試験が螟虫の駆除試験である。

○発生期回避 明治 年から行われた二・三化螟虫発蛾時期調査があるが、この結果発生時期を避けて本県においては苗代播種期を六月一日以降とした。上場と下場（寒冷地と温暖地帯）とは多少の違いはあるが、大体において下場の水田地帯は六月一日以降とされた理由である。現在においても六月一日を中心にして播種するのが慣行となっている。

### ③ 害虫の種類

二化螟虫、三化螟虫、ダイ螟虫、ツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカ、セジロウンカ、トビイロウンカ、黒椿象、カラバエ、ハモグリバエ、ヒメハモグリバエ、ドロオイムシ、ツトムシ、アオムシ、タテハマキ、アワヨトウ、キリウジ、心枯線虫（出穂期）などがある。

昭和41年度における準人町内の農薬使用状況

(単位:ha)

水銀乳剤	水銀粉剤	モンケイ M 粉 剤	BHC 3%粉剤	D D T 乳 剤
120.0	80	800	728.0	34.4

D D T 粉剤	マラソン乳剤	マラソン 粉 剤	E P N 乳剤	S B 粉剤
10.0	2,320	1,840	300.0	1,300.0

バイジェット 乳 剤	バイジェット 粉 剤	デブソン 粉 剤	デブテレックス 乳 剤	D M 粉剤
240.0	—	250.0	—	—

④ 駆除薬剤

BHC、DDT、パラチオン、メチルパラチオン、EPN、ダイアジノン、デップ(DEP)、バイジェット(MPP)、エルサンバブチオン(PAP)、スミチオン(MEP)、メカルバム(ベスタン)マラソン、サンサイド(PHC)、ナック(NAC)(デナボン)ホップサイド(CPMC)、以上のような農薬があるが終戦後につくられたもので陸稲や注油の出来ない状況の天水田などにおいても使用可能で駆除が簡単に出来る事になった。

⑤ 水稻航空防除(昭和38～41年)

終戦後農薬の発達によって農作物の病虫害防除は個人より共同防除へと進み近年に至っては航空防除が行われるようになった。

町内においても浜之市海岸線の干拓地の広域集団地域や日当山東郷地区において行われている。その実施状況は下の通りとなっている。

⑥ 農薬の使用状況(昭和四十一年)

農薬の使用は病虫害の発生状況によって使用度合いが上昇することは必要であるが、近年においては発生駆除適期を捉えて適宜予防的防除が、農家において行われるようになった。

これは農薬の生産と普及が順調な歩みを見せていることによるものと言える。次に年次別の農薬別使用状況を見ることが出来る。多く使われている農薬はBHC三%粉剤、マラソン粉乳剤、SB粉剤、バイジェット乳剤、デブソン粉剤などである。販売者の農協や薬店の薬剤選択にもよると考えられる。

⑦ 除草の推移(農具より農薬へ)

水稻航空防除の実績

(昭和38年～41年)

区分 年次	水田 面積 ha	実施可能 面積 ha	散布面積 ha	延面積 ha	事業費 千円
昭和38年	944	400	185.2	185.2	641.96
39	944	400	110.0	220.0	880.15
40	944	400	200.0	400.0	157.04
41	944	400	314.6	614.6	2,702.0

昭和38年の実績によると10アール(一反)当たり348円～350円

全 39年 " (反当) 約400円

全 40年 " (反当) 約390円～400円

全 41年 " (反当) 約440円

S41年度においては薬剤の値上りが含まれていると推察される。

農作物の作付後における除草作業は古来から手取り農機具による中耕を兼ねた除草が行われ農業の発達に従って諸種の除草中耕具などが考案された。その主なるものは古来から、鋤、鍬が主なるものであった。その他地方によって、適地適作の農作物に適合した農具類が考案されたが急速なる進歩はなかったようである。

明治の革新期を迎え、西欧文化の輸入と共に文物は大いに発達したが、農具類は比較的に進展せず、除草中耕などは鋤、鍬の域を脱していなかった。明治の勸業政策の進むにつれ水田耕作などが進展して来たので雁爪（がんづめ）田掻き田車と除草中耕兼用の農具が出現して来た。

鹿児島県においては中耕除草に関する農具の試験研究が行なわれているが栽培農具の部の中耕除草に関する次のような件がある。

大正十三年 水田中耕除草機比較試験

昭和四年 右 同

昭和四年 水田中耕除草法に関する試験

昭和七年 水田中耕除草機に関する試験

昭和 十五年 水田畜力除草機使用試験  
昭和二十二年 右 同  
昭和二十一年 今村式人力用万能耕作機性能試験

右の年次を見るとやや遅れた感があるが、これは試験施行の年次に実質的にはこれ以前の使用がなされたことは事実である。水田除草について人力から畜力に進歩したことが僅かに発展の段階を示すものと言えよう。終戦後しばらく明治、大正の状況を踏襲し現在においても田車や雁爪除草、中耕が行われているが、戦後の平和産業の発達と共に薬剤による除草法が考えられ水田、畑作、造林等にも施用されるに至った。

○水稻移植栽培 畑苗代の場合播種後土壌処理による除草としてPCP水溶剤、CAT（シマジン）が用いられ生育初期雑草処理にDCPA（スタム）乳剤、DCPA・CHCH（グラサイド）乳剤処理がある。水苗代の場合は一年生雑草を対象にした生育期雑草処理の場合DCPA乳剤、DCPA、CHCH尿剤の撒布がある。

本田の場合において田植前の土壌処理、分けつ初・中期雑草処理、分けつ中、後期雑草処理があり多年生雑草処理があり多年生雑草を対象にする場合田植土壌処理、分けつ初・中期雑草処理兼土壌処理、水稻刈取後雑草処理などの方法がとられている。田植後の土壌処理については二種類有効成分が一種類のものや混合剤による二種類以上の有効薬がある。

単剤の場合PCP粒剤、MCPCA（マビカ）NIP（ニップ）CNP（エムオー）DBM（カンロン水和剤）など多様の薬剤が

使用されている。

○混合剤においてはPCP、アルMCP（バムコン）PCP、MCPB（マノック）PCP、MCP（クロス）などの粒剤多種の除草剤がある。

その外殺虫剤との混合剤や肥料その混合剤など日を追って農業は進歩の度を高めつつある。これらの除草剤も適宜の処理を行うことによって効果をあげ近年植付後の除草作業などの省力に大いに役立つている。

今後は農業の発達によって水稻直播栽培は勿論のこと畑作、特用作物などにおいても技術発達によって農作物の化学的処理栽培の方向へ農耕が指向されつつあるので農業経営の上に一大改革をもたらし構造改善事業と相まって経営規模の拡大や生産性の向上を来すことは程遠くない現象と言える。現在農業使用による公害問題も大きくとりあげられていることにも注目する必要がある。

## 20、小作農の発生

封建時代の幕府、藩、外城の財政は農業生産に財源を置いた。当時商工業の進歩は遅々たるもので手工業の域を脱していなかった。藩政時代門割制度があつて各村（現在の大字）毎に高調帳と言ふ検地名寄帳があつて、これに門名、名子数、門人員（男女別、大人子供）門高が記るされている。

門の名頭以下名子が、この門高に従属し貢租（税金）は物納で藩庁の倉庫に納め、門高に依つて藩庁に賦役に服する事になっている。この高調帳（高掛帳）に載っているのが本百姓であつて、高調帳に記載されていない農業人口は家人（或は下人）下作人などと言われていた。この下作人が純粹の小作人であつたと言えよう。多くは郷土の家付の農夫で郷土の持高の田畑の農耕に従事し代償として郷土の持高、知行高、抱地の一部分を耕作して生計の資としていた。抱地についての珍らしい碑文がある。国分市重久の本田与左エ門、慶応四年三月のもので、寛延二年の抱地由緒から記録されている。「阿多どん、本田どんによばいはできぬ、門は二重……」と歌われている。

この様な状況であつたが、郷土の知行高、百姓の門高から見ると殆ど自作農の存在は僅かにあつたと考えられる。鹿経大原口虎雄教授によると、古くから小作農があつたにしても極めて僅かで明治十年頃七%位であつたとされている。

明治二十一年鹿児島県の農事調査によると明治二十年頃は自作兼小作農が五四%に増加している。明治新政府になつて藩政時代の

諸制度が大きく変転して一大改革が行われた。土地制度、貢租様式も大きく変った。

明治三年八月に鹿児島士より諸郷へ掛持の抱地高をすべて其の郷々の士族（郷士）に売渡すべき旨仰渡され、その後抱地名目は郷士の自作地と言うことになった。このため鹿児島士は窮乏した者も多かったが諸郷郷士は抱地が自作地となったので明治、大正、昭和にわたって地主階級としての地位に移行することとなった。

版籍奉還後の明治新政府の政策として明治六年十二月田畑の売買譲渡を自由にし地租改正令を公布した。明治十二年地租改正によって門高である田、畑（土地）が自己の所有であることがはつきりとして来たが、明治十七年地券が交附されていよいよはつきりして来た。門高に縛りつけられて農奴的存在であった百姓（農民）にも新政府の影響が一般民衆と共に及んで来たことがわかる。

この改正で貢租の物納制（米を納めていた）から金納制にしたこと、税率を全国的に一定したことであった。これ以前は各藩によって年貢には差違があり政府はそのまま引きついでので統一する必要もあった。

この金納制は政府の財政を確立することが主眼であった。このことは土地制度の中で述べたので省略するが、改正による要点は次のようなことであった。土地売買や課税については土地永代売渡証の文面を見ると解明出来る。

### ① 地租改正の内容

(イ) 従来の收穫高標準とした。

(ロ) 税率を全国一率に三パーセントとした。（明治十年に二・五%に減す）

(ハ) 課税対象を耕作者から地主に改めた。

(ニ) 従来の石高を廃して、耕地面積を反別とした。

(ホ) 物納から金納に改めた。

明治十二年卯四月三日附の永代売渡証を見ると

上畠<sup>五間半</sup>二<sup>二間</sup>四畝<sup>半</sup>壹歩

大豆壹石五升三合

地価五百三拾貫文

と表示されている。大豆の收穫高が示され、面

積が五間と二十二間、四畝壹歩と示されている。

大豆の石数が收穫高で、これが石高で地価を示しているものと思われる。

(ヘ) 税率の引下げ

明治十八年の地所売渡証によると、

姫城村之内千三百六拾四番地字下新原五畝三

歩 上小川村の持主 野村平右衛門

価金參拾六円九拾七銭

## 地租金 九拾貳錢四厘

とある。明治十年に税率が二・五パーセントに引下げられたことが右の地価金と地租金の割合から見てわかる。

九二四厘÷三六円九七〇厘 ○・〇二五（二分五厘）

## ② 金納制の影響

貢租が物納（米石）から金納に変わり政府は財政の確保が出来て安んじた財政々策が出来たが、一方農民は金納に変わったことによって商人との取引が始まり商人の中間搾取が今までの貢租の上に加わる事になった。更に土地の自由売買が出来た様になった結果明治十年頃から以降土地の売買が行われ貧富の差が増大し地主と小作人の階級が生じて来た。農民は地租金納が重荷となった。

また地券が発行されると、この裏に「日本人民ノ此券状ヲ有スルモノハ其ノ土地ヲ適意ニ所有シ又ハ土地ヲ所有シ得ヘキ權利アル者ニ売買譲渡質入スルコトヲ得ヘシ」と書かれている通り土地の移動が自由になったことも手伝って農民の手から土地が地主や高利貸などへ移動した。

毎年豊年祭や雨乞い神社祭例等には大鼓踊や棒踊り、村芝居等が在方（ザイ）で行われ、この費用は麓の郷士であった旦那方から貸付けられ、この返済のために土地が質入れの形となり農地は旦那方の所有に帰した。耕作は売渡し人や質入れ人である百姓が続けて小作人として地主に上納米を収めることになり地主と小作人との関係が増加して来た。

## ③ 貨幣経済と農民

一方郷士階級や商人は金銭に通じていたので農民に金を貸し高利をむさぼった。

浜之市の商人森某が松永村の百姓次郎兵衛に金を貸し師走に金利計算に行ったところ普通ならば一・五が五だが、お前の利息は大負けにして一・五が拾五でよろしいと算盤をはじめて計算したところ百姓次郎兵衛は三拝九拝したとのことである。この様に金銭と計算に百姓は縁遠かったことを物語っている。

この様な状況下で土地を担保にし売買し土地は農民の手から郷士や商人、高利貸しへ所有権が移転して領主と農民の関係から地主と小作人の関係へ発展して行った。

#### ④ 明治の不況時代

明治十五、十六、十七年の頃は不況時代となり米一升が三錢三厘、四錢二厘の価格で農産物の価格は低落した。（清水村史による）鹿  
 経大原口教授の調査によると米一升八錢と書かれている地租改正後の米価一升当りを国分郷土史によって見ると次の通りである。木

（地租改正後の米価一升当り）

年次	木佐木正雄（清水）	原口虎雄（鹿兒島）
明治十三年	○錢○厘	一三錢八厘
十四年	○・○厘	一二・○
十五年	五・五	一〇・〇
十六年	三・三	八・〇
十七年	四・二	大イニ低落
十八年	五・五	上昇シテ七・八錢
十九年	四・四	六錢五錢
二十年	三・五	

佐木正雄氏の米価は地相場で清水村の一升当りの価格で原口虎雄教授の米価は恐らく鹿兒島相場ではないかと考えられる。上の図表の通り米価の低落は農民にとっては大打撃であり農家の経済は不振となった。

種目	町民が他町村に有する土地		他町村民の本村に有する土地	
	段別	地価	段別	地価
田	二五町六反		二八町六反	
畑	五一町二反		六三町一反	
宅地	五一町六反		一町七反	
山林	一一七町一反		三九町二反	
計	二四五町五反		一三二町六反	

土地の出入りと地価（昭和三年）

昭和三年の単人町の職業別戸数人員調査により自小作の状態を見ると次の通りである。

自作	自作兼小作	小作	計
三八七戸	九五五戸	六三五戸	一、九七七人
三、七〇六人	一、三七三人	一、二六九人	六、三四八人
男二、七〇〇人 女一、〇〇五人	女男 七二一人 六五二人	女男 五八二人 六八七人	

この表から見ると自作に比し小作戸数が約倍近くもあり自作兼小作の戸数が最も多い。小作戸数は全農家戸数は全農家戸数の三〇％位となっている。これ等の農

昭和三年町内自小作別農地

自小作別	地目		計
	田	畑	
自作地	二五九町四反	三三二町八反	五八二町二反
小作地	三八一町〇反	一九三町〇反	五七四町〇反
計	六四〇町四反	五一五町八反	一、一五六町二反

右の表から見ると水田面積の六〇％、畑地の

家の自、小作の反別区分を見ると次の表の通りである。

三八％が小作地で耕地の総面積一、一五六町歩

# 畑の面積

(昭和26.2.1)(単位町)

町 村	総 数	普 通 畑	切替焼畑	不耕作畑
日 当 山	444.0	430.0	6.3	7.7
隼 人	312.0	304.5	4.3	3.1

町 村	総面積	宅 地	採草地	放牧地	其の他水田用溜池
日 当 山	804.0	44.3	28.4	—	7.7
隼 人	99.4	95.9	11.7	—	3.5

果樹園、茶園、桑園面積

隼 人 4.5町

日当山 14.9町

## 昭和26年主要農産物面積と収穫高

(隼人町)

品 名	作付面積	収 穫 高	反 収	金 額
総 数	686町	0.865町	0.865町	
水 稲	656	58.30	0.987	
陸 稲	30	107	0.354	
甘 藷	16.2	608	375	
大 麦	—	—	—	
小 麦	223.0	3,173	982	
裸 麦	295	1,881	896	
馬鈴薯	12.7	26,297貫	286貫	
菜 種	12.0	72.0	6,000斗	576,000円

(日当山村)

品 名	作付面積	収 穫 高	反 収	金 額
総 数	372町	3,908町	1,050町	
水 稲	274	3,564	1,305	
陸 稲	98	344	0.354	
甘 藷	13.9	521	375	
大 麦	7.0	76	1,086	
小 麦	323.0	3,173	982	
裸 麦	295.0	3,237	1,097	
馬鈴薯	11.9	30,621	257貫	
なたね	85.0	1,360.0	16,00斗	10,880,000円

の約五割が小作地である。

藩政時代から明治初年の間高当時は極めて僅かであった小作地が昭和初年になると隼人町においても増加し藩政時代には領主（殿様）と農民の關係が地主と小作人の關係に変わり支配者が入替ったことになり農民の經濟的社会的立場は依然として変らない状態であることがわかる。

⑤ 大政翼賛会県支部と組合運動

昭和十六年（一九四一）日支事変も長期戦の様相を呈して来ると政府（軍）の命によって大政翼賛会が結成され各町村毎に大政翼賛会の機構が急速に組織された。組合員や労働者や思想的評論家等も非国民の烙印を押され要注意人物として監視・投獄等の災厄に会った。

## 農地面積

(昭和20年11月30日)(単位町)

町 村	総 数	自作地	小作地	買 収 済 積	売 渡 済 積
日当山	633.8	411.0	222.8	171.1	172.2
隼 人	680.4	334.8	345.6	238.8	238.5

## 農地面積と被買収、売渡戸数

(昭和25.8.1)

町 村	総 数	自作地	小作地	被買収戸数	売渡を受けた戸数
日当山	766.0	725.2	40.8	431戸	821戸
隼人町	677.5	573.4	104.1	519	1,663
清水	725.2	626.7	98.5	569	1,235

## 昭和26年農用地面積

### 田の面積

(昭和26.2.1)(単位町)

総 数	総 数	一毛田	二毛田	三毛田	不作田
日 当 山	242.9	57.4	91.9	92.2	1.4
隼 人	582.1	226.7	228.2	122.1	5.2

## ⑥ 小 作 料

小作料は田畑ともに大体上中下の三段階に分けられ一升蒔（五〇歩）を基準にして地料が決められていた。「上納が何斗入ってる」と言えば一升蒔の地料（賃貸料）であつて一反歩の土地であれば一升蒔の六倍、これが、一反歩の地料である。各町村の当時の状況を調べて見ると殆どが生産量の五割以上である。普通五割五歩、六割という所もある。藩政時代から七公三民と言われ貢租が生産量の七割で農民に残るのは三割ということである。小作地の上納（地料）も藩政時代の様式を踏襲して決められたものと考えられる。

上納米という言葉にしても地料の五割五分、納期の正月二十五日までとされたことや玄米の現物納めであつた事も藩政時代そのまゝの様式である。やはり此処にも領主と百姓、地主と小作人の関係を見ることが出来る。

明治、大正と時代が変るに従つて農村の人口も増加し耕作反別も狭少となり耕地不足の状況となつた。このような状況となるに従つて小作地の競合が始まり小作料の値上りを見る傾向が増して来た。煙草耕作の適地や浜之市方面の大根作適地等は必然的に小作料の値上りを来すことにもなつた。

昭和二年頃の調査で宮内校区の場合、所得反当標準を見ると地主六割、小作人四割程度となつてゐる。

### (1) 昭和初年の単人町の地主と小作人の所得割合

次の表は単人町の郷土史料に出ているものであるが、小作人と地主の所得、収支を見ると大まかではあるが、上納（小作料）が現物納めであることや生産高に対する小作料の割合等もよくわかる。

「新田二毛作反当り地主と小作人の所得」

（稲・麦・青刈大豆の場合）

#### △小作人の取得

一、玄米二石八斗八升（一升三〇銭）

八六円四〇銭

一、副収入五円五〇銭

#### ○地主の所得

一、上納米二石〇〇斗（一升三〇銭）

六〇円〇〇銭

一、麦（小麦）三三八〇銭  
合計取得高一二五円七〇銭

△小作人の支出

一、種子肥料代 二五円四三銭

二、小作料 六〇円〇〇銭

三、其の他雑費 五円八〇銭

合計支出 九一円二三銭

収支差引小作人所得 三四円四七銭

右の収支表は大正末期から昭和初年の富隈校区における調査の概況で「本表には小作人の労賃は算入なし」と調査要項の中にある。  
この表に現われている生産量二、八八石に対し小作料の二、〇〇石は六九%強、約七割の小作料となっている。更に旧湿田一毛作反  
当り地主、小作人の所得収支差引残の状態と小作料を見ると、

旧湿田一毛作一反歩に対する地主、小作人の所得

△小作人の所得

一、玄米二石〇五升 六一円五〇銭

一、副収入 三円五〇銭

合計 六五円〇〇銭

△小作人の支出

種子、肥料代 九円〇〇銭

其の他雑費 二円八〇銭

小作料（一石二斗） 三六円〇〇銭

支出計 四七円八〇銭

収支差引 一七円二〇銭

○地主の支出

一、田地租及附加税九円二〇銭

用水費其の他 二円五〇銭

計 一一円七〇銭

収支差引地主所得

四八円三〇銭

△地主の所得

上納米一石二斗 三六円〇〇銭

△地主の支出

一、田地租及附加税四円六八銭

一、その他雑費 一円八〇銭

支出計 六円四八銭

収支差引 二九円五二銭

右の収支表に依つて生産量と小作料との比較を見ても生産量玄米二石〇五升に対して上納米一石二斗で生産量の五八%が上納米として地主に納められている。この収支計算の中においても小作人の労働力（労賃）の評価は認められていないことがわかる。収支差引一七円二〇銭が小作農家の生活費、労賃等に当ることになる。旧隼人町における小作料は五割五分以上七割程度であつたことがわかる。

畑作においては大根、煙草を主作とする場合反当小作料は大体玄米一石（三〇円）で畑作の場合の収支は小作人に有利であつた。小浜校区においては「大体数字に表わせば地主三分の二、小作人三分の一の所得割合であつた」と記述している。

収支表の中から小作人収入二三円一〇銭、地主収入五二円五〇銭、計七五円六〇銭、これが反当生産量で当時玄米一升三〇銭であつたから反当收穫量は二石五斗位である。地主の収入五二円五〇銭は小作上納米で玄米換算すれば一石四斗強となっている。二石五斗の生産量に小作料一石四斗は五六%位である。約五割六分の小作料ということになる。

「百姓と胡摩の油は絞れば絞る程出る」という封建時代の流れが、明治、大正、昭和の中頃までつづき大東亜戦争中から終戦後の混乱の中にあつても地主に変わる軍、官の威力によつて根こそぎ供出させられた頃まで続いたのである。

以上に述べた様に何れにしても小作料の高かつた事は県下を通じて同様であつた。国分郷土史の中に旧清水村台明寺の米丸次郎吉は「その頃は小作料は一升蒔（五〇歩、二アール弱）に玄米が上田に三斗、中田二斗五升、下田一斗五升が平均だつた。不作の時など小作料を減らして貰えなかつた。小作料が、全收穫高の半分を越える様になつては殿様の時の上納の方が安かつた」と語っている。

国分市の田村金次郎は次の様に語っている。「小作人は上田一升蒔（五十歩）に玄米六斗位の収入があり、小作料として三斗を納入していた。（中略）敷根や国分麓の旦那に小作料を納めていた。残りの米は現金に換えるため売りに出しアワや芋が主食だつた。これは旧国分町や清水村の小作人の状態であつた。隼人町内においても同様の状況であつたと言える。」

松永平隈の川崎栄喜は当時の小作人の模様を次の様に話して居る。一升蒔に玄米五斗位の生産高に対して二斗五升から三斗の上納は辛かつた。小作人の通例として金肥は使えず生産量も低下し、たとえ病虫害が発生した場合豊年油・葉煙草の粉・木灰で駆除しても効果はあがらず不作の年でも地主は小作料は軽減してくれなかつた。このため小作人の娘は下女奉公や紡績に出嫁に行き息子は下男（でかん）奉公に地主の家へやられた。地主は大部分が重久の旧郷士であつた旦那や肥料商人や浜之市の森、山内といった人達や

松永の小地主であつた。

正月の二十五日までに、上納を納めると耕作面積のすくない純小作人は三・四月頃になると米を借りて食いつなぐ困窮ぶりであつた。

見次村米永藤蔵の話によると、上田で一升蒔（五〇歩）に三斗から三斗五升、中田で二斗五斗から三斗、下田で二斗から二斗五升の小作料で天降川の氾濫で収穫がない時でも小作料は仲々減じてくれなかつた。上納を納めたあとは砂糖や魚、漬物等と物々交換したりするのに充て盆・正月や家の普請や葬式の時以外は米の飯は食えなかつた。さつま芋と粟、米の混炊で小作人の飯は「ふの悪い唐芋は米を背負ちや居らぬ」といった程粗食で農民の生活は貧困だつた。「小作料がもう少し低ければ」と近辺の小作人は茶のみ話等にはしたが、どうする事も出来なかつた。小作料が高いなどと話した事が地主の耳にはいると小作地は取あげられたので泣寝入りする以外にはなかつた。

小作人階級の窮迫した状況がわかるし、重庄の元凶は小作料の高いことが原因であつた。

## ⑦ 小作問題

藩政時代から明治初年において地主と小作人の関係は極めてすくなく農民は幕府や藩庁への貢租のため門高の田畑を耕し土地に人間が従属している所謂農奴的な存在であつた。

郷にある仮屋や村々（今の大字）にある村役所は藩庁の出先機関で管内の名主、世話人等を動員して、税金である貢租（物納で米）を取立てる役所であつた。藩内の人民は藩主の意志によつて活殺自在であつたし、絶対的権限に服従を止むなくさせられていた。所謂領主と領民の厳しい主従関係である。この様な影響からして明治新政府発足後も地主と小作人の関係は領主と領民といった主従関係の域を温存して天災地変災厄（田の害虫）の被害があつても定められた上納米を正月二十五日までは地主に納めた。小作地は文書による契約は殆んどなく多くは口約束で定められ、小作人側から一升蒔何斗何升で作らしてくれと申入れて麦作からとか田（水稻）からとか、その時季に決めた。

麦作は裏作であるため小作人の権利であるとされ本田（稲作）が上納の対象として、これは上納（地料）を第一義として考えられていた。農地も地主の自由で肥培管理が悪いと地力が衰えるとか上納米が不足しているとか、選挙の時反対側についたなど種々の

理由で裏作を麦迄で土地を引上げて他の小作人に貸付る等地主の意志で自由になった。

この様な状況で地主と小作人との契約は口約束で取きめられていたが、これに違約する様なことは殆んどなかった。地主も小作人が天災地変その他火災病氣等の災厄に会えば小作料を延期したり減免したり、小作人を見舞ったりして道義的に主従的關係が温存されていたと言つて良いだろう。従つて小作爭議の表面だった爭議は大正初年迄類例を見ない様である。大正初年までは藩政時代の農民と同じ様に地主に対しては無抵抗の状態であつた。

#### (イ) 小村新田の爭議 (国分郷土史より)

明治三十四年 (一九〇二) 鹿兒島の桐原旅館に筵旗をおし立てた農民が続々と集つた。藩政時代から農民一揆の起らない薩藩であつただけに当時の人々は驚きの目をみはつた。この三百余人の農民こそ小村新田 (国分市広瀬) の耕作者の一団であつた。小村新田百十町は嘉永四年三月藩庁の經費によつて完成した干拓地であるが、如何なる關係から小作地化したのか資料がないとされている。

広瀬 中馬太郎右工門 (82才)

『小村新田は版籍奉還の時殿様が私有地に残されたものであると言つたり、地租改正後、島津家から土地の有力者を通じて地券をとり返されたとも言っている。』

広瀬 有馬十左衛門 (90才)

「島津家が小村新田を小作にされる時、小作料を値上げしない確約があつた。」

斯様にして殿様 (藩主) から地主に転化した島津家に対して封建時代の貢租様式を継続させられたのが小村 (広瀬) の小作人たちであつた。

明治二十年 (一八八七) 以後の状態を中馬太次右衛門の談話によつて見ると「明治二十年頃、小村新田は耕作權の売買が行なわれていた。反当百円、明治三十年には約四百円程であつた。耕地を手放す人の理由はいろいろあつたが、特に新田の堤防水路補修には出役が多く、小作料が反当七斗 (一二六立) から (一四四立) で平均反収一・五石 (二七〇立) で耕作者にとっては不利であつた。一方島津家の方でも明治二十年まで二回の台風をうけて復旧費に相当費した経緯もあつた。苦渋にみちた小作人の生活は終戦時まで続いた。」



隼 人 駅（昭和46年）



林田バス日当山ターミナル（昭和46年）